
貧弱能力者と狐狸翹翹

衛狸庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧弱能力者と狐狸廻廻

【Nコード】

N3236W

【作者名】

衛狸庵

【あらすじ】

稲葉龍土は新しい環境に胸躍らせる高校一年生。そんな龍土には自覚していない得意技があった。ある日の放課後、学年一位と言っても過言では無い美少女、橘明日香に誘われて、校舎裏の花壇へと来て見れば、其処には超能力者達が集まっていた。龍土にとって初めて見る超能力は驚きの連続……とは、行かない脆弱な物だった。そして、明日香から自分も超能力者だと聞いて、全然身に覚えの無い龍土は驚いた。そんな超能力者達が、物の怪達の争いに巻き込まれて行く……

第1話（前書き）

まだ書き始めたばかりなので、内容が、がらっと変わる可能性があります。

第1話

貧弱能力者と狐狸魍魎

・・・逃亡・・・

月も無く、墨を溶かしたかの様な暗闇の森を、一人の美しい少女が走っている。

森には道は無く、緩やかな斜面に木が生い茂り、下生えには、木々の隙間を埋める様に、熊笹が生い茂っている。

足元が悪い中、この暗闇で不思議な事に、少女は躓く事無く走っている。

何かに怯える様に、顔を強張らせて、何かから逃れる様に、後ろを振向きながら。

人ならば十五・六歳に見える少女は白く長い髪の毛を振り乱し、白装束の裾が乱れる事も気にかけず、ただ只管、走っている。

気品を漂わせる端正な顔立ちに、山吹色の瞳。白く透き通る様な肌。

その美しさは、人間の物とは違う妖艶さを醸し出していた。

少女の胸には、一尺余りの細長い布袋が、しっかりと抱かれています。

周囲を警戒しながら走っていた少女が、突然、何かの気配に気がつき横へ飛び退くと、元いた地面に光の矢が三本突き刺さった。

少女は着地し、大きな木を背にして身構えた。

ざわざわとした、暗闇に大勢の気配を感じながら、少女は周囲に目を配る。

「漸と、見つけたわ」暗闇から大きな男が現れた。

しかし、その男は人間では無い。二メートルは越える体軀を包む僧衣の下には、盛り上がる筋肉の四肢。そして顔には目が一つしかなかった。

一つ目の大入道は、少女の前まで来ると、

「逃げ切れるとでも思っておるのか」と、少女を睨み付けて言った。少女が大入道を睨み返す。

大入道の背後には、大勢の化物が控えている。その姿は、どれも醜く悍ましかった。

「よくも、我らが御曹司の命……刑部様に代わって成敗してくれる」大入道が錫杖を大きく頭上で振り回してから、少女に向かって身構える。

少女は怯える様に身を縮めながら、懐剣を両手で強く胸に抱きしめ、

「我では無い……」と、消え入る様な小さな声で呟いた。

「なあにい……」

「我では無い！時貞様を殺したのは我では無い！」

睨み付ける大入道に向って少女が叫ぶと、

「黙れ！大台の女狐が！では、御曹司が塵と成って消える時、何故傍に居た！何をしておった！」大入道が、辺りに響き渡る大声で怒鳴り返した。

「我が時貞様を見付けた時は、既に虫の息じゃった！」

少女が大入道の腹を揺さ振る大声にも怯まず言い返すと、

「その様な戯言、信じると申すか！第一、貴様の手に持つ御刀、我ら一族の宝と知ってか！貴様はそれを奪うが為、御曹司を手に掛けたのであるう！」錫杖を前に突き出し、再び大入道が怒鳴る。

「愚かな、落ち着いて考えてみよ。伊予の國、隠神刑部様の嫡孫、伊予西条ノ介、時貞様とも有ろう方が、如何に、大峰の主、笹百合御前の末娘である我と言えど、容易く手に掛けられると思おうて居るのか」

「何ぬかす！女狐が！笹百合御前が末娘、大台の葵。伊勢の天照坐皇大御神が宮、皇大神宮に我が一族の宝、風斬りの刀を清めに参る所を、我らが御曹司を誑かし、御刀を掠めんと、闇討ちしたは明白！」

「違う！」長い髪を振り乱し、葵が叫ぶと、
「ならば！」と、叫び、大入道は錫杖を引き、
「其の身、潔白と言い張るならば、其の御刀、先ずは我へと渡せ…
…話はそれから聞く」葵を睨みながら、大入道が手を差し出す。
葵は、差し出された手を見詰め、躊躇い戸惑っている。そして、
再び胸に強く抱き締め、包み隠す様に身を縮めた。
「ふん……それが何よりの証拠……」
その瞬間、少女の体は眩しい光に包まれた。
その光の眩しさに、大入道達は一瞬怯み顔を背け、再び少女の方
を見ると、其処には一匹の馬ほどの大きさの白狐が口に懐剣の入っ
た刀袋を啜え立っていた。
「おのれ……未だ、力が残っておったか」大入道は、警戒してその
場を飛び退き下がったが、同時に、十数匹の化物達が白狐に向って
飛び掛った。
「待て！」大入道が止めるのも聞かず、化物達は白狐に襲いかかっ
た。
次の瞬間、白狐の全身から、青白い凄まじい勢いの炎が舞い上が
り、飛び掛った化物達を一瞬で焼き尽くした。
「うぬ……」炎を上げる白狐を警戒して、大入道は身構え、錫杖を
前に突き出した。
白狐は大入道を睨み付け、身を低く構えたかと思うと、高く空へ
と舞い上がった。
「くそ、逃がしはせぬぞ。追え！」大入道の号令に、一斉に化物達
が飛び上がった。
青白く輝く白狐を追って、五十匹近い化物が群れを成し、追いか
ける。
追ってくる化物を気にしながら白狐は、目に涙を浮かべ、
「時貞様……何卒、御加護を……」と、呟いた。

時は四月。新しい年度の始まりである。

誰もが、気分を一新し、期待に胸を膨らませる時期である。

此処、斑鳩大学付属高校にも春は訪れ、新入生達を迎えた。

稲葉龍士いなばりゅうじも新しい環境に、少しの不安と共に、夢を抱いて心踊らせていた。

龍士は、身長百六十五センチ、体重五十五キロと普通の体型で、可も無く、不可も無くの容姿と言った所か。成績は、とりあえずは中学校の定期考査では、平均点以上は何とか確保していて、上の下、もしくは、中の上と言った辺りである。

この付属高校は、大学が付いていると言う事と、比較的設備が充実しているという事で、進学校とまでは行かないが、そこそこ偏差値が高い。

龍士の中学三年当初の成績では、かなり努力しないと、射程圏内にも入らないと言う状況であったが、苔の一念、ある事がきっかけで、龍士は必死に勉強して付属高校を受験し、見事に（か、どうかは知らないが）合格した。

夏休み返上、正月返上で、集中ゼミや、模試の梯子を必死にこなした理由とは、女子の比率が高いという事と、女子の制服が可愛いと言うことであった。

なんとも、下らない理由だと、一瞥するのは簡単だが、考えてもみて欲しい。

思春期の高校生活で、可愛い彼女が出来るかどうかで、正に、天国と地獄の差を味わう事になる事を……そんな、大げさな……

その為に龍士は、高確率のステージを選んだ。

五年前までは、お嬢様学校で知られた女子校の名残からか、此処は男女比率一対三と、つまりクラスの四分の三は女子だと言う、選択肢の広さが魅力だ。

何も、ハーレムなんて下らない幻想は抱いてはいないが、きっと自分の好みに合った子がいると確信している……相手の好みは考慮せずに。

そして、此処の女子の制服が可愛いとは、あくまでも個人の感想であり、全ての皆様が実感出来るとは限りません、と言う奴だが……詳しく説明すると、紺の襟無しイートンはダブルタイプで金ボタン。胸に校章のワッペンと後ろにはベルトに飾りボタン。広めのプリーツが入った紺のスカートは、膝下五センチ。特徴的なのは、中に着るブラウスが、少し小さめのセーラーカラー。ネクタイは臙脂、紺、鶯色と、学年によって変わる幅広蝶結びのリボンタイ。因みに龍士達の学年は臙脂色で、この色を三年間付ける事になる。

合服は、ブラウスに、紺のベスト。

夏服は、白で前開きの半袖セーラー服に、スカートは、広めのプリーツのが入った薄いグレーの生地、濃いグレーの細かいクロスの子エック。ネクタイは夏冬兼用である。

男子は……面倒なので普通のブレザー……男に興味は無い。

さて、入学式も済み、授業初日、龍士は努力の甲斐があった事を実感した。

ざくつと見回して、圧倒的な女子の量は、壮観なものである。

しかも、制服効果も相まって、可愛い子が多い！……中には、マニア向けの子も居るが……

その中でも、龍士の席から、桂馬が進む位置に座っている子が飛び抜けていた。

ストレートの黒髪を、ボブカットに切りそろえた色白の美少女だ。恐らく競争率が高いだろうが（ハードルも高いだろうが）第一目標に設定しても問題無しと結論付けた。とは言うものの、恋愛新兵の龍士にとって、攻略するのに、どの方面から切り崩して行けば良いのか、どの様に攻め込めれば良いのか、まったく想像が付かなかった。

とりあえず、情報収集と言う事で、たけひなあすか橘明日香と言う名前だけは解明した。

そうこうしている内に、無駄に二週間が過ぎた。

何処かのクラブに入る訳でも無い、帰宅部の龍士にとって、時間

が無い訳ではなかったが、時の流れるままにと身を任す本人は、きっかけ等作るうともせず、何時かチャンスは巡って来るだろうと、他力本願一色で染まっていた。

何の取り得も無い龍士に取って、きっかけを作るのは難しいと思っっている。

クラブに入らない理由も、絵心無し、音感無し、文才無し、体力、根性無しと興味も無し。

家に帰っても、質より量で売り出しているアイドルグループのポスターが張つてある部屋で、パソコンでエロサイトを見たり、ネットゲーを無料の範囲で楽しんでいる。

本棚の九十%はコミックで、五%がライトノベル、四%がアイドルの写真集、そして一%が夏休み等で読書感想文の宿題の為に買った、退屈なだけの小説と言った所だ。

当然、ベツトの下には、参考書等を表に並べて偽装した、H本が三十冊ほど格納された衣装ケースもある。……母は知っているぞ。

近頃は、エロ動画が主流ではあるが、やはり肝心な時は（何時だよ）H本に頼ってしまう。

こんな普通の（そうか？）龍士だったが、一つだけ普通とは違う所があった。

本人は、特にそれを自慢する訳でもなく、卑下する訳でもなく、体のほくる程度にか思っていない。

確かに、便利な時もあるのだが……本人は、それに頼る積りも無い。

話は戻って、中学までは休みだったはずの土曜日に、登校しなければならぬと言う、ゆとり教育の弊害にうんざりしながら、龍士は靴から、一時間目の数一の教科書とノートを取り出していた。

其処へ、待てば海路の日和あり、なのか、橘明日香が話しかけて来た。

「稲葉……君だったよね」

「えっ？」突然、声をかけられ龍士は、驚き顔を上げた。

明日香は微笑みながら龍士を見ている。龍士には、天使が微笑んでいるように見えた。

橋明日香は、身長は百六十cm、その細身の体型の体重はピーー（本人の希望により）だ。

ボブカットに切り揃えた美しい黒髪には、天使の輪が輝いている。整った顔立ちの大きな目は、何処と無く幼さを感じさせる。

「そうだけど」目の前に、第一目標のターゲットが居る事に、龍士は少し戸惑っている。

「今日、午後から……授業終わってから、時間あるかな？話があるんだけど」

明日香は微笑みながら、小首をかしげ、手を後ろに組み、可愛らしい仕草で聞いて来た。

「えっ！」可愛い明日香の仕草に、ドキツとしながら、龍士は、ギョルゲーさながらの展開に、淡い期待を抱いていた。

戸惑いながら黙っている龍士の態度を見て、明日香が、「どうかかな？だめ？」と、今度は少し表情を曇らせ、甘える様に聞いて来た。

「あつ、いや、俺、クラブ入ってないし、暇だし、用事ないし……」

中学の時に、女子の友達が居なかった訳ではないのだが、日頃から女子との会話が少ない上に、攻撃目標の明日香が、奇襲を架けて来た事に、龍士は少し冷静さを失っている。

「良かった。じゃ、二時に……ほら、校舎の裏に花壇があるでしょ」と、明日香が窓の外を指差すのを見て、龍士も釣られて窓の外を見る。

「そこで、待っててね」そう言って明日香は、とびっきりの笑顔を振り撒くと、

「うん、良いよ」龍士も笑顔で答えた。

手を振って明日香が自分の席へと戻って行くのを見送って、龍士は過大な期待に胸を熱くしていた。

本来なら、何の用か聞くものだが、天使の笑顔に完全にのぼせ、冷静な判断が出来ない。

龍士には、この日の授業は一切耳に入らなかった。

明日香の目的は何なのか分からないが、もしかして、告白？何て、浅き夢を見ていた。

更に、考えれば考えるほど、妄想は広がり、四時間目が終わる頃には、プロポーズの言葉はどうしよう等と、とんでもない異次元にまでワープしていた。

授業も終わり、ホームルームも上の空。

起立、礼の号令がスタートとなり、龍士は明日香の元に駆け寄った。

「あ、あの、橘さん……」龍士は、花壇でと言われたのに、フライング気味に声を掛けると、

「あ、ごめんなさい、先に行つててくれる？私、寄る所があるから」と、明日香は笑顔で手を振って、教室を出て行った。

残された龍士は、しまったと思った。

花壇で待つてと言われたのに、

「そうだよな、トイレとかあるよな……」と、焦った自分の印象を悪くしたのではないかと心配になって来た。

龍士は、焦った自分を恥ずかしく思い、花壇へと向う途中、冷静に成らなくてはと自分を戒めていた。

龍士が花壇まで来ると、先客が居た。ネクタイの色から龍士と同じ一年生のようだ。

龍士はその先客を見て、かなり気分が悪かった。

これから、この場所で明日香と愛の語らい（と、決め付けている）をするのに邪魔になると言う事ではなく、先客の姿にである。

身長は百七十五cmを越える長身に、肩幅の広いがっしりとした体格。

そして、決してイケ面とまでは行かないが、精悍な顔立ちで、どれも龍士には無いものだ。

龍士は、その先客に怒りにも似た嫉妬を覚え、ふてくされる様に、先客が立っている花壇の反対側で、明日香を待っていた。すると、もう一人、髪の毛が長い女子がやって来た。

龍士は、近付いて来たその子を見て、視線が凝固した。腰まである綺麗なストレートの黒髪、透き通る様な白い肌、気品を漂わせた端正な顔立ち。

まるで、美しい日本人形を思わせる美少女だった。

明日香も美少女だったが、またタイプの違う美少女だ。

明日香は、大きな目が印象的で、何処と無く幼さが残っている。

確認した訳では無いが、体型から貧乳である事は容易に想像出来た。

だが、この少女は、紅をさしてもいないのに、赤い唇が印象的な大人の雰囲気醸し出している。身長は百七十cmぐらいで、スリムな体型が、更に長身を印象付けていた。

その上、Bカップは確実な、はっきりとした膨らみは、明日香とは一線を画していた。

龍士は、この美少女率の高さとハイグレードに、この学校を選んだ事が間違いでは無かったと確信し、その美少女に見とれていると、明日香が小走りですべて来るのが見えた。

「お待たせ！」と、明日香は笑顔で、元気に声をかけて来た。

そして、やって来たのは明日香だけではなく、もう一人の少女がいた。

その少女は、身長は百五十cmに切れるぐらいの小柄な子で、丸顔に長い髪の毛を両サイドで三つ網にして垂らしている。

縁無しの上眼鏡の奥には、こぼれそうな大きな目が印象的だ。

龍士が見た限りでは、両翼の美少女達からは、かなり見劣りはするものの、可愛いと言葉は、十分に適用されると思っていた。ただし、肌は病的に白く、首筋や手首に膝下等、僅かに見える体は、がりがりのやせ過ぎの姿に見えた。

「さて、これで揃ったわね」と、明日香が皆を見渡しながら満足そ

うに言った。

「えっ、揃ったって……」龍士は少し驚き、俺だけじゃねえのかよと、明日香の誘いの意図を確かめもせず、勝手に勘違いして妄想を膨らませていたくせに、身勝手な怒りが沸いて来た。

「何の用なんだよ……」龍士は、自分への愛の告白では無いと分ると、掌を返した様に、不機嫌な顔になり、明日香を睨んだ。

「うふっ、分らない？」例によって明日香は天使の笑顔を浮かべて、小首を傾げ可愛らしくポーズを決めている。

「分らないから、聞いてんだろ」明日香の笑顔が、自分だけに向けられている物じゃ無いと知ると、その可愛らしさは逆に、龍士の神経を逆撫でた。

龍士の不機嫌そうな態度の理由が分らず、明日香は少し戸惑い、「どうかしたの？」と、訝しげに訊ねた。

自分の態度が理不尽である事は分っていたが、

「べっ、別に……」どうしても割り切れない気持ちの龍士は、更に不機嫌そうに横を向いた。

そんな龍士を無視するかのように、

「まあ、良いわ……」と、明日香がみんなの方へと振向くと、

『良いのかよ！もつと構ってくれよ！』と、龍士の心が叫べん……あまえんな。

「あのね、私達、仲間なのよ」と、笑顔で話す明日香を、男は眉をしかめる様に睨み、美少女は、横目で睨んでいる。

「身に覚えがあるようね……」睨み付ける二人を、予想通りである事を確信し、明日香は薄笑みを浮かべた目で睨み返す。

しかし龍士は、突然？仲間？だと言われても何の心当たりも無く、何の事だ？と、明日香を見た。

「身に覚えがあっても、自分からは言い出したくはなさそうね……良いわ」何やら意味ありげな言葉を残して、明日香は花壇の傍へと向った。

明日香は皆が注目する中、レンガを五段ほど積んで囲まれた、花

壇の脇に立ち、両手を左右に広げ、力を込める様に眉間にしわを寄せている。

「ううう」明日香が小さな唸り声を上げたかと思うと、花壇の中に並べてある直径十cmぐらいの石が一つ揺れだした。

そして、明日香は両手を下ろし、ゆっくりと振り向いて、

「これが、私の力……」と、薄笑みを浮かべて言った瞬間、花壇に並べてあった直径十cmぐらいの石が五つ、ゆっくりと浮かび上がり、明日香の肩の高さぐらいで止まった。

周りの皆は、驚いた表情を浮かべ、黙って見ている。

「ふう……」と、明日香は肩を落とし力を抜くと、浮かんでいた石が一斉に花壇へと落ちた。

「念動力……」男が呟くように言うと、

「そう、これが私の能力よ」明日香は笑顔を浮かべ自慢げに言った。「凄いや……」龍士は目の前で始めて見る、所謂、超能力いわゆるに感動している。

「ねっ、凄いでしょ！」龍士の驚きの言葉を聞いて、得意げに両手を腰に当てて、明日香は龍士に向かって言った。

「そうね、五十cm以内なら、二十kg程度の物を動かす事が出来るのよ」

「五十cm?じゃ、それ以上は?」得意げに説明する明日香に、龍士が訝しげな目で尋ねた。

「それ以上って?」龍士の言葉が良く理解出来ず、きょとんとした顔で明日香が聞き返した。

「つまり、一m先とか、二m先とか……」龍士が具体的に問い直す

と、
「あ、無理無理。私は五十cm以内の物だけなの」明日香は、掌をひらひらさせて、あっさりとは否定した。

「……それって……?手?で持った方が早くね?」と、当然の感想を、龍士は明日香にぶつけた。

「なっ、何言ってるのよ!手を使わないって所が凄いなと思わないの

「自分のアイデンティティを否定する様な龍士の感想に、明日香は激しく抗議した。

「いや、そりゃ……凄いと思うけど……」絶対に手で持った方が早いなと、龍士は思ったが、明日香の剣幕に、明日香に嫌われたくないと言う抑止力が働き、それ以上逆らわなかった。

「なによ」明日香は、龍士の煮え切らない言葉が気に食わないのか、上目遣いで睨んでいる。

「いえ、別に……」龍士は明日香の、怒りの視線に耐えられず、目をそらして誤魔化した。

その態度が、明日香にとっては更に気に食わなかったみたいで、「だったら、あの石を五個手に持って御覧なさいよ。五個も持ち切れないでしょ」と、花壇の石を指差した。

「確かに、重さは別として……持ちきれなか……」両方の掌を眺めながら、龍士はシユミレートしている。

「それに、お砂糖を零した時とかは？拾える？」

「えっ？砂糖を？……無理だろ」普通、掃除機で吸うだろ。

「じゃ、お水は？」

「無理に決まってるだろ」覆水盆に返らず。

「ほら、御覧なさい。やっぱり凄いでしょ」と、強引に持論を正当化させた。

「そうか？そうなのか？」と、龍士は未だに納得していないが、これ以上突っ込んで、ページが……いや、時間の無駄だと思い、黙っている事にした。

「あのね、物を動かすには、私の体の周りにフィールドの様な物を張らないといけないの。だから、そのフィールドが張れるのが五十cmなのよ」

不機嫌そうに睨みながら説明する明日香を見て龍士は、

「フィールドって何でしょう？」明日香の機嫌を取るように低姿勢に笑顔で質問した。

「よく分らないわ。それが分れば超能力って解明出来るんじゃない

の「御説ごもつとも。

「ただ、仮説として、脳波が超能力に関っているとして、脳波によって形成された力場みたいな物じゃないかなと思うの」「明日香が腕を組み、考えながら説明したが、

「力場？」龍土にとつて、あまりにも抽象的な言葉が、具体的に想像し難い様だ。

「力場……フィールド……なんか表現し難いわね……まあ、能力の元となる物だと思うの。それは人によつて、能力の違いによつて、それぞれ違う形で形成されると思うの」

「例えば？」

「私の場合は、動かす対象を包み込む様に形成している見たいね」

「包み込むか……なんか、アニメとか見ると、電波つて言うか脳波をびびびつて飛ばして、物を動かしているイメージなんだけどないまいち、明日香の説明が龍土には、しっくり来ないみたいだ。

「うん、でもね、質量のある物を動かすには、何らかの力を加えないと動かない訳で、一般に言われる脳波とかを飛ばして動かすなんて、物理的にありえないと思わない？」

「えっ？どうして？」

「動力も無いのに、脳波当てても、物が動く訳無いじゃない」

「動力？」

「例えば……車は、ガソリンとエンジンで動くでしょ。つまりエネルギーと動力。二つがあつて初めて物が動くの。脳波は恐らくエネルギーと考えられない？だったら、エネルギー単体で物は動かないわよ」

「じゃ、何で今、石が動いたんだ」

動力とかエネルギーとか言われて、自分の思っている超能力に対するイメージとは掛け離れた説明に、龍土は戸惑っている。

「あくまでも推測の域は出ないけど、脳波なんて誰にでもあるでしょ。だから、脳波をフィールドに変換出来る事そのものが超能力だと思ふの。電力と言うエネルギーが磁力と言う力場に変換出来るみ

たいにね」

「エネルギーを変換する……」龍士は何とか理解しようががんばった。

「私の場合、フィールドを張ると、対象の物質の質量が、それに働く重力に干渉するのだと思うの」

「じゃ、フィールドに包まれた物全てが動くのか？」

「そうね、それが総重量で二十kg以下ならね」

「さっきの石は？」龍士は花壇の方を見た。

「あれは、対象の石だけにフィールド張ったのよ、それくらいのコントロールは出来るわ」

明日香が腰に手を置いて得意げに説明し終わると、後ろを振り向き、

「とりあえず、私の自己紹介は終わり。次はこの子ね」と、先程一緒に来た眼鏡の少女の肩に手を置いた。

少し怯える様に、明日香の後ろにいた少女は、明日香に紹介されて、更に身を縮め怯える様に下を向いた。

「山添亜美ちゃん、三組で、私と同じ此処の中学からの進級組みよ。彼女も凄いわよ。そうね……田原本君、ポケットの中に何か入れてくれない？亜美ちゃん後ろを向いているから」と言っ、明日香は亜美の両肩を持って、後ろを向かせようとした。

「だったら、こっちに、今、何が入っているか、分るか？」と、田原本と呼ばれた男は、上着の右のポケットを指差した。

明日香は、何時の間にか、又、明日香の後ろに隠れている亜美に振り向いて、

「亜美ちゃん、分る？」と、訊ねると、亜美はぼそぼそと何か呟いた。

「十円玉が二枚だって」明日香は自信たっぷり、笑顔で答えた。

「透視能力か？正解だ……」田原本はそう言いながら、ポケットから十円玉を取り出した。

「ちょっと違うけど、ほぼ正解」明日香はおどける様に、人差し指

を立てている。

「どう、違うんだ？」田原本は無表情のまま、尋ねた。

「順番に説明するね。つまり、正しくは？透視も出来る？なの。ただし透視の能力は厚さ五mmまでの単一素材の物だけね」

「単一素材？」

「そう、今みたいに、制服の生地とか、たとえば、紙とか」

「えっ！じゃあ……」と、龍士は慌てて、内股気味に股間を両手で押さえた。

田原本も無表情のまま、同じ様に押さえている。その二人の姿を明日香が見て、

「馬鹿！彼女がそんなもん見るか！」と、顔を真っ赤にして二人を怒鳴りつけた……そんなもんで……あんな……

亜美も顔を真っ赤にして、後ろを向いて両手で顔を隠している。

「第一、彼女には見えないわよ」明日香がまだ顔を赤くしながら、ぼそつと言った。

「えっ？だって五mmだろ。服ってそんなに厚み無いよ」龍士はまだ股間を押さえている。

「一枚しかだめなの、下着も入れて二枚以上は着ているでしょ」

「一枚……だけ？」

「あのね、透視って、一般的に物がすけて見えると言うイメージがあるけど、彼女の場合は少し違うの。見えるって事は、普通、物体に光が当たって、その反射した光を見ているわけ」

「うん……」再び、物理だか化学だかの説明が始まりそんな事に、龍士が身構える。

「布は別として、板や鉄板が光を通す？」

「そりゃ、通さないけど」

「物質は、元素単体の物を除けば、原子がくっついて分子を作って、その集合体なのよ」

「彼女は、恐らくその分子の隙間に、さっき言ったみたいに、フィールドを超高周波にして物質を透過させているのだと思うの」

「それが反射して、見えるって事か？」

「ううん、反射じゃ無いと思うの。表面の物質を透過させて、奥にある物質を感じて、脳に映像として結んでいるんじゃないかと思うんだけど……それで、一枚目の物質の、分子の隙間と言うスリットを通過すると周波数に変調する、だから二枚目は通らない。通らないから感じる事が出来る……じゃ、ないかな」明日香が小首をかしげ、考えながら説明している。

「通らないから感じる？」

「うん……そうねえ……あつ、稲葉君。透明人間って知ってる？」

明日香が、可愛い顔に笑顔を浮かべて、龍士に尋ねると、

「えっ？会った事は無いけど……」と、ボケた答えを返し、

「あたりまえでしょ！」と、明日香は激怒した。

「どんな者が知ってるかって聞いているの！」

「あつ、ああ……体が透明なんだろ……」言われて見ればボケた答えだったと、龍士は反省しながら、答えなおした。

「そうよ……それで、透明人間って目が見えると思う？」呆れながら、今度はボケるなよと、龍士を睨みながら明日香が再び尋ねた。

「えっ？何？ええと、見えないの？」明日香の質問の意味がよく分らず、龍士は訝しそくに眉を寄せる。

「あのね、物が見える仕組みは、目の眼底に有る網膜に光が当たって見えるの。網膜は当たった可視光線を視覚信号に変えるのよ。透明だと、光は通過してしまうわ。つまり透明人間の目が見えるのはおかしいの」

「なるほど、網膜を光が通過したら見えるはずないか……」

「そう、だから亜美ちゃんも、フィールドが通過した物質は感じられない、つまり見えない。そして、通過しない物が見える。亜美ちゃんのフィールドには、私と同じで限界は有るけど、視力と同じ程度には見えるらしいの」

それを聞いて、龍士は一瞬にやりと笑い、

「へえ、じゃ、五十cm以上離れていても見えるんだ……」冷やや

かな目で明日香を見た。

「……なによ……」龍士の嫌味っぽい言い方に、明日香は不機嫌そうに睨み付ける。

「あつ、いえ、別に……」睨まれた根性無しの龍士は、思わず目線を逸らした。

最後までツツパリ通せないなら、最初から喧嘩など売らない事だ。

「あと、材質の違う物が張り合わさった様な複合素材も駄目。物質が変われば分子の結合も変わるから、同一の周波数では透過出来ないの」

「フィールドを通過さす為には、物質毎の特定の周波数があるって事か」

「そう、それと、通過すると周波数が変調するみたいだし……」

「だけど……物と物の間にある空間はどう考えるんだ？真空じゃないんだから、空気と言う物質……じゃないか？少なくとも、空気の分子はあるだろ？細かい埃だって」

「あくまでも密度の問題じゃないかしら？それと空気は分子じゃないわよ。酸素や窒素の原子や分子が集まったもの。あまり突っ込んだ事聞かないですよ。私だって推測の域を出ないんだから。専門家じやあるまいし」最後に、再び明日香は不機嫌そうに腕を組んで、龍士を睨み付けた。

「うっ、まあ、そうだけど……」龍士は、明日香の機嫌を損ねる結果となる話題に、聊か、うんざりし始めていた……理系の話は詰まらないし……

「残念な事に、そう言った意味で、亜美ちゃんはそんなに多くの物が透視出来る訳じゃないの」

「何で？」

「良く考えなさい。この世の物の多くは？塗装？してあるでしょ。

だから無理。それにダンボールみたいに八二カム構造で張り合わせてあるやつとか、ベニヤ板みたいに何層にも張り合わせてある奴も、当然駄目ね」

「じゃ、言つて悪いけど……あまり利用価値があるとは……」
遠慮気味に言つた龍士の言葉に、明日香は組んでいた腕を腰に当てて、

「そうね、でもその方が良いんじゃない？見たくない？物？だつてある訳だし……あんた達とは違つて……」と、男子二人を蔑んだ目で眺めた。

男子二人は、何の事が直ぐに気付き、目を逸らした。

「それより、彼女の本当の能力は、透視を含んだ超感覚なのよ」

男子二人を睨んでいた明日香は、気分を切り替えたかのように、笑顔で話し出した。

「超感覚？」

「そうよ。目に見えないものが見える……たとえば……人の心とか」

「テレパシーとか言う奴？」

「どうかな？テレパシーつて、イメージとして通信じゃない？」

「そう言えば……そうか……」

「オカルトっぽくなるけど、人のオーラと言うか、生体波みたいな物が見えるの。だから貴方達が超能力者だつて事が分かつたのよ。」

そつでしよ稲葉君、田原本君……三輪^{みわ}さん」

明日香は三人の名前を呼びながら、得意げな顔で一人一人を見回した。

皆の間に、沈黙が続いている。

三輪と呼ばれた少女と田原本は、厳しい目付きで明日香を睨んでいる。

元々、気の弱い龍士は、その緊張感に圧倒され、不安げに、きよるきよると一人一人の顔を伺っている。

沈黙を破つて、

「じゃ、今、私が何を考えているか分かるかしら？」三輪が腕を組んで睨みながら明日香に尋ねた。

すると明日香は、睨まれている事を、まったく意識しないかのように、微笑みながら後ろの亜美に振り向いて、

「分る?……」と、尋ねて亜美の口元に耳を寄せた。

聞かれた亜美が、何やらボソツと一言呟いたのを聞いて、

「退屈そうだった」と、三輪に振り向き明日香が答えた。

それを聞いた三輪は、表情を変えずに、

「正解……それから?」と、冷たい感じの口調で聞き返した。

明日香は少し困った様な表情を浮かべ、

「それ以上は無理よ……」と、首を横に振った。

「具体的に考えている事なんて、仮に見えたとしても、言語が違うプログラムみたいで、意味不明だわ」

残念そうに、そんなの無理と言わんばかりに、手をひらひらさせながら明日香が言うのを聞いて、

「どう言う事?」と、三輪は訝しげに眉を寄せる。

「人それぞれの認識なんて、個々に違うと言うわけ。心と言うか、頭で思い描く事を、つまり思考の方法を誰かに教えてもらった?自然と、身に着いた物でしょ。言葉はルールに則って、統一された物を習得するけど、言葉に至るまでの脳内のシークエンスみたいなものは、個々に習得したもの。同じ人間なんだから、基本は同じだと思うけど、二進法や十六進法みたいにね。でも、その羅列は個々によって違う。だから、大雑把な喜怒哀楽程度の物や、特殊な物。つまり私達みたいな超能力者が持つオーラなら見て取れるみたい」

龍士は明日香の説明を一生懸命理解しようと努力したが、自分の概念の中に無い物を説明されても、理解出来るはずも無く、まあ、単純に感情が見えると言う事で良いかと、諦めた。

「それで、俺達の、そのフィールドだっけ、脳波から変換された力場が見えたのか」

「え?そうじゃないわ」

邦彦の質問に、少し戸惑い明日香は邦彦の方を見た。

「誤解してると思うけど、普段何も意識していないのに超能力が…つまりフィールドが漏れ出したりはしていないわ」

「どう言う事だ」

「脳波をフィールドに変換するにもエネルギーが必要なのに、普段何気なく超能力が漏れていたら体力が幾らあっても足りないわよ」「なるほど」

明日香の当たり前と言えば当たり前の説明に、邦彦はあっさりと納得した。

「亜美ちゃんが見えているのは、たぶん、もつとオカルトっぽい範囲の物だと思うの。だから具体的には分からないわ。そうね、感覚的なものね」

邦彦にそう言うと、明日香は皆の方へと向き直り、

「これで私達の自己紹介は終わり。じゃ次は退屈している三輪さん、自己紹介してくれない？」と、三輪に近付きながら話し掛けると、「……そうね、だけど自己紹介する意味が分からないわ。私達を何の目的で集めたの？その理由しだいで判断したいわ」と、明日香を更に厳しい目で睨んで尋ねた。

「あつ、ごめんなさい。そうね、そうよね。私、浮かれちゃって」思い付いたかのように、立ち止まり、一瞬、目を丸くしたした明日香は、

「大した事は無いの。お友達になりましたよ！って事なの」と、手を大きく頭上に広げ、笑顔を炸裂させた。

一人、にこにことしている明日香とは対照的に、三輪と田原本は白けた顔で明日香を眺めている。

「……それだけ？」

「それだけ」

短い会話の後、

「帰る」と、言って三輪は振り向き、その場から立ち去ろうとした。「あつ！待ってよ、三輪さん！何ですよ？」

三輪の突然の行動に明日香が慌てて後を追い、三輪の後ろから腕を掴んで止めた。

「何で？それこそ聞きたいわ。何故、今日会ったばかりの貴方達と友達に成らなきゃいけないのよ」掴まれた腕を振り払い、煩わしそ

うに三輪が尋ねた。

「いけなくは無いわよ。だって、だって……仲間だよ……超能力の仲間だよ」

三輪の冷たい態度に戸惑いながら、明日香が縋る様に再び三輪の手を掴み、

「ねえ、皆、正直に言っつてよ！」と、振り向き皆を見回した。

「ねえ、寂しくなかった？ねえ、怖くなかった？辛くなかった？自分の事が、人に知られたらどうしようとか、ばれたらどんな目で見られるだろうかって……ねえ、正直に言っつて！」

明日香の言葉に皆は黙ってしまった。その通だったから。

「ねえ、三輪さん！どうなのよ！誰にも言えず、周りに怯えて……寂しくなかった？」

三輪の顔を覗きこむ様に明日香が尋ねると、

「……」三輪は黙ったまま、明日香から目を逸らした。

「何も、毎日べたべたしよつて事じゃないの、同じ境遇で、気兼ねなく喋れて、お互いの事が……相談出来て……心許せて……安心出来て……助け合えて……」

「橘……」

龍士には、今まで生意気なぐらい強気で説明していた明日香が、今は、まるで助けを求める捨てられた子猫の様に弱弱しく見えた。

龍士は明日香に近寄り、此処は御近付きに成るチャンスだと明日香の肩に手を置いて、

「俺はなる！友達になる！なっ、なっ」と、慰める様に言いながら明日香の顔を覗き込んだ。

「稲葉君……」龍士を見る明日香の目には薄っすらと涙が浮かんでいた。

可愛い顔に涙を浮かべる明日香を見て、龍士の心臓はドキッと高鳴った。

更に此処は、ポイントの稼ぎ所だと判断した龍士は、普段とは打って変わって真面目な顔で田原本に近付き、

「田原本……だっけ、お前はとうなんだ」と、普段より一オクターブは低い声で渋く決める。

「そつ、そうだな……」霧囲気の豹変した龍士に戸惑いながら、「そんな単純な理由だったなら、拒否する理由も無いな。いや、むしろ歓迎するよ。橘、俺も同じだったから」田原本は微笑みながら明日香に答えた。

「田原本君……」明日香も微笑みながら田原本を見る。

「変に勘ぐってたよ。誘われた時、何処かではれてて、脅されるんじゃないかって」

微笑みながら見詰める二人を、面白く無さそうに横目で見ながら、

「三輪……君はどうなんだ？」龍士は、三輪に尋ねた。

「ふっ……そうね、煩わしく無い程度なら……」肩の力が抜けた様に、三輪は微笑みながら答えた。

「あ、ありがとう！ありがとう皆！お友達よね、ねっ、ねっ」

余程、嬉しかったのか、明日香は、はしゃいで一人一人に両手で握手して回った。

「それでは、三輪さんどうぞ！」

五人は誰も居ない食堂に移動して、缶ジュースを飲みながら、六人掛けのテーブルに座っている。

「……どうぞと言われても……私は二組の三輪翔子^{みわしよこ}」

まだ、はしゃいでいる明日香を、白けた目で見ながら、翔子が短く答えた。

「で？」明日香が隣に座っている翔子に、目を輝かせて迫り尋ねる。

「で？」迫る明日香を、迷惑そうに体を引いて翔子が聞き返す。

「そうよ、どんな力なの？」

「えっ？知っているんじゃないの？その子の能力で……」

亜美の能力で、全てばれて居ると思っていた翔子が、呆れた様に尋ねると、

「だから、其処までは分からないわよ」明日香は、両掌を肩の高さ

に上げて、残念そうな顔で首を左右に振っている。

「こいつ……」 何か騙された様な気分で、不服そうに明日香を睨んでいた翔子は、

「はぁ……じゃ、田原本君」溜息を一つ大きく付いて、自分の前に座っている田原本を見た。

「えっ？」呼ばれた田原本が翔子を見る。

翔子は右手の人差し指を、テーブルに置いている田原本の手に近付けると、

「わちっ！」小さな火花が飛んで、田原本は慌てて手を引つ込めた。

「これが私の力。静電気を起こせるの」

驚きながら見ている田原本に、少し気味の悪い笑みを浮かべて翔子が言った。

「静電気って、あのパチパチする奴？」手を摩っている田原本の横から龍士が尋ねると、

「そう」翔子が、あっさりと答える。

「こすれば出来る奴？」今度は、訝しげに龍士が尋ねると、

「そう」再び翔子は、無表情のままあっさりと答えた。

「別に超能力でなくても……」龍士は腕を組みながら、首を傾げる。「何？ご不満？」その龍士の態度が気に食わなかったのか、翔子はぞつとする様な目で龍士を睨み付けた。

「あっ、いや、そう言う訳じゃ……」翔子の眼力に押されて、龍士は翔子から目を逸らした。

そんな龍士を見て、翔子は悪戯ばい笑みを浮かべながら、

「……そうね。稲葉君、そのコーラ持ってみて」龍士の飲みかけのコーラに向かって掌を翳した。

「えっ？」言われて、何の事かと思いながら、龍士が不用意にコーラの缶に手を近付けた時、

「わっ！」と、龍士の手に痛みが走り手を反射的に引いて、飛び上がった。

驚く龍士を無視して、明日香がコーラの缶に顔を近付けて

「なるほど……フィールドで静電気を発生させられるのね」と、呟いた。

「ええ、最大距離は……そうね2m位かな……任意の空間に静電気を発生させられるわ」

特に自慢する様子でもなく、翔子は自分の掌を眺めながら淡々と説明している。

「これって凄いいんじゃない？……ほら、電気なんだろ。だったらレールガンとかで、どかんと……」

龍士が好奇心いっぱい身を乗り出して翔子に尋ねると、

「何を言っているの……静電気よ。出来る訳無いじゃない」はしゃぐ龍士の言葉を遮り、冷たい目で見ながら翔子はあっさりと否定した。

「へっ？」

「そもそも、レールガンって、電磁誘導を利用した磁力軌道の事ですよ。レールと弾体との電位差を利用した構造なのに、電気だけではむりよ」

訳が分らず、目を点にしている龍士に、困ったもんだと言わんばかりに、呆れながら横から明日香が説明した。

「なんで？」

「電気を放電するのと、通電さすのでは根本から違うの。導通させるレールも無しに、エネルギーだけで仕事出来る訳無いでしょ」

「えっ、それを超能力で……」

「何も無い空間に？閉鎖された空間でも無ければ、エネルギー自信、どうやって蓄積と言うか、存在させるの？存在させた上でシステムに変化させるなら分かるけど」

「そうね、何も無い空間に静電気は溜められ無いわね。帯電する物が無いとね」

明らかに、お前は小学生かと馬鹿にした二人の目に、龍士は、まだ始まりもしていない恋愛に絶望した。

「それと、私の能力はあくまでも静電気を発生出来る事であって、

静電気を変化させて使える事じゃ無いわ」

「どう言う事？」龍士は、翔子の言った言葉の意味が今ひとつ理解出来ない。

「その子みたいに、能力を応用するのと、違う仕事をするのとは意味が違うという事」

翔子は、亜美を顎で指し言つと、

「静電気を発生させるのと、静電気を使うのとは全然違う仕事でしょ」龍士に向き直り冷たい視線を投げ掛けた。

「そもそも、そんな強力なエネルギーどっから持ってくるの？普段の生活で、一日に食事は千五百kcal位でしょ……」

「あら、橘さん。ダイエットでもしてるの？」

明日香の話に翔子が割つて入ると、

「ぐっ……し、してないわよ……」明日香は、言葉に詰まった。

「駄目よ成長期なのに、二千kcal位取らないと……」

翔子が、あからさまに明日香の胸を見ながら言つと、

「ほっ、ほっといってくれる！」と、悔しそうに顔を背けた。

「とにかく、二千でも三千でも、その程度しか、食事と言う不効率な方法でエネルギーを摂取していないのに、それ以上の仕事が出る訳無いじゃない」

少し膨れっ面で説明する明日香に続いて、

「確かに一気に放出すれば、ほんの一瞬、乗用車程度の仕事になるけど……生命維持の為に殆どが消費されているのよ、余剰のエネルギーなんて殆ど無いわ。外部からエネルギーを効率良く摂取出来るなら別だけど」と、少し困った顔で明日香を見ながら翔子が説明した。

そして、皆の方に向き直り、

「別に私は、これでどうしようとは思ってないわ……使い道も分からないし。そうね、痴漢の撃退程度かしら……」と、少し笑顔で話した。

続いて明日香が、

「それじゃ、田原本君は？」と、好奇心丸出しで田原本に尋ねた。

「俺は、四組の田原本邦彦。能力はバリアーだ」

「えっ！」アニメっぽい言葉に龍士の目が光る。

「うそつ、凄いじゃない」明日香も目を輝かせている。

「まあ、凄いと言えば凄いんだけど……」

邦彦は困った様な顔で頭をかきながら、

「たぶん、バリアーだと思う……って奴かな……」と、歯切れの悪い説明をした。

「どう言うこと？」

「いや、バリアーだと自覚出来る出来事が、今までに二回しかなくて……なんて言うのかな、もしかして違う力かも知れないなって……」明日香に尋ねられて、説明しようとしているが、本人にも自分の能力がどう言った物か理解出来ていないみたいだ。

「二回って、どんな事が有ったの？」翔子も好奇心が刺激されたのか、興味深々の目で邦彦に尋ねた。

「うん、最初は小学校三年生の時だった。飛んで来たサッカーボールが目の前で止まって落ちた……」

「止まって？落ちた？弾き返すんじゃ無く？」

「うん」

自分のイメージしていたバリアーとは少し違う現象に、思わず尋ねた龍士に、邦彦は静かに頷いた。

「それって……もしかして凄い事かも……」明日香が顎に手を当てて考えながら呟いた。

皆が明日香を見ている中、

「そりゃ、凄いだろ……バリアーなんだから……」と、龍士が明日香に言うつと、

「うっん……そうじゃなくてね、もしかしたら運動エネルギー……いえ、もしかしてエネルギーその物を中和しているのかも」と、明日香は龍士を見る事も無く、考えながら説明した。

「中和？」

「うん」

「それが凄い事なのか？」龍士は意味が分からず、不用意に尋ねると、

「あのね、エネルギー保存の法則つてのあるの。与えられたり発生したエネルギーは消滅しないわ」と、小馬鹿にする様な目で明日香が答えた。

「仮に、ボールが飛んで来たエネルギーを吸収して、運動を中和したとして……そのエネルギーは何処に行ったのか……」

腕を組んで考え込んでいた明日香が、徐に顔を上げて、

「ねえ、田原本君。ボールが当たった時つて、衝撃なんか無かった？衝撃じゃなくても、光ったとか、大きな音がしたとか……」と、邦彦に尋ねた。

「いや、それが不思議なんだ。結構勢い良く飛んで来たのに、目の前三十cm位で、ピタツて止まって、ぽとつて感じて落ちて……周りに居た皆も不思議そうに見えて……その時、咄嗟に、これは誤魔化さなきゃつて感じて、態と手で受け損ねたみたいに手を振つて痛がつて……なんとかその場は誤魔化したよ……正直、怖かったよ……自分に何が起きたのか分からずに……」邦彦は自分の手を見詰めたながら、しんみりと説明した。

「そうになると、やっぱり不思議よね」と、明日香は再び考え込んだ。「運動エネルギーが消滅する訳が無いし」

隣の翔子が、上を向いて考えながら言ったのを聞いて、

「そうね……よし！試して見ましょう！」明日香は、笑顔を浮かべて立ち上がった。

「試すつて……外で？」

「そう！どんな現象か、この目で見てみましょうよ！」

明日香は翔子に尋ねられて、笑顔で皆に提案した。

「良いでしょ？田原本君」

邦彦は、明日香の可愛い笑顔に少し戸惑いながら、

「あ、ああ、別に構わないけど……何処で？」と、尋ねると、

「弓道場！」明日香が元気いっぱいに答え、

「ちよつとまてえ！」と、邦彦は激怒した。

「なつ、なによ……」

「何で弓道場なんだよ！何を使う気なんだ！もうちよつとソフトな物を思いつかんのか！」

邦彦の激怒に戸惑う明日香に、更に邦彦は立ち上がって怒鳴った。
「だって……やるからには限界を……」

「限界を試される俺の身はどうなるんだよ！まだバリヤーだと、はつきりしていないのに！」

明日香の残念そうな態度に、邦彦は更に激怒した。

「まああま、サッカーボールで良いんじゃない？」

龍士が、険悪な雰囲気到我慢し切れなくなり、二人を宥めに入っ
た。

「ちつ……」明日香が残念そうに、顔を逸らすと、

「聞こえたぞ！」と、邦彦は拳を握り締め怒鳴った。

何とか邦彦を宥めて、初め集まっていた花壇の所へと皆は移動し
た。

皆が待っていると、龍士が体育用具の倉庫から、小汚いサッカー
ボールを一つ持ってやって来た。

「よし。稲葉君。思いつきりやって！」

明日香が元気良く、皆から十m位離れて立っている邦彦を指差し
て言うつと、

「加減しろ！」と、邦彦は怒鳴り返した。

「何よ……」

不機嫌そうな顔で、ぶつぶつ言っている明日香の横で、龍士は苦
笑いを浮かべながらボールを地面に置いた。

「じゃ、行くよ！」龍士が邦彦に手を挙げ合図する。

「おお……くれぐれも加減しろよ！」邦彦が釘を刺した。

「ははは……」龍士は再び苦笑いを浮かべた。

龍士は少し勢いを付けボールを蹴ると、ボールは少し弧を描いて

邦彦に向かった。

そして、邦彦の胸の辺りで、ふっ、と止まり、其のまま静かに地面へと落ちた。

「あつ……」皆が目を大きく開けて驚いている。

落ちたボールがバウンドしているなか、皆は邦彦へと走り寄った。

「……………」明日香がしゃがんでボールをじっと見ている。

そして立ち上がると、

「よし、稲葉君。田原本君を殴って」と、また危ない事を言い出した。

「おい……」もう邦彦は半分諦めている。

「何も、思いつきりやらなくても良いわよ」

「当たり前だ……」邦彦は、すっかり諦めている。

「でも……いいのか？」戸惑いながら龍士が尋ねると、

「まあ、鍛えてたからな……腹なら少々強く殴っても良いぞ」邦彦は龍士の体格を少し馬鹿にする様な目で見ながら言った。

その態度に龍士は少しむかついた。

「よし……」龍士は、何か企む様な目で邦彦を見て、

「とおりゃ！」と、情け無い掛け声と共に、邦彦の腹に向かって結構本気で拳を放った。

「いつてええええ！」

「……………」やっぱり……」

肘を押さえ、苦悶の表情を浮かべる龍士を見ながら、明日香がほそりと呟いた。

「やっぱりって……やっぱりって何だよ！」明日香の呟きを聞き逃さず、傷む肘を押さえながら龍士が尋ねた。

「殴る拳が止められても、勢いの付いた拳から下は止まらないわ……急に止まった拳の勢いが肘や肩に来るのは当然だわ……やっぱり、私がいやらなくてよかった……」

「おい！分かってんなら最初から言え！」

龍士は、ほっとした笑顔を浮かべる明日香に、力いっぱい抗議す

ると、

「なによ……思いつきりやらなくて良いわよって言ったでしょ」明日香に、きょとんとした顔で悪びれず、しれっと返され、

「うっ……」龍土は、それ以上言葉が続かなかった。

「それより、稲葉君。拳は？痛くなかった？」

「あっ……ああ……そう言えば拳は全然痛く無いや……」

明日香に聞かれ、思い出した様に龍土は拳を見た。

「で、どんな感じだった？」

好奇心丸出しで尋ねる明日香に、

「どんなって……ただ、何の感触も無く、その場で止まった……かな？」思い出しながら龍土が答えた。

「やっぱり……運動エネルギーが吸収されて、中和したんだわ……」明日香は不思議そうな顔で龍土の拳を見た。

「確かに不思議ね……フィールドが壁みたいに変化して、止めてくれる方が理解しやすいんだけど……」翔子も、龍土の拳を不思議そうに眺めている。

「そうね、それだと単純に弾き返したで済むんだけど……弾き返していない……」

「それと、弾き返すなら、田原本君にも何か衝撃みたいなのが感じられるはずよね」

二人の会話を聞いて、

「衝撃？」と、龍土が聞き返した。

「ええ……壁だと単純に弾き返す……その時に起きる作用と反作用で、田原本君は必ず何らかの衝撃を感じるはずよ……」

「それは、超能力と言う事で……」
また難しい話が始まりそうなので、龍土がその場を濁そうとする
と、

「だから、科学的に考えているのに物理を無視するなって言ってるの！」明日香に怒鳴られた。

「まあ、不思議ね！SFね！ファンタジーだわ！なんて言ってるじゃ

可愛い。だけど科学的に考えるなら物理を無視出来ないでしょ！」
……いえ、それなら、このお話その物が……

「私だつてね二十kgまで位しか持ち上げられないの。何でか分かる？」

「さあ……」顔を付き付ける様に迫る明日香から身を引きながら、龍士が情けなく答える。

「石に力点、フィールドが作用点。支えている支点が私。二十kg以上なんて重くて支えてられないからよ」

「でも、反重力みたいな力だと……」

「それでも反力が発生するわ」

明日香の説明を聞いて、

「超能力つて……もつと夢があるものだ……」龍士は一人、しゃがみ込んで拗ねていた。

「だけど、どれ位の力まで中和出来るのかな？」

翔子が投げかけた疑問に、

「だから、弓道場で……」と、言いかけた明日香を、

「……」怒りに燃えた目で邦彦が睨んだ。

「……まあ、矢なんか滅多に飛んで来るもんじゃ無いけど……」

邦彦に睨まれ、首を竦める明日香を困った様な笑みを浮かべて翔子が言うつと、

「仮にだ……仮にだぞ。飛んで来るとしても、その為の訓練をする積りは無いからな！」と、邦彦はきっぱりと言いつつ切った。

「だから、今までに二回しか経験してないんだよ！誰が態と進んで危ない事をするんだよ！」

「とにかく、力を吸収して中和している事は実証出来たわね」

「どうしてだ」

「もし、相反する力をぶつけて……つまり壁とかで止めているのなら、さつき稲葉君が殴った時、稲葉君の拳に何らかの衝撃があったはず……なのに何も感じなかった……」

「……確かに、そうだな」

皆は初めて会った割には、和気藹々と楽しそうに話している。

日頃から自分の能力に不安を持ったり、疑問を抱いても、誰にも相談出来る訳も無く、ただ一人、孤独感に怯えていた。

もしばれたら……そんな不安が何時も彼らに付きまどっていた。

普通に付き合う友達は居た。

しかし、決して友達にも自分の秘密を悟られまいと、気を張っていた。

そんな生活が、まだ十五歳の彼らの心に、大きな負担と成って押し掛かっていた。

だから彼らは、初めて心を許し会える友人に出会った気分だった。そんな中、一人龍士は拗ねていた。

あっ、もう一人、亜美は元々無口なのか、始終、明日香の背中に隠れる様に引つ付いて立っていた。

「あら、そう言えば、まだ貴方の紹介を聞いていなかったわね」

話の切れ目で翔子が、一人しゃがんで拗ねている龍士に気が付いた。

「あっ、そうそう、稲葉君。貴方の能力を紹介してよ」

「えっ……でも……」

にこやかに、何かを期待するような笑顔を浮かべる明日香に対して、龍士は躊躇う様に俯いた。

天使の笑顔を浮かべて、

「稲葉君、実は凄いでしょ」と、目の前三十cmに迫る明日香に、

「えっ、えっ？ なっ、何の事？」と、訳が分らずに龍士は戸惑った

……が、少し嬉しかった。

「亜美ちゃんがね、貴方のオーラが一番強力だって言っているの。

ねねね、何なの？ もしかしてテレポート？ 精神感応？ 予知能力？ 千里眼？」

「えっえっ？ そっ、そんな……」好奇心で目をキラキラと輝かせながら迫る明日香の過度な期待に、龍士は更に戸惑った。

「……そんなに凄いの？」横で見っていた翔子も期待する様に目を輝

かせる。

「ちよつ、ちよつと待つてよ！そんな期待しないでよ！」周りの期待から来る重圧に耐え切れず、思わず立ち上がって、明日香から逃げ出した。

逃げ出した龍土は、花壇を囲む様に生えている木に寄りかかり、
「あの、なんか勘違いしてるよ！」と、皆に向かって叫んだ。

「何の事？」怯える様な龍土の態度を不思議に思い、飛鳥が尋ねると、

「俺、そんな超能力なんて……超能力なんて身に覚え無いよ！」と、龍土が叫んだ。

「えっ！」

龍土の言葉を聞いて、皆は驚きながら龍土を見た。

「ちよつと待つてよ……さっき私の能力を見せて、友達になりましたようつて言った時、真っ先に賛成してくれたのは稲葉君じゃなかったの？どう言う事よ！」

話している内に明日香はだんだんと腹が立つて来て、最後は力いっぱい怒鳴り付けた。

「そつ、それは……」明日香が可愛いからとは言えない……

「さて、どうする……」

「そうね……死体の処分って結構面倒だけど……」

冷酷な光を目に浮かべて、邦彦と翔子が龍土に近付く。

「ちよう！ちよつと、死体って！」

「当たり前でしょ……私達の秘密を知ったんだから……普通の人の貴方が……」

残酷な薄笑みを浮かべ、明日香達が龍土ににじり寄る。

龍土は、明らかに殺気の帯びた雰囲気怯え、言葉が出ない。

「最後に、もう一度だけ聞くけど……」

「さつ、さ、さ、最後つてええ！」明日香の感情の無い声に、龍土の声は思わず裏返る。

天使の笑顔だったはずの明日香の顔が、今の龍土には地獄の鬼に

見える。

「本当に心当たりがないわけ？もしかして、まだ私達を信用出来ずに隠そうとしているの？どっち？」

「そんな、隠すだなんて……本当に心当たりがなくて……超能力者のオーラが見えるなんて……そんな、俺が超能力者だなんて、俺自身が一番驚いているのに……」

三人に囲まれ、小便をちびりそうになりながら、龍士は震えている。

所詮、たいした能力では無いと分つていても、三人は、いや、明日香の影に隠れている亜美も入れて四人は、常人には無い能力を持っている。

その四人が殺意を持って取り囲んでいる……凡人以下の龍士にとって、このシチュエーションは恐怖でしかない。

「とにかく、人目の付かない所へ……」

「そうね……」

邦彦と翔子が、龍士を捕まえ様と身構え近づく。

「ひっ……」

がっしりとした体格の邦彦が、龍士の胸倉を掴んで引き寄せ、後ろを向かせながら右手を後ろ手に捻る。

「へえ、手馴れてるじゃないの」

翔子が、無駄の無い邦博の一連の動きを見て感心する。

「……ああ、柔道をやってたからな……」

右手を捻り上げられ拘束された龍士は、邦彦相手に抵抗出来ない事を知り、今にも泣きそうな顔で怯えている。

其処へ、明日香が龍士の正面から近付き、

「どうなの……喋る気になった？」氷の様な冷たい目で睨みながら尋ねた。

「しゃっ、喋るって……そんな、ほんとに……しっ、し、知らないのに……」

目にいっぱい涙を溜めながら、歯の根の合わない口で、震えなが

ら答える龍士を見て、

「そう……じゃ、仕方が無いわね……」

明日香の言葉を聞いて、邦彦が龍士を引き摺る様に引つ張る。

「ひっ！」恐怖から龍士が短い悲鳴を上げたたん、

「まあ、冗談はこれぐらいで……」と、邦博が龍士を放し、三人は亜美を取り囲む様になった。

「ねえ、本当に稲葉君も仲間なの？」

亜美を上目遣いで見詰めながら翔子が尋ねると、怯える様に再び明日香の腕を掴んで明日香の後ろに隠れた亜美が、小さく頷く。

「亜美ちゃんは嘘なんか付かないわ」

「見間違いない……って事は？」

亜美を庇う明日香に邦彦が尋ねると、

「確かに、実証例が少ないのは確かだけど……見間違える物なのかどうかは見た本人で無いと……ねえ、亜美ちゃん、どうなの？」

明日香は亜美へと振り向いて尋ねた。

「……そう……間違いないのね……」明日香は亜美の言葉を聞いて頷く。

「本人に自覚が無い可能性はあるわね……じゃ、質問を変えて見ましょう」

邦彦が手を放してから地面にへたり込んで、しゃくり上げる様に泣いている龍士に近付き、

「ねえ、稲葉君。得意な事って無い？」と、明日香が、再び何時もの天使の笑顔を浮かべて龍士に尋ねた。

「ひっ、ひっく……おっ、お、お前ら……ひっく、いい加減にしるよな……冗談って……」

龍士は涙目で明日香を睨み付ける。

今や、明日香の天使の笑顔は、小悪魔の残酷な笑みに見える。

「あら、だって、皆正直に話したのに、貴方だけが言わないなんて、まだ信用せずに隠してるんじゃないかって疑われても仕方無いでしょ」

「だっ、だからってなあああ！」

ニコニコしながら、悪びれもせずに話す明日香に、龍士は言い知れよしの無い怒りを覚えた。

「何よ、本気にする方もする方よ……一介の高校生が、そんな大それた事、本気ですると思っただの？」

「ばっかみたい……」

明日香と翔子の二大美少女に、蔑んだ目で見下ろされ、怒りを通り越して情けなくなった龍士は、

「ばっ、馬鹿みたいって……おまえ……おまえら……こ、怖かったんだぞ！本気で怖かったんだぞ！」と、叫びながら泣き出してしまった……情け無い……

- - -

「もう、機嫌直してよ……これ、おごりね！」

何時もの天使の笑顔を浮かべながら、明日香が缶コーヒーを龍士へと差し出す。

五人は再び食堂に戻り、拗ねている龍士を囲んで座っている。

「……イチゴ牛乳が良い……」

隣に座る明日香の前にある、紙パックのイチゴ牛乳をチラッと見て、龍士がぼそつと呟いた。

「……もう、分かったわよ……」

拗ねている龍士の、細やかな復讐に明日香は少し呆れながら席を立ち、イチゴ牛乳を買いに走った。

しかし龍士は、明日香がストローで一口飲んだイチゴ牛乳と交換して貰えたら嬉しいなどと、少し歪んだ欲望を思い描いていた。

そして龍士は、せっかく明日香が買って来てくれたイチゴ牛乳を、渋々角を開けてストローを差した。

「それで、さっきの話だけど。稲葉君、何か得意な事って無い？」

「得意な事……」

明日香にそう聞かれても、文才無し、絵心無し、音感無し、運動神経無し、体力無し、ギャグのセンス無し……の龍士にとって思い

当たる節が無かった。

「…………腕を組んで考えている龍士が、

「得意と言えば…………」と、何かを思い付いた様に呟くと、

「得意と言えば？」と、皆が龍士に顔を寄せる。

「肩揉み…………かな？」

「肩揉み？…………何、それ…………」

龍士の答えに、明日香が思わず眉を顰めて呟く。

「えっ、肩揉みだよ…………ほら、こうやって揉み、揉みって…………」

龍士が明日香の目の前で、両手をにぎにぎさせる。

「知ってるわよ！そうじゃなくて、肩揉みが得意って、どう言う意

味よ！」

呆けた龍士の答えに、明日香が呆れて怒鳴り付けると、

「あうっ…………怒りんぼ…………」明日香の怖い顔を見て、龍士が顔を逸

らして呟き、

「なんですって！」と、明日香が立ち上がり龍士を怒鳴り付けた。

「まあ、まあ…………」翔子が困った様な顔で明日香の後ろから、明日

香の肩を押さえて諫める。

「か、肩揉みで…………貴方が肩を揉むと、どうなるって言うの…………」

怒りの余り、肩で息をしながら明日香が龍士を問い詰めると、

「どうなるって…………良く分かんないけど、おばあちゃんや、お母さ

んには評判良いんだよ…………あと、親父も、足のふくらはぎを揉んで

やると、とっても気持ち良いって…………」

「…………」龍士の説明を、明日香は眉間にしわを寄せて睨みながら聞

いている。

「…………分かった…………冷静に考えましょう…………最初から否定的に物事

を見ると、大事な物を見落とす恐れが有るわ…………とにかく肩揉みが

得意と言うか評判が良いと…………じゃ、その効果を実証してみましょ

う」

明日香は目を閉じて腕を組んで考えている。

「とりあえず、田原本君の肩を揉んで見て…………」

「俺？」また実験台かよと、邦彦は少し不満気に自分を指差した。
「肩揉みで、何か実害が発生する恐れが有る？」

「そりゃ……無いとは思うけど……」

明日香の言葉に反論出来ず、邦彦は嫌々ブレザーを脱いで、
「さあ、やってくれ！」と、モルモットに成った心境の邦彦が、肩をぼんと叩いた。

「う、うん……」

龍士は自信無さ気に、背中を見せる邦彦に近付き、両肩に両手を置いた。

そして、徐に、もみもみと、邦彦の肩を揉み出した。

「……うつ……ふえ……」

揉み出して直ぐに邦彦の顔が緩む。

明日香と翔子が邦彦の表情を不思議そうに眺めている。

「どうなの……」明日香が、邦彦の顔を覗き込む様に尋ねると、

「どうって……いや、これが……なかなか……なんて言ったら……
良いのか……」邦彦は恍惚とした表情を浮かべ、力の抜けた声で感想を述べた。

「もしかして……」

何かを思い付いたのか、明日香が揉んでいる龍士の手を掴んだ。

「えっ？」明日香に急に手を掴まれ、龍士が驚く。

そんな龍士に御構い無く、明日香が龍士の手を引き上げ、

「熱くは……無いわね……」と、不思議そうに龍士の手を眺めている。

「何か……手から出ているのかな？」

翔子も明日香に近付き、龍士の手を不思議そうに見詰める。

「肩こりと言えば……」

「……サロンパス……」

「それアウト。商品名出しちゃ駄目でしょ」……なんの話や……
社は佐賀です。

「炎症鎮痛効果がある薬剤成分が出ているの？」

「…………じゃ、無いみたいね…………」
「どうして?」

「薬剤だと、浸透する時間がかかるわ…………それにシャツの上からだし…………」

「後、何かあったっけ…………」

「ピップエレキバン…………」

「それもアウト…………」

翔子と明日香が話しているのを聞いて、

「磁力か?」と、邦彦が尋ねた。

「…………どうだろう…………磁力の効果は、はっきりと肩こりに効くとは
言えない所も有るし…………」

「あら、そうなの?」

「磁力が人体に影響するかしらないか…………はつきりしないのよ。MR
Iって有るでしょ。あれも強力な磁力なんだけど…………人体に影響は
無いとしているのよね」

「でも、高磁場にさらされて、血液中のヘモグロビンに含まれる鉄
分は?」

「極僅かの鉄分が磁場に反応しても、血流のスピードがそれ以上だ
と問題無いんじゃないの?良く知らないけど…………」

「後、刺青している人とか化粧してたら駄目とか…………」

「それに含まれる顔料が問題なの。磁場に反応して顔料が発熱する
から」

「あの…………」

翔子と明日香が話し込む中、明日香に手を握られて、少し嬉しい
気分の龍士が、遠慮気味に声を掛けた。

「これって…………やっぱり超能力…………でしょうか?」

「確かめて見ましょ…………」

「確かめるって?」翔子の様子に、龍士は鞆の中を覗き込む様に見
た。

「…………これで」

翔子が、鞆の中からカッターナイフを取り出し、刃をカチカチと、全部出して、

「ひっ！」龍士の目の前に突き出した。

「大丈夫かよ……おい……」その光景に邦彦が思わず声を掛ける。

「何が？」何の事だと言わんばかりに翔子が聞き返す。

「いや、カッターの刃ってステンレスだろ……磁石に引っ付くか？」

「そっちか！そっちの事か！俺の体を心配してくれたんじゃないのか！」

邦彦の冷たい言葉に、龍士が力いっぱい抗議すると、

「あつ……いや、それは……」と、邦彦は申し訳無さそうに顔を背けた。

睨み付ける龍士を他所に、

「大丈夫よ、百円シヨップの安物だから、磁石に付くわ」翔子は冷たく言い放った。

「安物でも切れるだろ！切れるよな！危ないよな！危険だよな！」

龍士は目を向いて抗議するが、

「馬鹿ね、刃を当てなきゃ切れないわよ」翔子は何でも無いかのようにならぬように答えた。

「……何で……こいつ等……もうちょっとソフトな物を思い付いてくれないんだよ……」

龍士は美少女二人に、途轍もない絶望を感じた。

「まあ、とにかく……稲葉君。もう一度、田原本君の肩を揉んで見て」

「……分かったよ……」

明日香の笑顔での催促に、龍士は渋々応じた。

龍士にとって、既に明日香の笑顔は、悪魔の微笑にしか見えなかった。

再び龍士が邦彦の肩を揉む。

其処に翔子がカッターを近づける。

「刃を、む、向けるなよ……絶対だぞ……」龍士が弱弱しく注文す

ると、

「分かってるって……」と、翔子は、感情の無い目で龍土を見ながら、薄気味悪い笑みを口元に浮かべ、何故か声は楽しそうだった……怖い……

そして、翔子が龍土の手に刃を近付けると、

「あつ、引つ付いた……」翔子が目を丸くして驚いている。

「えっ、ほんと？」明日香も興味信で目を輝かせる。

「うん……結構、強く付いてる……」

龍土の手からカッターの刃を離そうと引つ張るが、刃が離れずに
撓んでいる。

そして、翔子が少し力を入れて離そうとした時、パキンッと、乾いた金属音と共に刃が折れた。

「わっ！」龍土が慌てて手を引つ込めると、引つ付いていた刃が手から離れ床に落ちる。

「やっぱり磁力ね……」

「そうみたいね……」

「えっと……凄いのか？」

「磁力線よ！立派なものよ！」

遠慮気味に尋ねる龍土に対して、明日香は笑顔を炸裂させて叫んだ。

「貴方の場合、発生させたフィールド内で磁力線を発生させているのよ。しかもカッターの刃が折れるぐらい強力なのよ、凄いわよ！」

明日香に凄いと言われて、嬉しい気分であつたが、

「でも、今まで気にもしなかつた事を、凄いと言われても……なんか実感湧かないな……」龍土は複雑な気分だつた。

「でも、今まで気付かなかつたの？」

「えっ？……そうだな……全然……」

翔子に聞かれて、思い出して見るが、全く思い当たらない。

「たぶん、揉んでいる間だけなんだと思う。磁力が発生しているのは……それに、フィールド内だけだから、他にも影響しなかつたん

だと思われるわね……」

明日香が龍土の手を見詰めながら、顎に手を当てて分析している。

「……応用出来れば凄いと思う……」

「ええ……」翔子の言葉に明日香の顔が曇る。

「三輪さんもそうだけど、絶対に他の人に知られたら駄目よ……」

「何でだ……」

「十分、兵器利用されるって事……」

「自覚してるわ……」

明日香の言葉に、翔子が真剣な目で答える。

「どうして…… たかが、パチパチの静電気と、磁石だろ…… 人なんて殺せないよ……」

何を大げさな事を言っているんだと言わんばかりに、呆れた顔で龍土が言つと、

「馬鹿ね…… 人を殺すだけが兵器じゃ無いわよ……」

「そうよ。今の時代、情報戦が大きな役目を背負っているの」

「情報……スパイとか？」

二人の言葉に、貧弱な発想しか出来ない龍土が尋ねると、

「あのね…… コンピューターとかレーダーとかの電子機器を使った情報戦よ」と、翔子が呆れる様に答えた。

「確かに…… 三輪や稲葉に限らず、俺達全員、兵器利用されるだけの、実用域に達した超能力者だと思う……」

「実用域？」龍土が邦彦に問い返すと、

「ああ、テレビに出てくる超能力者が居るだろ」

「ああ」

「あの連中が本当の超能力者だとして…… 何時間も掛けて、箱に入った図形を透視したり、確立の低い数字当てをした所で、使い道が無い…… だけど俺達は……」

「確かに…… アニメの超能力者に比べたら、全然貧弱だけど…… 実用域よね……」

「そうね…… だから皆にお願いがあるの」

不安そうに話す皆に向かって明日香が呼びかける。

「友達になるって簡単に言ったけど……本当にお願……直ぐには無理かも知れないけど、お互いに信頼しあいましょう……ねっ、お願い……」

明日香が真剣な顔で皆に、話すと、

「そうだな……お互い兵器には成りたく無いだろ？」邦彦が頷き、翔子を見る。

「そうね……変な疑心暗鬼も無しよ……あっ、山添さんが居たわね……監視されるのは好きじゃ無いけど……」

「止めて！亜美ちゃんは、そんな事しない！」

亜美を見ながら話す翔子の言葉を遮り、明日香が叫んだ。

「なっ……どうしたの？急に……」

急に叫んだ明日香に驚き、翔子が訝しげに尋ねた。

「……ごめん……御免なさい……でも、三輪さんの言つとおり、お互いを疑う様な事はしないで……だから、信頼して……」

明日香が言葉窄みに俯くと、後ろで亜美が心配そうに見詰めている。

「……わかったわよ……そうよね、ごめんね山添さん。変な言い方して……あれじゃ貴方が悪者だわ。ごめんね」

翔子が笑顔で亜美に謝ると、亜美も初めて皆に見せる笑顔で答えた。

第1話（後書き）

続きは何時になるか分かりません。

第2話（前書き）

残酷な表現が含まれています。

第2話

――追跡――

「まだ、捕らえられんのか！」怒鳴り声と共に、椅子を下しもに控える者達に投げ付ける。

人も通わぬ山間の、五十段ばかりの石段を登った所に在る朽ちた神社の境内に、陣屋の幕が張つてある。

松明が燈される中、狭い陣屋に百匹以上の化物達が集まっていた。

「時康様、なにとぞ、お気をお静め下され」

「黙れ！」

宥め様と近付いた老婆を、時康と呼ばれた袴姿の青年が殴り飛ばす。

「あ、兄じゃを、殺されて……どう静まれと言つか！」

「ひっ！」時康は、更に老婆を蹴り飛ばす。

下に控える化物達も、時康の劍幕に身を縮め、怯えている。

「我が遅れて着いたばかりに……この様な、不始末、おじじ様に何と申せば良いのか……」

暴れていた時康が、急に力が抜けた様に、膝を付いて頂垂れる。

「若、只今、源一坊げんいちぼうが追い詰めております故、直に……」

「多門次……」

時康が、声を掛けて来た青年を睨み付けると、

「はっ！」山伏姿の多門次は、怯える様に慌てて頭を下げた。

「真事まこと兄じゃは、大台の女狐めに遣られたのか……」

「はっ！我と源一坊が駆け付けました時、既に御曹司は塵と成り消え行く所にございました。其の時、傍に居りました者達を捕らえ様としました所、侍女おほと思しめき者達が、姫様と、葵様と呼んでいるのを、しかとこの耳で」

「其の侍女達は如何した……」

そう言つて、時康はゆっくりと立ち上がり、多門次へと近付く。

「はっ！全て、その場にて、引き裂いて、滅つしました」
「そうか……」

近づく時康に怯えながら答える多門次の前に、時康はしゃがみ込み、

「そして、女狐めを取り逃がし、男刀おがたなを奪われ……貴様は、よくも、おめおめと戻って来れたの……」鋭い爪を伸ばした手で、多門次の首を鷲掴みにする。

「ぐっ……」爪が、多門次の首に食い込む。

「……」冷酷な目で時康は多門次を睨んでいる。

死の恐怖に震える多門次の目が白く裏返った時、

「貴様も、女狐を追い！」と、叫び、時康は多門次を投げ捨てる様にして首から手を放した。

「ぐっ、ごほっ……は、はっ！」喉を押さえ、ぼやける意識を必死で保ちながら、多門次が一礼をして返事をする。

多門次が立ち上がり黒い翼を伸ばし、後ろに控えている化物達に手を振り合図すると、化物達が一斉に立ち上がる。

再び多門次が時康へと振り向き、膝を突いて一礼をすると、多門次は烏天狗へと姿を変え、化物達を引き連れ、その場を飛び去って行った。

先程、殴り飛ばされた老婆が、健気にも時康が投げ放った椅子を拾い、時康の傍へと運び広げて置くと、時康は其の椅子に黙って座った。

そして時康は、考え込む様に腕を組み、じつと多門次達が飛んで行った空を見詰めていた。

真つ暗な林の中を青白い光が、木々を縫う様にくねりながら凄まじいスピードで飛んで行く。

青白い光を放ち、白狐姿の葵が通り過ぎた直後、木々に光の矢が連続で突き刺さる。

体を掠める様に飛んでくる光の矢を避け、体を捻りながら反転し

た処へ再び光の矢が通過する。

葵は懐剣を咥えながら、前足の爪を伸ばし、光の矢を放っている蜂の化物へと突進する。

蜂の化物と擦違った刹那、葵の爪に引き裂かれた蜂は、緑色の体液と共に黄色い臓物を撒き散らす。

蜂の化物は落下する途中で塵と成って消えて行つた。

着地し駆け出した葵の前に、ムカデの化物が体を起こし立ちはだかる。

葵は走りながら、背中から青白い炎を舞い上げる。

立ちはだかるムカデの寸前で、炎で全身を包み込み、葵は飛び上がりムカデへと体当たりをかます。

衝突した瞬間、ムカデの胸は肉片を撒き散らし砕け散る。

葵が再び着地した時、ムカデは塵と成って消えた。

群がる化物を、躊躇う事無く容赦の無い攻撃で叩き潰す。

迷つたり手加減する余裕等、葵には無かつた。

「おのれええ！」一つ目の大入道、源一坊が凄まじい勢いで木々を薙ぎ倒しながら、葵を追う。

僅かに木々が途切れた時、源一坊が勢い良く飛び上がり、錫杖を振り上げ、

「たあああ！」気合と共に錫杖を袈裟懸けに振り下ろすと、衝撃波が三日月の形で空気が震わせ、葵へと向う。

「ぎゃああん！」衝撃波が命中し弾き飛ばされた葵は、咥えていた懐剣を落とし、杉の大木を五・六本薙ぎ倒して倒れた。

「くっ！」倒れた葵は、直ぐに体を捻り、弾ける様に立ち上がり四本の足を踏ん張ると、体の周りに青白い狐火を五つ浮かべ溜める。

「はあああ！」気合と共に狐火が、駆け寄る源一坊へと放たれる。勢いの付いていた源一坊が、慌てて止まり錫杖を構えた。

「このおおお！」飛んで来る狐火を錫杖で薙ぎ払うが、四発目、五発目が払えず、源一坊に命中する。

「ぐっ……」命中した狐火は、爆発し凄まじい炎を上げ、

「うおおお！」炎に包まれた源一坊が、もがき苦しんでいる。

其の隙に、葵は再び懐剣を咥え、

「うっ……」痛む体に顔を顰めながらその場を飛び去った。

「はあっ！」葵が飛び去った後、源一坊が気合と共に炎を吹き飛ばす。

「うっ、おのれ、流石じゃわ……」源一坊は膝を付き、葵が飛び去った後を睨みながら呟く。

「何をしておる！追え！追うんじゃ！」

源一坊の怒鳴り声で、葵の後を追いかけて来た化物達が一斉に飛び上がった。

「源一坊！」葵の後を追いかけて来た源一坊が、名前を呼ばれ立ち止り、

「……多門次か……」空の一点を見詰め、源一坊が呟く。

月の無い漆黒の星空から、黒い影が近付く。

百余りの化物と共に、多門次が源一坊の傍に降り立った。

「源一坊……どうした、其の姿」

焼け焦げた衣を見て、多門次が源一坊に声を掛けると、

「何でも無いわ……流石に大台の姫だけの事はある、と言う事じゃ

……」と、源一坊は、にやりと笑って答えた。

「そうか……油断は出来んな……しかし、何故じゃ」

「何がじゃ」

辺りを見回す多門次の言葉が分からず、源一坊が聞き返す。

「此処は赤目の森……伊勢から見れば大台とは正反対……方向が違う。何故、女狐は着族の居る大台へと逃げぬ」

「うむ……言われて見れば……伊予の我らならいざ知らず、勝手知ったる女狐が、方向を粉まこうとは、思えんな……」

「何か企んで居るのやも……」

「御曹司を手に掛けた女狐じゃ……何を企んでおるのやら……多門次、どうした其の首」

言葉の途中で源一坊が、多門次の首に付いている傷と手の形をした痣を目に留め尋ねた。

「……お叱りを受けた……」多門次が首を摩りながら言つと、
「……若が、時康様が伊勢の地に着かれたのか……」目を細め、恐
れる様に源一坊が尋ねた。

「ああ、我が鷲嶺の陣屋へ手勢を集めに戻った時には、既に御着き
になつておられた」

「うむ……では、急がんと……」

「ああ……」

二人は顔を見合わせ頷いて、葵の後を追う為に空へと舞い上がつ
た。

――

「な・に……死んだ……」

体長が三mを超える大狸が、愕然と力が抜けた様に椅子に崩れ落
ちる。

大狸は、可也の齢を重ねているのか、全身に白い毛が混じってい
る。

「時貞が……我が孫が……死んだ……」

焦点の合わない目で、空を見詰め、大狸がうわ言の様に呟く。

「はっ、勸善院多門次様の報告によれば、御曹司が身罷れる刹那、
傍らに、大峰の主、笹百合御前が末娘、大台の葵が居ったとの事。
直ちに捕らえるべく、伝法院源一坊様と共に、大台の輩を討ち果た
しました。葵を取り逃がし……」其処まで報告すると、小柄な烏
天狗が言葉に詰まる。

「……取り逃がし、どうした！」大狸の脇に控える、古老の狸がき
つい口調で問い質す。

「はっ……取り逃がし……我が一族の宝、風斬りの刀、その男刀を
……奪われました！」

小柄な烏天狗は、戸惑いながら報告し、最後は叫び頭を地面へと
擦り付ける様に下げた。

「何！男刀を奪われたと！」古老の狸が叫ぶと、辺りが騒然とざわ
つく。

「許せん！女狐どもが！」

「五百年前の戦、再び起こそうと言つのか！」

「戦じゃ！」

「おお！戦じゃ！」

森の中の、そう大きくは無い神社の境内に集まる狸達が口々に騒ぎ立てる。

狸達に混じり、おぞましい姿の化物達も同じに騒ぎ立てる。

「静まれ！」古老の狸が、しわがれた大声を上げ、騒ぐ者達を制する。

「ご隠居様の御前ぞ！」

古老の狸の一声で、騒いでいた数百匹の狸と化物達が一斉に押し黙る。

「しかしながら、法蔵院様……」

「黙れ……ご隠居様がお決めに成る……おのれらは口出し無用」

法蔵院と呼ばれた古老の狸に睨まれ、若い狸が頭を下げ黙る。

「ご隠居様……」法蔵院が、大狸へと振向く。

大狸は目を閉じ、じつと何かを考えていたが、

「多門次の話だけでは、時貞を殺した下手人が葵とは決め付けられぬな……」と、徐に目を開け、法蔵院へと話しかけた。

「されど、我らが宝。風斬りの刀を奪い逃げて居ります」

「うむ……」

再び大狸は目を閉じ、じつと考えている。

「しかし今更、大峰が戦を仕掛けて来る理由が分からん……」

「確かに……五百年前の大戦、お互いの数が半数以下に成る程の激しい戦。それ故、未だに一族の者は意趣深く、忘れては居りませぬ……大峰も、また同じ……」

「右衛門、だからと言って、時代も変わった今と成って、戦を仕掛けて来るほど、大峰は愚かでは無いぞ……大峰も紀伊と大和の百万石を治める主、その様な軽率な事はすまい」

大狸に言われ、法蔵院が頷く。

「孫が死んだ事は悲しい……この身を引き裂かれる思いじゃ……じやが、わしは男刀の行方が気に成る」

「ご隠居様……」

「二百七十……いや、もう八十年前になるか……伊予松山藩のお家騒動……」

「はっ、謀反人、小源太との盟約により、我らはお家騒動に巻き込まれ、稲生武太夫の？神杖？風斬りの刀で、我が一族は、此处九谷久万山に追いやられ……」

「其の後、領主、松平定英様は差控を幕府から命ぜられ、後を継がれた定嵩様より、わしが隠居する事を条件に、和睦の印として授かった我らが宝……」

「我らに害を成さぬ証として、妖刀、風斬りの刀を二つに折り、我らに下された。我らはそれを、男刀と女刀の二振りの懐剣に拵え直し、宝とし、隠神刑部様はこの、久万山にご隠居なされた……」

「御家騒動の時、息子夫婦を失ったが、立派な跡取りを残してくれていた……なのに、なのに……」

「ご隠居様……」

隠居した隠神刑部が、無念を隠せず顔をしかめ項垂れるのを見て、法蔵院も無念の表情を浮かべ項垂れた。

「右衛門、何としてでも男刀は取り戻せ……ただし、葵は殺すな……どう、痛め付けようと構わぬ……事の次第を話せるならば口だけでも構わぬ……必ず引つ立てて参れ」

「御意」

項垂れたまま、弱弱しく話す刑部に法蔵院が深く頭を下げる。

「佐助」

「はっ！」

法蔵院に呼ばれ、報告に来た小柄な烏天狗が、返事をして頭を下げる。

「今の事、時康様に御伝えせよ」

「はっ！」命を受けた佐助は、返事をし一礼すると直ぐに其の場を

飛び立った。

「伝助」

「はっ！」名を呼ばれ、大柄な狸が法蔵院の前に現れ跪く。

「阿波の者達に、紀伊水道を警戒せよと伝えよ、ただし、手出しは命があるまでは許さぬと」

「はっ！」返事をし一礼をした伝助が、直ぐに其の場より駆け出した。

「よいか、皆の者！命があるまでは動くでないぞ！独断は許さぬぞ！」

しわがれた大声で、集まった化物達に法蔵院が下知すると、皆が一斉に返事をし、頭を下げた。

「古より、大峰の者達には、はらわたの煮えくり返る思いなれど、再び、紀伊大和百万石と四国百十一万石が戦ともなれば……」

頭を下げる皆を見渡しながら、法蔵院が呟くなか、刑部は力無く頂垂れたままだった。

日本最大の湖、琵琶湖。その最深部は百m近くある。

日の光も届かない湖底に、淡く輝く宮があった。

宮廷の中では、美しい十二重をまとった、女御達が楽しそうに歌を歌い遊んでいた。

「これは、これは……お美しい姫様方がお集まりで……」

御簾を潜り、鯰の様な髭を生やした、公家姿の老人が、女御達が遊んでいる所へとやって来た。

「あら、珍しや。右京の太夫が参られた」

「お上、鯰太夫が参られましたえ」

美しい少女達が、上品な笑い声を上げる。

鯰と言われ、老人は少し苦笑いを浮かべながら、笑う少女達を優しい目で見ている。

「何用じゃ、右京」

少女達の遊んでいる所の奥にある、御簾の中から声がした。

老人は少女達に一礼をして、御簾の前まで進み、其の場に座ると、
「本日は、東海蒼龍王様が御達 正三位近江廣徳十郎尹大納言
(いんだいなごん) 白金丸様しろがねまるにおかれましては……」

「ああ、もうよい……その様な、ながながとした口上など聞きとう
は無い」杓を前に頭を下げて口上を述べる老人に対して、御簾の中
から、うんざりとした声が聞こえた。

「何を申されます。近江様は御自分の立場と言う物を、わきまえな
さりませ。天帝様より正三位の位を授かり、弾正台の役職に就かれ
る、近江の國と其の周辺十ヶ國、五百万石を治められる大貴族であ
らせられますぞ」老人は、にが虫を噛み砕いた様な顔の眉間にしわ
を寄せて、御簾の中の白金丸を諫める。

「分った、分った……以後、気を付ける……もう、許せ、右京……」
面倒臭そうに答える白金丸の声に、老人の眉がびくびくと動き、
額のしわが更に深くなる。

「はあ……」老人が、諦めたかの様に大きくため息を付いて、
「下々では、何やら騒々しく、近江様には、お耳汚しと成るかも知
れませぬが、弾正台にはお知らせした方がよろしいかと存じまして
上がりました」老人が再び丁寧に頭を下げる。

「よい、申してみよ」

「はっ、伊予の狸めと大峰の狐めとが、再び、きな臭く成っておる
ようで」

「ほう……何故なにゆえじゃ」

「はっ、伊予の隠神刑部狸めの嫡孫、時貞を、大峰の笹百合狐めの
末娘、葵が手に掛けたとか。更に葵は、狸めらの宝である風斬りの
刀なる物を奪い逃げたとの事にございます」

「何……風斬りの刀だと……」

「はっ、そう聞き及んでおります」

驚きが混じる白金丸の声に、老人は何事かと訝しむ。

「近江様……如何なされました」

「……いや、何でも無い……相分あひった。ご苦労、下がってよい……」

「はっ、しかし、如何いたしまするか……このままでは、再び五百年前の様な事が起きるやも知れませぬ」

何時もなら、世間の噂話には喜々として乗って来る白金丸が、やけにあっさりとしている事に、老人は不思議そうな顔で尋ねた。

「両者も馬鹿では有るまい。そう、軽々と戦など起こしはすまい……よい、捨て置け」

「……はあ……」

老人は、何か煮えきらぬ思いを残し、再び白金丸に長々とした挨拶をした後、席を立った。

老人が去った後、御簾の中の白金丸は、

「風斬りの刀か……厄介な物が出て来たものだ……」と、眉をしかめていた。

既に日が昇り、辺りは明るくなっている。

葵は山添村の山奥にある、小さな神社の拝殿に隠れていた。

少女の姿に戻った葵は怯えながら、身を縮め胸にしっかりと懐剣を抱き締めていた。

「時貞様……」そう呟く葵の目に涙が光る。

其の時、外が俄かに騒がしくなった。

葵を見失った多門次の一党が、神社の境内に降り立っていた。

「この辺りに間違いは無い、探せ！」

多門次が手を振り、化物達に命令すると、化物達は散らばる様に飛び立った。

二十匹程の化物と多門次が境内に残り、境内の中を探りに掛かる。葵は、其の様子を拝殿の中から、一晩中追っ手に追われ、体のあちこちに痣と血の跡が残る体を縮め震えながら見ていた。

多門次が、何かの気配を感じたのか、葵の隠れている拝殿の中を探る様に見回している。

そして、葵が隠れている、向かって右側の部屋の扉を開け様とした時、

「何か、用か」と、一匹の大狸が多門次に声を掛けた。

多門次が、狸をちらつと横目で見たが、無視するかの様にそのまま扉を開けた。

「待たんかい！」

体長二m超える大狸が、同じ位の体格の多門次の肩を掴み引き止めると、

「放せ」多門次は前を向いたまま、素っ気無く言い放った。

「おい、兄ちゃん……誰に向かつて口きいとんか分ってんか？」

大狸に肩を引かれ、煩わしそうに大狸を睨み付け、

「邪魔をするな」と、大狸の手を乱暴に払い除けた。

「おお、ええ度胸やの……わしを、この社の祭神やしんと知っての狼藉か

……」

「なんだと……」祭神と言われ、多門次が訝しむ様に眉をしかめる。

「神山添伊波礼かむやまぞえのいわれ古命このみことつちゆうたら、わしの事じゃ！」

「何！」

凄む様に、多門次に迫る大狸に、思わず多門次が身を引いた時、開けた扉の影に白い足が見えた。

「此処に居ったか！」多門次が飛付く様に、更に扉を開けて、葵を見つけた。

葵は顔を背け、身を縮める。

葵を捕まえようと、部屋に上がり掛けた時、

「待てつて言うとるやるが！」と、再び大狸が多門次の肩を掴んだ。止められた多門次は、煩わしそうに振り返り、跪いて、

「御祭神、無礼の段は謝る。許されよ……」と、言つて深く頭を下げた。

「されど、我は、この大罪を犯したる下手人を捕らえる為に参つた。手出し無用に願いたい」

「下手人？」

礼儀正しく謝る多門次の姿を見た後、大狸は葵の方を見た。

葵は怯えながら、涙を溜めた目で大狸を見て、首を左右に振つて

いる。

「それを信じると……わしには、この狐のお嬢ちゃんが、そんな悪い事する子には見えんがな……まずは、名乗ってもらおか」

再び、多門次に振り返り、大狸が言うと、

「これは、ご無礼仕った。我は、伊予松山の隠神刑部様が御嫡孫、時貞様に仕える、勸善院多門次と申す者」多門次は更に頭を下げて名乗った。

「ほう、刑部はん所の身内か……これはこれは……で、このお嬢ちゃん、何しよったんや？」

刑部の名を聞いて、大狸の顔が緩み、気さくな態度で、頭を下げる多門次の前にしゃがみ込んだ。

「はっ、この狐は、我が主、時貞様を手に掛けた上、一族の宝、風斬りの刀を奪い逃走。それを今、追い詰めた所」

「ほお、御嫡孫をな……あの物騒な懐剣でか？」

大狸は、多門次の説明を聞いて、葵の持つ懐剣を睨んだ。

「は、物騒？はて、あれは我ら一族の宝、決してその様な物では……」

「ほう……そうかあ……」

訝しむ多門次を他所に、大狸は懐剣を睨み付けている。

「お前さんは、礼儀も物の道理も知ってるみたいやさかい言っけどな、あのお嬢ちゃんが刑部はん所の孫さんに簡単に勝てるか？そんなお嬢ちゃんが、孫さんを手に掛けて、あの程度の傷やなんて……信じられんな……」

「あの傷は我らが追い詰めた時の物……それにあの時、侍女も五匹連れて居った故、騙まし討ちも有るか」と

「騙し打ちな……そら、可笑しいわ。孫さんは、このお嬢ちゃんを知つとたんか？」

「いや……その様な事は……我ら一族、大峰の一族とは五百年来の仇敵。会った事も無いはず」

「せやったら、初めて会ったもんにお断りする様なほんくらか？闇討

ちやつたとしても、孫さんは、そんなぼんくらやつたんか？」

「我、主を悪く言うのは、お止め願いたい……」

大狸の言葉に、多門次は怒りの目で睨み付ける。

「まあ、ええ。わしが言いたいのはそれだけや。まあ、ゆっくり考え。頭に血が登つたら、大事なもんを見落としてる時があるさかい……」

「ご助言、心に刻む……それでは」そう言って、多門次は葵の居る部屋へと向いた。

「待ちいや兄ちゃん！」

葵の居る部屋に入ろうとする多門次を制し、大狸は部屋の中の葵を見て、

「お嬢ちゃん、この天狗の兄ちゃんと一緒に行くんか？」と、聞くと、葵は後退りしながら首を左右に振った。

「や、そうや……悪いけど、今日は、このまま帰ったってんか」

「そう言う訳には行きません！」

多門次が、大狸に振向き怒鳴ると、

「おい、兄ちゃん……此処はわしの縄張りや……今日の所は、わしの顔を立って帰ったてんかって言うてるんや」大狸は、睨みを利かせながら、多門次に言い寄る。

「我らが刑部様の家臣と知って申されて居るのか。狐めに味方すると申されるか」

多門次も負けじと睨み、大狸に言い寄る。

「あほか、誰も狐に味方するやなんて言うて無い……」

「ならば……」

二人は顔を突き合わせながら睨み合って居る。

「あのな、怪我した小鳥が、震えて懷に飛び込んで来よつたんや……それを見捨てるやなんて薄情な事、出来るか……わしかて男やど……」

「それど……」

「何も刑部はんに盾突く積りは無い。わしも刑部はんは尊敬しとる。

義理堅いお狸様やって事は、よう知つとる。せやけどな、神席の末席を汚す、こんなわしでも、人々の信仰を集めとんじや。薄情な事出来るかい！それでも無理に押し通るつちゆうんやったら……」

大狸はそう言うと、多門次から離れ、

「どつちの味方もする気は無いけど、わしの顔、潰すつちゆうんやったら、相手になつたで……」と、業とらしく四股を踏み出した。「……」其の姿を、多門次は黙って見ている。

「では、御祭神。刑部様より正式な親書を持って願えば、如何される」

「刑部はんの親書……道理を通せば、わしも文句は言わん……さつきも言つた様に、どつちに味方する気も無いよつてな」

多門次は大狸の言葉を聞いて、暫く考えると、

「では、今日の所は、これにて御免……お騒がせし、申し訳無く存ずる……」

多門次はそう言って、大狸に深く頭を下げ、振向き拜殿を出て行った。

「引くぞ！」外に出た多門次は、化物達に命令すると、境内から飛び立って行った。

多門次達が飛び立ったのを見て、大狸は葵へと向いて、

「そう言う事や。ゆっくりして行き……」と、微笑みながらそう言つて神殿の方へと向つた。

「御祭神様！」

立ち去る大狸に、慌てて葵が駆け寄ると、

「このご恩、生涯忘れませぬ……」と、平伏して礼を言った。

「……別に、ええ……それより、どうするんや？大峰の一族って言うてたな……大峰に帰るんやったら、わしの眷族付けたるか？」

優しい微笑を浮かべて尋ねる大狸に、葵は顔を曇らせる。

「……どないした？」

そんな葵の様子を心配して、大狸が尋ねると、

「帰れませぬ……帰れませぬ……」そう言って、葵は頂垂れる。

「帰れんって……なら、何処ぞ行く当てがあるんか？」

大狸にそう聞かれ、葵は首を横に振る。

「せやったら……」

「これ以上の御迷惑を掛ける事は出来ませぬ……直ぐに出て行きませ故……」

「まだ、あいつ等居るで……」

大狸の言葉に、葵は悲しそうな微笑みを浮かべて頷く。

「それより、体、大丈夫か？ ゆっくりして行ってええんやで」

「ありがとうございます。もう、大丈夫です」

「わしでは、力になれんか？」

「いえ、その様な事……」

「なんぞ、やる事があるんか？」

そう尋ねる大狸に、葵は静かに頷いた。

「そうか、覚悟は決めとるんやな……せやったら、好きにしたらええ……」

「ありがとうございます」と、葵は丁寧に頭を下げて、拜殿を出ようと振向いた。

「あつ、ちよつと待ち……長助！ 勘兵衛！」

「へい！」 呼ばれて二匹の狸が、ぽんつとその場に現れた。

「兄貴、なんでしやる？」

「あほ、命様って呼ばんかい！ 客人の前やど！」

「あつ……すんまへん……」

大狸に怒鳴られ、現れた狸が、恥かしそうに頭をかいている。

「長助、お前はこれのお嬢ちゃんに化ける、それから二匹で大峰に向つて飛べ」

「へい……何の為に？」

化けると言われた長助が聞くと、

「周りに悪い奴らがぎょうさん居るんや……お嬢ちゃんが逃げる前に、お前ら囿になつて、そいつらを引き付けたれ」

「なるほど、面白そうだな……」

「その様な事！危のうございます！」

囿になると聞いて葵が慌てて止めに入る。

「大丈夫や、こいつ等、子供の時から悪さばかりしおって、逃げ足だけは天下一品や。心配せんでええ」

「へへへへ……」大狸の言葉に、二匹の狸が葵に向って照れくさそうに笑っている。

「でも、兄貴……いや、命様。なんで勘兵衛も？」

長助が、体格の良い大柄の勘兵衛を指差し尋ねると、

「あれだけ大見得切ったんや、お嬢ちゃん逃がすのに、誰も付けんかったら怪しまれるやろ……護衛代わりに一匹付けたら、信憑性があるつちゆうとこや」

「流石、あに……いや、命様！」

「それで、お譲ちゃんは、一人身軽に逃げたらええ」

「その様な事まで……何から何まで、ご迷惑を……」

「此処で会ったのも、何かの縁や……気にしな」

大狸が頭を下げる葵の肩をぼんと叩く。

「じゃ、命様、行って参ります」

そう言って、長助が空中でくるっと一回転して葵そっくりに化ける。

「おお、ええがな、立派なもんや……ええか、無茶しなや」

「へい！」

返事をして二匹が拝殿を出て、空へ向って飛び上がった。

案の定、大勢の気配が、其の後を追って行くのが分かった。

「では、御祭神様……これにて失礼いたします」

「たっしやでな」

葵が深く一礼をして、拝殿を出て、空へと飛び上がった。

葵が飛び去る姿を、大狸は見えなくなるまで見送っていた。

.....

「なに、おじじ様が……」

「はっ、女狐めは殺すなと」

伊予から戻った佐助の伝令を聞いて、時康は眉を顰める。

時康は、裱姿から戦装束に着換えている。

「……分かった、下がってよいぞ」

「はっ」

佐助の去った後、黙って目を瞑っていた時康が、徐に目を開き、

「道真殿みちまね、どう思う……」と、隣に立つ戦装束の青年に声を掛ける。

「どう思うと、問われても……ご隠居様の言葉じゃ、従うのが道理
であろう」

道真と呼ばれた時康より少し年上に見える青年が、少し困った様な表情を浮かべ答えると、

「相手は、大峰の笹百合の娘ぞ、そんな簡単に行くものか……」と、同じく時康の隣に立つ、もう一人の戦装束の青年が無表情のまま呟く。

「うむ、憲正殿のりまさそれはそうじゃが……とにかく、追手の者へ伝令を

……」

道真が憲正と話している所を、

「構わん」そう言って、時康は立ち上がる。

「なんだと……」

「おいっ！刀を持って！」問い質す、道真を無視して、時康が奥に声を掛けると、老婆が恭しく刀を持ってやって来た。

「時康殿も出るのか？……」

「兄じゃを殺されて、じっとして居られるか」時康が、渡された刀を腰に差す。

「如何に、おじじ様の言葉でも……今回ばかりは」

「おい、どう言う意味だ」道真が、時康へと詰め寄る。

「好きにさせてもらう……」睨み付ける道真を睨み返す。

「馬鹿を言え！ご隠居様の下知だぞ！」

「やかましい！」怒鳴る、道真に時康が掴み掛かる。

「おやめ下さい！」思わず老婆が止めに入ると、

「引っ込め！」と、怒鳴り、時康は老婆を蹴り飛ばした。

「従兄弟殿！」道真は、そう叫ぶと、時康の手を払い除け、老婆へと駆け寄る。

「何をする！年寄りに！余りと言えば余りぞ！」

「ふん……」老婆を抱き起こし、怒鳴る道真から時康は顔を背ける。

「従兄弟殿！」

「……従兄弟殿、従兄弟殿……道真殿が我を叱る時は、何時もそう呼ぶ……」

「それがどうした！」

「行くぞ、憲正殿……」

「はっ……」

叫ぶ道真を無視して、時康は憲正と共に奥へと下がって行った。

「おい！従兄弟殿！」

「おやめ下され……」

時康を呼び止め様と怒鳴る道真を、老婆がか細い声で止めた。

「しかし……」

「坊は……いえ、時康様は御寂しいのですよ……ご両親を、松山の御家騒動の時に亡くされ……まだ、幼く顔も覚えない内に亡くされ……」

「今、兄である時貞様まで亡くされて……この婆には、よう分かります……」

「お婆……」

「婆は知って居ります。乳母として小さき時より御使えした婆は、時康様は本当は、お優しい方だと知って居ります……」

寂しそうな目で語る老婆の話を、道真は黙って聞いている。

「まだ、小さき時に、時康様を喜ばせ様と、蝶を捕まえ籠に入れてお見せしたら、時康様は？可哀そう？と申され、涙を流されました。そして籠より放って飛んで行く蝶を見て？蝶は楽しそうに飛んでいる姿が一番愛らしい？と、笑顔で仰いました……」老婆は其処まで語ると、涙で言葉を詰まらせた。

道真は老婆の話の聞いて、両親に続いて、兄まで失った時康の悲しみに同情した。

日が高く昇る頃、多門次と源一坊達が、偽者の葵を追って飛んでいる。

「多門次、何故手を出さん。このままでは大峰に逃げ切られるぞ。紀ノ川を越える前に……」

「分かつている。しかし、あ奴が付いておつては……あ奴に手を出す訳にはいかんからな」

多門次が苦々しく、付き添って飛んでいる狸を睨む。

「それは、そうじゃが……」源一坊も、額にしわを寄せて狸を睨む。

「しかし、おかしいとは思わんか……」

「何がじゃ」狸を睨んでいた源一坊が、多門次の方を見る。

「今まで、大台や大峰から離れる様に逃げていた女狐が、何故、今は大峰に向う……」

「うむ、それは……」訝しそくに目を細める多門次の言葉に、源一坊も一つしかない目を細める。

「確かめるか……」そう言って多門次は、一気に速度を上げる。

「おい！」源一坊も、慌てて多門次を追って一気に速度を上げる。

行き成り近付いた二人に、葵に化けた長助と護衛の勘兵衛は、慌てて空中で止まり、警戒して身構える。

葵を守るかの様に、勘兵衛が二人の前に出て立ち塞がる。

「どうした葵……何を今更……うむ！しまった！」

葵に声を掛けた多門次が、行き成り目を大きく開けて叫んだ。

「どうした多門次」源一坊が、多門次へと近付く。

「刀！……刀はどうした！」錫杖を前に突き出し、多門次が狸達に叫ぶと、

「何！」源一坊も、二人を見る。

「へっ？刀？」問われて、狸達は何の事やらと顔を見合わせる。

長助は上手く葵に化けたは良いが、刀までは持っていなかった。

「ええい！謀られた！」

「くそっ！」多門次と、源一坊は慌てて身を翻し、元来た方へと飛

んで行った。

「さって、どうしようかなあ……」

深い山の中をTシャツ、ジーンズにスニーカーと言う、場違いな姿をした二十歳位の青年が気楽な雰囲気です歩いていました。

「久しぶりに出て来た事だし、ちよつと気晴らしに……この辺りだと……月ヶ瀬のよっちゃんか……赤目のみっちゃん辺りかな……」

「へええ、みっちゃんて？」

「みっちゃんて言ったら、色白でぽっちゃりで巨乳の、えっ？……げ！白蓮！」

一人ぶつぶつと言っていた青年が、慌てて振り返ると、其処には一七・八歳位の、これまた山奥には不釣合いな、フリルがいっぱい付いた、パステルイエローのワンピースにミュール姿の少女が、目を吊り上げた怖い顔で立っていた。

「あなた！何処行くあるか！」

「あつ、いや、その……」怒鳴りながら詰め寄る少女に、青年は慌てふためく。

「よっちゃんて……誰、あるか？」青年の胸倉を掴み、鬼の様な形相で少女が問い詰める。

「えっ、あの……そ、それより……白蓮、何で此処にいるの？」

青年が目を泳がせ、答えに困り、誤魔化そうと話を変えると、

「はあい！お兄ちゃん！私も来たよ！」と、またまた、山奥には思いつきり不釣合いな、ゴスロリファッションの十五・六歳に見える少女が元気に手を上げて現れた。

「げっ、白雪……なんで、お前までえ！」

「ねえ、ねえ、聞いて、お兄ちゃん！金ちゃんたら酷いのよ！」

ゴスロリファッションの白雪が、縋る様に青年に言っていると、

「お前ら……また、喧嘩したんか……」と、呆れる様に青年が言った。

「わ、私は悪くないわよ！」白雪が頬を膨らませて、顔を背ける。

「白雪ちゃんが、相談あるって来たあるから、後、追って来たあるね……で、よっちゃんって誰あるか！」

「だから、お兄ちゃん、聞いてって！金ちゃんたら、私の作ったお菓자에文句言うのよ！」

「みっちゃんって誰あるか！」

二人の美少女に言い寄られて、青年は真っ青な顔で震えていた。

閑話休題

「で……」

「で？」

「何の用で来たんでっか……」

大狸が迷惑そうな顔で、青年を見ると、

「もう、冷たいなあ……山ちゃん……」青年は科しなを作って、大狸に擦り寄る。

「やま……わしは、神山添伊波礼琵琶古命でおます！」

「良いじゃん、だから山ちゃん……早口言葉じゃあるまいし……」怒鳴り付ける狸の腹を、青年は人差し指で、ぐりぐりと突付く。

「ぐっ……で、何のようでっか……今日も二人も美女連れて……」

「わあっ！」

大狸の呟きが、余程、都合が悪かったのが、青年が慌てて大狸の口を塞ぐと、

「……今日も？……」ワンピース姿の白蓮が、殺気の籠った冷たい視線で青年を睨み付ける。

「いや、ご、誤解だよ……いやだなあ……山ちゃん、僕が何時そんな事したの？誤解だよ、ははは……いやだなあ……」誤魔化す青年の言葉に、乾いた空気がその場を白けさせている。

「彼女は、白蓮。僕の奥さんだよ」と、ワンピース姿の少女を指差した。

「ああ、これはこれは、大陸の大黄河竜王はん所の娘さんでしたな」「始めましてえ、白蓮です」と、大狸に笑顔で会釈する。

「で、こっちが出戻りの妹……」青年が白雪を見て言い掛けると、

「出戻りって言うなあ！」白雪が、手を振りかざして抗議した。

「ははは、白雪はんでんな……白山の黄金丸はん所に嫁がれた……」
呆れた顔の大狸に、

「はい、始めましてえ、白雪でえす！」白雪は元気いっぱい挨拶をした。

「ええか、山ちゃん……黙るときや、分かってるな、黙っててや、頼むで、ほんまに、黙っててや……」青年が、大狸の肩を抱きながら、耳元で囁くと、

「分かってま……」と、呆れた顔で大狸は了解した。

「それで、今日は何の用でつか？近江ノ大納言はん」

面倒臭そうに尋ねる大狸に、大納言、白金丸は、

「うん、今日は……弾正としての仕事でね……」と、表情を曇らせる。

そんな白金丸を、暫く見て、

「……まあ、上がりなはれ……」大狸が、拝殿の部屋に案内した。

部屋に入り、白金丸達が待っていると、

「どうぞ、粗茶でっけど……」と、言って大狸がお茶を差し出した。

「あつ、どうも……」白金丸が、お茶を受け取って、

「なあ、知ってるか？伊予の狸と、大峰の狐の事……」と、大狸に尋ねた。

「……えらい、耳が早いでんな……」

「まあね、仕事柄……何か知ってるな山ちゃん……」

「ええ、さつきも可愛らしい狐のお嬢ちゃんと、烏天狗が来よりましたわ」

「えっ、可愛い……」白金丸は、其処まで言って、痛い視線を感じ、言葉を詰らせた。

「まあ、狐のお嬢ちゃんは逃げて行きましたけどな……」

「そいつら、何か持ってなかつたか？」

「お嬢ちゃんが……なんや、物騒な物、持っていましたわ」

「刀か？」

「ええ……よう分かりましたな。懐剣みたいな物、持ってました」

「懐剣？……俺は、二尺五寸の刀って聞いているんだけどな……」

「はあ、二尺五寸も、おまへんでしたで……なんでつか、それ」

白金丸は、暫く躊躇う様に考えて、

「……神杖ウヂだよ」と、硬い表情で大狸を見据え、ぼそりと呟いた。

「……」大狸は、驚き目を大きく見開いて青年を見ている。

「何で、そんなもんが……」

「たまにね……あるんだよ……」

困った顔で頭をかいている白金丸に、

「ねえ、お兄ちゃん神杖って何？」何の事かと白雪が尋ねた。

「ああ、俺達に取っては特別な物じゃないよ。お前だって小槌を持つてるだろ」

そう聞くと白雪は、手をパンと打って、

「ああ、これ？」と、言いながら手を離すと、両掌の間に片手で握れる程度の大きさの小槌が出現した。

現れた小槌を見て、白金丸は驚きながら、

「あほ！そんなもん、無闇に出すな！」と、白雪を怒鳴り付けた。

怒鳴り付けられた白雪は、慌てて

「あつ、ごめん……」と、言いながら再び手を閉じると、小槌が消えた。

「ほんとに……俺の？群雲むらくもの剣？や、白蓮しらねの扇子あふみなんかもそうだけど、神族の者が持つ道具たぐひの事を現世まへじゃ、そう呼ぶんだ」

「その何処が大変な事なの？」

不思議そうな顔で尋ねる白雪に、白蓮が向き直り

「あのね、白雪ちゃん。私達の持つ御道具は、私達の力を補助する道具あるね」優しい口調で説明し始めた。

「うん」

「つまり、神通が高大な神の力を、更に補助するぐらい、靈力が高いあるよ」

「そんな物が、普通のあやかしゃ、人間が持つても良い筈無いだろ」

「あつ、そうか……」二人の説明に、手をぱんと打って白菊が納得した。

「天界で靈力を込めて作られた道具だ、現世でも、冥府でも使える……邪なあやかしの手にでも渡れば、何するか分からん……危なくてしょうがねえんだよ」

「でも、そんな物が、何でこの世に落ちていたのよ？」

不思議そうな顔で首を傾げて尋ねる白雪に、

「落ちて居た訳でも無いんだろうけど……俺達にとって大切な物ではあるけど、さっきのお前みたいに、そんなに特別な物と意識していない……だから、たまに忘れて行ったり、置いて行ったりする神が居るんだよ」白金丸が腕を組みながら、困った顔で説明し、

「こまつたもんや……」大狸も同様に腕を組んで頷いている。

「まあ、普通は神社とかに封印して祀つてあるんだけど……盗まれたりもするんだ」

「盗む？……」

目を細め尋ねる白雪に、

「風斬りの刀も、八幡様の所に納めてあつたはずなのに、何時の間にか無くなつていて……」

白金丸は思い出す様に答えて、

「いやあ、それが分かった時は、天界でもちよつとした騒動が起きてさ、監督官庁の役人の首が幾つか飛んだよ」縦割り行政の薄情さを表す様に、にたにた笑いを浮かべ説明した。

「でも、其の時探さなかつたの？」

「それがさ、なんで役人の首が飛んだかつて言うと、何時無くなつたかも分からなかつたんだよ、だから、探しようも無くてね……それが、太政官にも伝わってね、俺も気に留めて居たんだ」

「確かに、兼任の弾正台の長官としては、放つとけないあるね」横から白蓮が口を挟む。

「でも、何で長官のお兄ちゃんが直接出るわけ？部下にやらせないの？」

当然と言えば当然の事を白菊が尋ねると、

「あのな、政治的な取引って奴があるんだよ……」白金丸は、目に悪巧みを浮かべる。

「役所として動いて部下に任せると、事が公に成る。それだと面白くも何とも無いんだよ……此処は俺が内々で処理して恩を売って、監督官庁のお偉いさんに借りを作らせた方が面白いんだよ……」白金丸の口元が、にやりと笑みを浮かべる。

「でも下手したら、俺の首が危ないかも……」

首に手をちよんと当て、白金丸が冗談めかしに言つと、

「嫌あるよ、二トトの奥さんなんて！」白蓮は、目を吊り上げ怒鳴り、頬を膨らませる。

「おい……」その白蓮の様子に白金丸は、ある種の絶望を感じた。

「あつ……」

そんな最中、神社の上空を多くの化物の気配が通り過ぎた。

「なんだ……こんな昼間に、派手に飛び回りやがって……」眉を顰める白金丸を見て、

「大丈夫でっしゃろ、どうせ結界張つとるし……どうやら、ばれたな……」と、大狸が、にやりと呟く。

「なんだ、それ？」

にや付く大狸に、白金丸が尋ねると、

「なに、お嬢ちゃんを逃がすのに、ちよいと芝居を打ちましてね……

あいつ等、お嬢ちゃんに化けた、わたの身内を追い掛けてた事に、どうやら気が付いたみたいですよ」大狸は楽しげに説明した。

「なんだ？……お前、狐に味方したんか？」

大狸の説明を聞いて、不思議そうに尋ねる白金丸に、

「……別に味方した訳やおまへん……懐に飛び込んで来よつた小鳥を放してやつただけです……わては、もう、誰の味方もしまへん……

……」大狸は、何故か顔を曇らせて答えた。

「……」そんな大狸を、白金丸は黙って見ていた。

塞ぎ込む様に俯く大狸を、硬い表情で暫く黙って見ていた白金丸

が、

「じゃ、あいつらを追いかければ良い訳だ……邪魔したな」そう言
って立ち上がると、

「私も行くある！」

「あっ！私も！」二人が後を追う様に立ち上がった。

「馬鹿野？！男の仕事に付いて来るな！」

厳しい顔で、怒鳴り付ける白金丸の迫力に、二人は身を縮めた。

「遊びじゃねえんだよ……」

更に、睨み付ける白金丸に二人は言葉が無かった。

「じゃあな、山ちゃん。ちょっと仕事して来るわ……」

白金丸は、手を振りながら二人を置いて拜殿を出て行った。

残った二人が、詰まらなそうに唇を尖らせている。

「もう……何よ……あんな言い方しなくても……」

「そうある……偉そうに……」

ぶつぶつと呟く二人ではあるが、結局は、夫として、兄としての
白金丸には逆らえない。

「ちやらい白金丸も、日頃から決める所は決め付けている様だ。」

「でも、本当に仕事に行くのかな……」

「ぼそりと呟いた白雪の言葉を聞いて、ギンツと白蓮の目が光る。」

「なんですって……」

殺気の籠った目で睨み付ける白蓮に、

「あっ、いえ、別に、深い意味は……」と、白雪はしどろもどろに
なる。

「……探しに行くある……」

「えっ、でも、付いて来るなって……」

「だから、探しに行くある！」

「はっ、はい……」白蓮の迫力に押され、白雪は思わず同意した。

白金丸の威厳は、二人にとっては、あまり大きくは無様である。

そんな二人の横で大狸は、二人の会話が聞え無い振りをして、黙
って茶碗を片付けていた。

進路を反転して葵を追跡している、化物を引き連れた源一坊と多門次が、大狸の社の上空を通過する。

「まだ、あそこに居ると言う事は無いだろうな」

「……」

源一坊の問い掛けに、多門次は気付かない。

「おい、多門次……どうした」

「あつ、おつ、すまぬ、考え事をしていた」

多門次に近付き呼び掛ける源一坊に、多門次が我に帰って慌てて答えた。

「うむ……、女狐が未だ、あの社に居ると言う事は無いだろうな」

「ああ、まさか……それは無かるつ……」

再び問い掛ける源一坊だが、多門次は何やら上の空で答えた。

「ううむ、とにかく急ぐぞ」

源一坊が、腕を振り上げ再び葵の後を追いかかけ様と体を返すと、

「あつ、待て！源一坊！」と、多門次が慌てて呼び止めた。

「何だ」源一坊が何事かと振り返る。

「このまま行けば、春日様の社が在る……」

錫杖を突き出し多門次が言うと、

「うむ、それは聊か……まずいな……」源一坊は、自分達の進路の先に在る春日山を見た。

「先程の大狸の件も有る……地場の神々との争いは避けねばならん」

「確かに、それはそうじゃが……」

面倒臭そうに言いながら、源一坊が多門次へと振向くと、

「お主は聊か配慮に欠ける所がある。地場の産土神うぶすなや土地神との揉め事は避けねばならぬ。ましてや、千歳ちとせを重ねる大神には尚更の配慮があつてが必定じゃ」

「……」源一坊は、苛付く様子で多門次の説教を聞いている。

「この様な軍勢を引き連れて、大神達の所領に入れば……」

「ああつ、もう良い！分かった！御主の説教は後程ゆっくり聴く！

今はそれ処ではなかるう！どうしろと言うのだ！」

「……うむ、春日山を避け、お主は生駒山の方へ、我は笠置山の方へと飛ぶ……」

「ああ、分かった！急ぐぞ！」

苛立ちながら源一坊が、飛び去ろうとすると、

「まで！」と、再び多門次が呼び止めた。

「今度は何だ！」焦る源一坊が振向きもせず怒鳴り声を上げる。

「此処は大和の地、八百万やふゆずの神々が坐おわす。くれぐれも、刑部様の御名を汚す様な……」

「分かつて居るわ！」

再び始まった多門次の説教を怒鳴り声で遮り、源一坊は半数の化物を引き連れ、生駒山の方へと飛んで行った。

多門次は、飛び去る源一坊を見送り、

「行くぞ……」と、静かに手を振り化物達に合図すると、笠置山の方へと向った。

……

「で……」

「で……」

山奥には不釣り合いな服装の美少女二人が顔を見合わせている。

「もう！何処に行ったあるか！」

「お兄ちゃん、気配消すと分からないのよねえ……」

手を大きく振りながら怒鳴る白蓮を見て、白雪は途方に暮れていた。

「あの浮気者！きつと、巨乳のみっちゃんとかの所へ行つたある！」

力強く拳を握る白蓮の目には、嫉妬と怒りの炎が上がっていた。

「あれ？お兄ちゃん巨乳好きだったっけ？」

怒りの炎に包まれる白蓮の胸を眺めながら白雪が呟くと、

「……貴方に言われたく無いある……」と、白蓮も白雪の胸を見ながら呟いた。

緊迫した空気の中、睨み合いが続く……

「……止めるある……」

「そうね……虚しいだけね……」緊張が解け、二人は諦めたかの様に溜息を付いた。

「よう、よう、ねえちゃん！」

「此処で、何しとんねん（訳 何をしている）！」

虚しさに打ち拉がれている二人の前に、三匹のガラの悪そうな河童が通り掛かった。

「わしらの前を黙って通るんかあ、おおう……」

「挨拶も無しに、何しとんじゃ（訳 何をしているのか）！」

三匹は凄みながら、二人を取り囲んだ。

白蓮と白菊はしらけた顔で三匹を眺め、

「はああ……」と、業とらしく溜息を付いた。

「居るのよねえ、田舎には……こう言うの……」

「そうあるね……」二人は完全にしらけている。

「何ごちやごちや言うとんねん（訳 何を言っているのか）！」

「ごおあら！舐めとつたら、いてまうど（訳 おい、舐めていたら、痛い目に合わせるぞ）！」

自分達を見て、一向に怯える様子の無い二人に、三匹は更に凄む。

「へへへ、よう見たら、えらいべっぴんさん（訳 良く見たら、凄

い美人）やんけ……」

「ほんまや、こつちのねえちゃん、わたの好みやで……」

下品な笑いを浮かべ三匹が、二人に抱き付き顔を見回している。

「なあ、ねえちゃん。楽しい事せえへんか（訳 Hしないか）？」

一匹の河童が、白雪のフリルのいつぱい付いたスカートの中に手を入れる。

「へへへ、こつちのねえちゃんも……」

残りの二匹が、白蓮の胸を揉み、股間へと手を伸ばす。

三匹の河童に体を弄もよほられながら、

「別にね……生娘じゃあるまいし……」

「ガキ相手に、騒ぐ気も無いあるけど……」と、鬱陶しそうに二人

が呟く。

「へへへ、大人しい、しときや……今、あんじょうしたるさかい（訳 良い具合にしてあげる）……」

一匹が、白蓮のワンピースの裾を捲り上げ下着に手をかける。

「こつちのねえちゃんも……へへへ、ぺちゃパイ（訳 貧乳）やけど……」

そう言いながら、一匹が白雪の胸を揉むと、

「ぺちゃパイって言うなああああ！」叫び声と共に、捻りの効いた見事な右ストレートが河童の顔面に炸裂した。

それと同時に、白蓮は一步足を後ろに下げ、

「こつちも、鬱陶しいある！」と、叫びながら、小さな白いリボンが沢山付いたパステルピンクの可愛いパンティーを曝しながら、頭上へと大きく足を振り上げ、パンティーを掴んでいる河童へと足を振り下ろした……なんなら、パンティーの描写に数ページ使っても良いのだが、今回は止めておく。

美しいとまで言える見事な、白雪のコークスクリューと白蓮の踵落しを食らって、河童二匹は白目を向いて地面で痙攣している。

「ひっ！」其の様子を見て、残った河童がその場から逃れ様と走り出す。

「逃がすか！」

二人が叫びながら、逃げる河童へと向って、ダブルドロップキックを決める。

「ぐうえ！」

河童は体を仰け反らせながら5mほど弾き飛ばされ、大木へと衝突して悶絶した。

白蓮は摺り下がったパンティーを引き上げ、スカート調える。

白雪は胸のフリルを整え、ブラのパットの位置を直している。

そして二人は、

「ふん！」地面で痙攣している河童達を蔑んだ目で見下ろした。

「お姉様……お歳の割には、可愛い下着ですねえ……」若作りが…

…と、言わんばかりに白雪が冷やかな目で白蓮を見る。

「あら……貴方こそ、サイズの合った下着を着けた方が良くてよお……」見栄っ張りが……と、言わんばかりに白蓮が哀れんだ目で白雪を見た。

乾いた緊張感に包まれた沈黙の中、二人の視線が火花を散らす。

「で……」

「で?……」

「どっちに行くあるか?」

「もう、分かんないわよ……」

「じゃ、とりあえずこっち……」

「とりあえずって何よ?」

「とりあえずはとりあえずあるよ」

などと、二人は話しながら、森の奥へと歩いて行った。

多門次は周囲に気を配りながら飛んでいたが、

「……見誤ったか……」と、眩き、空中で静止した。

続く化物達も多門次の後ろで止まる。

空中で多門次は、周囲を見回す様に探っている。

「やはり、気配が無い……くそっ!」

多門次は錫杖を振り上げ、

「付いて来い!」と、化物達に合図して、生駒山の方へと進路を変えた。

一方、源一坊は、

「ふふふ、匂うぞ匂うぞ……女狐めの匂いが」と、鼻をひく付かせながら呟く。

そして、源一坊達が生駒山の裾野に近付いた時、高度を下げ木々の間へと向う青白い光が見えた。

「おったぞ!」

源一坊は叫び速度を上げ、化物達もそれに続く。

青白い光が消えて行った所へと、源一坊達が飛び込んで行く。

木々の間を物凄いスピードで飛び抜けながら、

「どおりやああああ！」源一坊は、邪魔になる木々を力任せにへし折って飛んで行く。

背後から轟音と共に近付いて来る気配に、葵が青ざめる。

「がっははははは！追い付いたぞ！」

源一坊が飛びながら錫杖を振り回し、連続で衝撃波を放つ。

衝撃波は木々を薙ぎ倒しながら、三日月型に空気を震わせ、葵へと向う。

背後の只ならぬ気配を感じ、葵は身を捻り太い枝を掴む。

枝に掴まり、小半径を描き葵が進路を変えると、其処へ衝撃波が轟音と共に通り過ぎた。

「おのれ！猪口才な！」源一坊が毒づき、再び錫杖を振るい衝撃波を放つ。

葵はそれに気付き、上空へと進路を変える。

衝撃波を交わした葵は、懐剣を口に咥えると、全身を青白い炎で包み白狐の姿へと変化した。

林の中から葵を追って、源一坊達が上昇して来るのを見て、葵は再び林の中へと飛び込んだ。

「くそ！ちょこまかと！」源一坊は顔を顰め、葵が逃げ込んだ方を睨む。

「挟み撃ちじゃ！分かれる！」

錫杖を振りながら源一坊が指示すると、化物達は二手に分かれ、その間を源一坊が葵を追う。

凄まじいスピードで林の中を飛びぬける化物達が葵に迫る。

右から迫る化物に光の矢を受け、葵は左へと進路を取る。

其処には、別の化物達が葵と平行に飛んで壁となっていた。

進路を阻まれ、葵が再び上昇すると、

「たああああ！」待ち構えていた源一坊が衝撃波を放った。

「ぎゃあん！」

逃げる術が無い葵に衝撃波が直撃し、葵は悲鳴を残し力なく林へ

と落下して行く。

「くたばれ！」叫びと共に、源一坊が葵の落下して行った地点へと、容赦無く連続で衝撃波を放った。

衝撃波は木々を薙ぎ倒し、土煙を上げる。

遠くから、山の裾野に舞い上がる土煙を見て、

「……………くそっ……………遅かったか……………」と、多門次が眉を顰め呟く。

「行くぞ！」多門次は化物達に命令すると、土煙の上がっている地点へとスピードを上げた。

……………

午後四時、春の日差しが傾いて来た頃、五人は食堂を出て、家路に着こうとしていた。

校舎裏の自転車置き場を通り過ぎ、初めに集まった花壇の所に差し掛かった時、

「じゃ、月曜日の放課後、此処に集まりましょう」と、明日香が皆に笑顔で提案した。

「それは、良いけど……………毎日来いなんて、強制は嫌よ」

翔子が、浮かれる明日香の様子を見て、苦笑いしながら言うと、

「分かっているって、皆だって塾とかの予定もあるだろうし」と、明日香はあっさりと了解した。

「でも、集まるのが花壇って言うのもな……………」

「どう言う事？」

何やら、不満そうに顔を顰める龍士に、明日香が尋ねた。

龍士にしてみれば、明日香と一緒に居る事は嬉しいのだが、校舎裏の花壇の様な、座る場所も無いオープンスペースでは、色気も素っ気も無い。

「だって……………座る所も無いのに……………」

誰も居ない教室の一角で、窓から差し込む夕日に輝く明日香と二人で向かい合い、愛の語らいを妄想する龍士にとって、周りに植えである花水木や沈丁花、花壇のコケ珊瑚や菖蒲に小蝶花の花々が気に食わない訳では無いが、予算の関係か、石や欠けたレンガを継ぎ

接ぎする様に並べてある学校のしょぼい花壇では妄想が広がらない。本当の恋人同士と言うものは、何処に居ても楽しいものであるのだが、今の龍士では知ろう筈も無い。

「うふ、大丈夫！楽しみにしていて、月曜日には、重大発表出来ると思うから！」

明日香が、楽しそうに笑顔で言うと、

「重大発表？」と、皆が首をかしげた。

と、其の時、亜美が急に明日香の制服の裾を強く引いた。

「えっ？何？」急な事に明日香が驚き、亜美の方へと振向くと、

「……」亜美は、普段でも病的に白い顔を更に青くして、怯え震えながら空中の一点を見詰めていた。

「ど、どうしたの亜美ちゃん！」

明日香は、亜美の尋常では無い表情に驚き、亜美の肩を掴んだ。

皆も亜美の怯える顔を見て、心配になり亜美の周りに集まる。

「どうしたんだ……」邦彦が亜美の視線を追って空を見た。

其の空間は、特に変わった様子も無い……かと、思われたが、何やら雲の様な物が渦を巻きだした。

「な、何だ？」初めて見る奇妙な気象現象に龍士が目を細めた瞬間、バシツと、稲光が雲の渦に沿って走った。

「わっ！」

「きゃっ！」急な光に皆が、驚き声を上げる。

次の瞬間、行き成り広がった雲の渦から、激しい稲光と共に、白と黒の大きな物体が渦を突き破り飛び出して来た。

ずどおおおんと、地響きを上げて物体は落下し、激しく転がる。

「しゃあああ！」

「がっつ！」

それは、馬ほどの大きさの白い狐に、長さ二十m位の黒い大蛇が巻き付いていた。

その非常識な生き物は、お互いに牙を剥き出しにして、威嚇している。

「がつつ！」白狐が自分に巻き付いている、直径三十cmは有る大蛇の胴に噛み付く。

「しゃあああ！」大蛇は、噛み付かれた痛みで一度大きく身を反らしたが、次の瞬間、反動を付けて白狐の太股に噛み付いた。

「ぎゃうん！」噛み付かれた白狐が顔を歪め、大蛇から口を離す。

二匹は更に絡む様に転がる。

「ええい、くそつ！結界が破れたか！」今度は、渦巻きの中から一つ目の大入道が現れた。

「源一坊！何をしている！」更に烏天狗が現れた。

「わしでは無いわ！」

「くそつ！なんと言う力じゃ……！」

暴れる白狐と大蛇を、二匹の化物が忌々しげに顔を顰めて見ている。

「このままでは不味い！天よりお叱りを受けるぞ！」

「おお、結界を張るぞ！」

二匹は何やら、呪文の様な言葉を呟きながら、錫杖を中段に構える。

五人は、ただ無言でその非常識な現象を眺めていた。すると、亜美がその場にばったりと気絶して倒れた。

「わあ！」龍士が倒れた亜美を見て叫ぶ。

それがきつかけとなり、皆が我に帰り、

「おいっ！山添！」邦彦が慌てて亜美を抱き上げる。

「亜美ちゃん！」明日香も慌てて、亜美の脇に寄り添う。

「な、な、何……何よ……何なのよ……」翔子は一人、化物達を見て震えている。

皆が倒れた亜美を取り囲む様に集まり、茫然と化物達を見ている。其の時、明日香が自分の傍に落ちている、綺麗な布で出来た細長い袋を見つけた。

「何？これ……」明日香はそれを拾い上げ眺めた。

「ぐうおおお！」白狐が痛みにも耐え渾身の力を込め、大蛇に噛み付

き胴の一部を食い干切る。

噴出し飛び散る血飛沫ちしぶきを浴びて、白狐の顔が真っ赤に染まる。

「ぎゃあああ！」大蛇は白狐の太股から口を離し、悲鳴を上げる。

そして、怯んだ大蛇の締め付けている力が緩んだ時、白狐は大蛇を振り払い、大蛇の顔へと噛み付いた。

噛み付かれた大蛇の顔が拉ひしゃげ、血飛沫と共に目玉が飛び出す。

そして、大蛇の体から力が抜け、だらりと地面にたれた時、大蛇は黒い塵となつて消えて行つた。

白狐は、噛み付かれた足を引き摺り、ふらふらとした足取りで明日香達の方へと振向いた。

「ひっ！」白狐に朦朧とした目で睨まれ、龍土が思わず明日香に抱き付く。

「なっ！何すんのよ！」突然の事に明日香は驚き、龍土を引き剥がそうと、顔を強く押す。

と、其の時、

「うおおおお！」

「はああああ！」多門次と源一坊が気を込めながら、錫杖を頭上へと振りかざし、

「はあっ！」同時に、気合と共に一気に錫杖を振り下ろす。

振り下ろされた瞬間、空間が切り裂かれる様に割れ目が出来た。

二匹の間で、全ての光を吸い込む様な漆黒の割れ目が広がり、周りを飲み込んで行く。

そして……ほんの五分に満たない非常識な現象は、明日香達と共に校舎裏の花壇から消え去った。

第3話

――隠里――

気が付けば、其処は森だった。

明日香に抱き付いたまま、龍士は周囲の景色が急に変わった事が理解出来ずに、ただ呆然と辺りを見回していた。

明日香も、抱き付く龍士の顔を押しながら、ただ呆然と辺りを見回していた。

「な、何が、ど、どうしたんだよ……此処、何処だよ……」

顔を青ざめ呟く龍士の声を聞いて、明日香は我に返り、龍士の手が自分の掴み所の無い胸を掴んでいる事に気付き、

「ど、何処触ってるのよ！」と、叫びながら龍士を平手で張り倒す。バシッと、弾けた音と共に、龍士は仰け反り仰向けに倒れた。

「この変態！痴漢！スケベ！けだもの！」

倒れた龍士の横で明日香が、あらん限りの罵声を浴びせると、

「そ、そんな！不可抗力だよ！態とじゃないよ！」と、龍士は、不名誉な罵りに力いっぱい抗議した。

「聞く耳持たん！」龍士の抗議を一喝し、明日香は身を縮める龍士のお尻を蹴飛ばした。

「変態！変態！痴漢！痴漢！けだもの！けだもの！」

明日香は、見ている者が居れば龍士に同情すると思われる程、罵りながら龍士のお尻を蹴飛ばしている。

「あう、いや、ごめん！やめて！」

「黙れ！変態！変態！変態！変態！変態！」

明日香に罵られ、蹴られて、龍士は身を縮めお尻の痛みに耐えていると、

「あつ、いや、あう、うふ、わふ、わあお……」痛みとは別の感覚が心に芽生え初めて来た。

――

軽い目眩が治まり、気が付くと見覚えの無い風景が広がっている。腰まである熊笹に覆われた林の中で、呆然としている邦彦の腕の中には、眠った様に気を失っている亜美がいた。

「おい、山添……山添……」

がっしりとした体格の邦彦が、囁く様な声で呼びかけながら、触れれば壊れそうな華奢で小柄な亜美を遠慮がちに揺さぶっている。

なかなか気が付かない亜美の顔を間近で見ながら、

「……可愛い……」出物、腫れ物所構わずと言おうか、この状況下において、邦彦は仄かに発情していた。

そうなると、邦彦としては亜美を起こすより、このまま亜美の寝顔を見ていたいと言う思いが強く湧いて来た。

少し頬を染めて、じっと亜美を見詰める邦彦。

特にそれ以上の事は求め様とはせず、邦彦はただじっと亜美を見詰めている。

そして、亜美がゆっくりと目を開ける。

「亜美は、寝ぼけた様な焦点の合わない目で暫く邦彦を見ていたが、「いやああああ！」と、その小さな体で、どうしたらそんなに大きな声が出るのかと思う程の叫び声を上げた。

「あつ、あ、あの、あ……」

邦彦は、其の叫び声に驚きながら、どうしたら良いのか分らずに戸惑っている。

叫び終わった亜美は、邦彦の腕の中で身を縮め、目を強く閉じて震えている。

「あつ、ごめん……あの、えつと……」

怯える亜美の姿を見て、取りあえず謝った邦彦だが、其処から先、どうすれば良いのか分らず戸惑い、

「えつと……あの、大丈夫だから……」と、何が大丈夫なのか分らないが、亜美を安心させようと微笑みを浮かべる。

しかし、亜美は目を硬く閉じ、邦彦の笑顔を見る事も無く震えている。

「あの、放すよ……立てる？その、山添、気を失って倒れたから、俺、その、だから……」

優しく語り掛ける邦彦の言葉を聞いて、亜美はやっと恐々、目を開け邦彦を見た。

まじかに見える邦彦の顔を見て、亜美は青白い頬を仄かに赤く染める。

邦彦は、そつと亜美を抱き起こす様に体を起こし、地面へと静かに下ろした。

「大丈夫か？痛い所とか無いか？」

背の高い邦彦が少し屈み込んで亜美に尋ねると、亜美は驚いた様にビクツと体を震わせ、すぐ傍にある木の陰へと隠れた。

その様子を見て、少し残念そうに邦彦は微笑みながら、

「どうやら、大丈夫みたいだね」と、亜美に尋ねた。

すると亜美は、木の陰に隠れたまま、顔を半分出す様にして、邦彦に視線を合わせる事無く、小さくこくりと頷いた。

邦彦はそれを見て安心したのか、微笑みながら頷いた。

そして邦彦は改めて辺りを見渡し、

「何処なんだ、此処は……」と、呟く。

ついさっきまでいた、校舎裏の花壇とは掛け離れた風景に邦彦は戸惑っている。

「それに、皆は……あの化物達は何処に行ったんだ……」

邦彦は、龍士達の事も気に成っていたが、あの化物達が、まだ傍に居ないかと警戒した。

視界の悪い林の中で、邦彦は付近に何も無い事を確認すると、

「山添、ちよつと皆を探してくる。だから、此処を動くなよ」と、

亜美に向って言った。

すると亜美は、不安を浮かべた顔で暫く邦彦を見ていたが、小さく頷いて了解した。

「いいか、動くなよ……直ぐに戻って来るからな」

笑顔で亜美に念を押してから、邦彦は辺りを警戒しながら林の中

を進んで行った。

体の重さが一瞬消えたかのような不快な目眩に足がふらついて、慌てて半歩踏み出し足を踏ん張る。

誤作動した三半規管のせいだ、崩れた体の平衡感覚を修正しながら顔を上げると、其処は、ごつごつとした岩肌に見える斜面に挟まれた狭い谷間だった。

「何処？……此処……」

決して豪華とは言えないが、春の花々が咲いていた校舎裏の花壇の風景が、一瞬で殺伐とした岩肌に見える風景に変わった事に、翔子は驚き戸惑っていた。

「皆……何処？……何処に行ったの？……」

非常識な現象に、翔子は恐怖と不安を感じ、周りを見渡し自分が一人である事を知ると、更に不安は膨らんだ。

「どうなっているのよ……皆、何処に行ったのよ……」

翔子は一人、岩肌の斜面に沿って、辺りをきよきよると不安げに見回しながら、皆を探そうとゆっくりと歩き出した。

「いやあ、参ったな……」

「なんやっただんでっしやる……」

「恐ろしい女子おなこや……」

怯える翔子の耳に人の声が飛び込んで来た。

「やっぱり外は怖いでんな……」

「わてらは、此処が一番落ち着くな」

少し先に見える、岩肌の斜面が終わり、Y字路になっている辺りから聞こえる声に、翔子は漠然とした期待を抱いて、Y字路の方へ駆け出した。

翔子がY字路を右へと曲がった瞬間、

「ひっ！」

「わっ！」と、出会い頭に、お互いが驚いて声を上げた。

翔子の目の前には、驚き半歩下がって身構える河童が三匹居た。

その、非常識な生き物に翔子も驚き、認識の範囲を飛び越えた光景に声が出ない。

頭は天辺に有る皿の様な物を中心に、おかっぱヘア。目はギョロツと大きく、口は燕の雛の様な平たい口ばし。両生類の様な滑つとした皮に覆われ、手足の指の間には水掻きがあり、背中には甲羅があつた。

腰蓑姿の河童達は、愛嬌が有ると言えば愛嬌があるのだが、始めてみる理解し難い生物の姿を見て、翔子の思考は止まった。

三匹の河童と翔子はお互いに、体を仰け反らして身構え睨み合っている。

「な、なんやねん……」

河童の声に我に帰った翔子は、一気に恐怖が湧き上がり、

「きゃああああ！」と、耳を劈く悲鳴を上げた。

「わあああ！」

翔子の悲鳴に驚き、河童達はダイブする様に後ろに飛び退き、身を縮める。

「きゃああ！きゃああ！」

翔子は悲鳴を上げながら、その場へたり込む様に座ってしまった。

「あれ？……」

その様子を見て、河童達が落ち着きを取り戻した。

そして、一匹の河童がゆっくりと立ち上がり、翔子に近付き、

「わああ！」と、業とらしく大げさに手を頭上に振り上げ翔子を脅す。

「きゃああああ！」

河童に驚き体を捻り、後ろに倒れ悲鳴を上げる翔子を見て河童達が顔を見合わせてにやりと笑った。

残りの河童達も翔子に近付き、取り囲む様に集まり、

「わああ！」と、三匹同時に両手を挙げて翔子を脅す。

「きゃあああ！きゃあああ！」

頭を抱え、膝を付いて身を縮めてうつ伏せに成り、悲鳴を上げる
翔子の姿を見て、

「これや！これやがな！」

「この反応が欲しかったんや！」

「やったね、兄貴！」河童達は肩を抱き合って喜んでる。

再び、にやりと笑った河童が更に翔子を脅す。

何がなんだか分からない翔子は、河童達に再び悲鳴を上げる。

翔子の悲鳴を聞いて、またまた河童達は喜んで翔子を脅す。

しかし、翔子も馬鹿ではない。

何時までたつても襲つて来ない河童達に『何がしたいんだ』と、
疑問が湧いた。

河童達は、しつこく翔子を脅す。

「きやああ……きやああ……」いい加、減翔子は馬鹿馬鹿しくなっ
て来た。

その時、一匹の河童が翔子を後ろから羽交い絞めにする。

「きゃっ！」急な事に驚き、翔子が短い悲鳴を上げる。

「へへへ、よう見たら、この姉ちゃんかて、えらいべっぴんやで…

…」

羽交い絞めしている河童が、顔を突き出し翔子の横顔を眺める。

「こいつ……人間でっせ……」一匹の河童が不思議そうに翔子の顔
を覗き込む。

「何、ほんまか？」もう一匹の河童も翔子の顔を覗き込む。

顔を覗き込まれて、翔子は負けじと河童達を睨み付ける。

「細かい事はええやんけ、それより、姉ちゃん……わてらと、ええ
事せえへんか？」

羽交い絞めしている河童が、にたにたと嫌らしい笑いを浮かべて
いる。

「へへへ、そうや……じきにあんじょうしたるさかい……」

一匹の河童が翔子の胸に水掻きの付いた手を伸ばし、形の良いB
カップの胸を鷲掴みにする。

「いやっ！」

急に胸を掴まれ、翔子は驚き身を振る。

「大人しい、しときや姉ちゃん……これからが、お楽しみやで……」
そう言いながら、一匹の河童が翔子のスカートを捲り上げ、秘密の花園へと手を伸ばす。

思わず身を縮める翔子だが、ふと、冷静に『こいつ等……只の変態か?』と、思うと、無性に腹が立って来た。

このような事態は、今までも何度か経験していた翔子は、痴漢に対しての対処は冷静だった。

日本人形の様な上品な美少女の翔子には、聊か不釣合いな黒いレース模様で飾られたスキャンティーに手を伸ばし、今にも摺り下げ様と河童が力を入れた時、

「やめんかあああ！」と、叫び翔子は、河童達の頭にフィールドを張って、皿に思いつきり静電気を食らわせた。

「ひいいいい！」

普通、皮膚は乾燥状態に比べ、発汗時には十二分の一、湿潤状態では二十五分の一まで抵抗（ ）が低下し、非常に感電し易くなる。皆さんもご存知と思われるが、河童の皿は通常、湿潤状態を保っている。

その湿潤状態の脳天にある皿に、スタンガン宛らの電撃を食らって、河童達は一瞬で白目を向いて悶絶した。

翔子は、痙攣して倒れている河童達を見ながら、ゆっくりと立ち上がり、下着とスカートを整え、スカートの付いた土汚れを払うと、
「さて……どうしてくれよう……かしら……」と、残酷な笑みを口元に浮かべ、冷酷な目で河童達を見下ろした。

- - - - -

「いったい、何処なんだ……此処は……」

腰まで生えている熊笹に足を取られながら、邦彦は辺りを見回している。

熊笹を足で踏み付け倒している為、中々前へとは進めない。

「これだと……山添じゃ、無理だな……」

中学時代、柔道部で鍛えていた邦彦でも、息が上がって来た。

邦彦は立ち止まり、木々の合間を覗き込む様に、見回すが何も見付からない。

「無駄に歩いてても……体力が消耗するだけか……」

とは言っても、どちらに行けば良いのか見当も付かない。

「とりあえず……山で迷えば登れって言うな……」

山登りの鉄則を思い出し、進む当てが無い以上、そうするしか無いと思った。

そして、邦彦は今来た方へと引き返した。

「となると……山添はどうしよう……」

倒したはずの熊笹は既に元に戻り、再び倒しながら歩いていると、「おんぶでもするか……」と、邦彦の頭に亜美を背負って歩く自分の姿が思い浮かんだ。

その瞬間、邦彦は顔を赤くして立ち止まり、

「きつ緊急事態だもんな！しょうが無いよな！」と、自分に言い聞かせた。

おんぶすれば、亜美と体が密着し、邦彦の手は当然、亜美のお尻が太股へと行く。

その事を想像しただけで、邦彦は顔を真っ赤にしていた……純情やねえ……

邦彦は、下心がある訳では無いが、その事を亜美に、どうやって自然な態度で提案しようかと悩んでいた。

およそ十五分ぐらいで、邦彦は熊笹を掻き分けながら亜美の所へと帰って来た。

木の陰に隠れている亜美を見付けると、

「あのな、山添……」と、邦彦が声をかけた時、

ズボット、二人の間に黒い影が湧いて出た。

「わっ！」邦彦は驚いて、思わず一步身を引いた。

その現れた者を良く見ると、直径が二十cmはあるかと思われる

ミミズが、十数匹のたうつていた。

「わああああ！」邦彦は、そのおぞましさに驚き叫び、後ろへと飛び退いた。

ミミズ達の向こうで、どさっと、亜美が再び気絶して倒れた。

「山添！」

亜美が倒れた姿を見て、邦彦は叫び、ミミズ達を避けて亜美へと駆け出した。

その時、ミミズの一匹が、口を開いて邦彦に襲い掛かった。

それは、見るもおぞましい口だった。

頭と思われる先端が八方に割れ、人の頭ぐらいなら飲み込んでしまふ大きさに広がり、中には四方に分かれた歯茎に、明らかに肉食である事が分かる鋭い牙が見えていた。

「くそっ！」

襲い掛かるミミズを払い除け、邦彦は亜美へと駆け寄る。

恐怖とおぞましさに小便をちびりそうになったが、今の邦彦には亜美の事しか頭に無かった。

亜美へと辿り着いた邦彦は、おんぶも、くそも無いこの状態に、躊躇無く亜美を抱き上げ肩に担いで走り出した。

熊笹に足を取られ、ふら付きながらも必死で逃げる邦彦の後をミミズ達が追って来る。

熊笹の中に埋もれ姿が見えないミミズだが、以外に早いスピードで追いかけて来る。

「どわああああ！」

すぐ背後にミミズ達の気配を感じ、邦彦は肩の上の亜美を気遣いながら気合を入れてダッシュする。

顔の直ぐ横に亜美のお尻。手はしっかりと亜美の太股を抱えている。

しかし、そんな状況は一切認識出来ず、邦彦は必死で走っている。「あっ！」

逃げていると、岩肌が見える、角度が四十度を越える斜面が目

付いた。

根拠は無いが、手足の無いミミズ達は斜面なら追って来れないのではと思い、邦彦は斜面へと進路を変える。

斜面に辿り着くと飛び上がり、空いている片手で斜面にしがみ付き、邦彦は斜面を登って行った。

案の定、斜面の縁でミミズ達の追撃は止まり、ミミズ達が上を見上げている。

「よし……」

邦彦が、目論見通りミミズ達が止まった事に、ほっとしたのも束の間、ミミズ達はゆっくりではあるが、身をくねらせながら斜面を登りだした。

「くそっ、なんなんだよ……」

ミミズ達の登って来る姿を見て、邦彦は登るスピードを速めた。

そして、邦彦が斜面を登りきって、前へと進もうとした時、

「うそっ……」と、地面が消えている事に茫然となった。

二・三步踏み出せば、二十mぐらいの高さの切り立った崖へと真逆さまと言う狭い頂上で、

「誰だよ！登れば良いなんて言った奴は！」と、邦彦は力いっぱい怒鳴った。

左右には切り立った尾根が続いているが、亜美を担いだままでは、とても通れそうに無い。

「畜生……」

斜面の下からミミズ達が迫って来る。

迫るミミズと崖下を眺めながら、

「……やって、見るか……」と、邦彦はある決心をした。

そう言って邦彦は亜美をそっと下ろし、座った格好の亜美の背中から抱き付いた。

その時、亜美が気が付いて、何かと驚き後ろの邦彦の顔を見た。そして、亜美が逃げ様と暴れだすと、

「静かにしろ！」と、邦彦は怒鳴り、ぎゅっと、亜美を抱いている

腕に力を入れた。

亜美は邦彦の怒鳴り声に驚き身を縮める。

「来たぞ……」

邦彦の呟く声を聞いて亜美が前を見ると、三匹のミミズが顔を出し、おぞましい口を開いている。

「ひっ！」

亜美が悲鳴を上げた瞬間、

「行くぞ！」と、邦彦は叫びながら後ろ向きに崖下へとダイブした。何が起こって居るのか理解出来ず、亜美の顔は恐怖に引きつる。後ろ向きで落下しながら邦彦はタイミングを計る。

「たあっ！」

地面に激突する瞬間、亜美を突き出すように上に放り上げ、体の周囲にバリヤーを張る。

地面すれすれ十cmぐらい手前で邦彦の体がふつと、止まる。

其処へ、放り上げた亜美が落下し、邦彦の体の上でふつと、止まる。

「はっ、は、は、や、やた……止まった……やった……」

顔を真っ青にして引きつらせ、小刻みに震える体で邦彦が呟いた。明日香達の話聞いて、理屈では運動エネルギーを中和させられると理解していても、現実、上手く行く保障など邦彦には無かった。しかし、何もせずにミミズ達に食い殺されるならばと、壱か八かの勝負に賭けた。

亜美を巻き込む事に、躊躇いはあったが、あのままでは亜美も食べられてしまう。

亜美を途中で放り上げたのは、抱き付いたままだと自分は止まっても、二十mと言う距離を落下する亜美の体重の慣性で、お互いが怪我をする……いや、怪我では済まない事は想像出来た為、直前で亜美を放り上げ、自分のバリヤーの上へと落下させたのだ。

全てが計画通り上手く行って、ほっとした瞬間、バリヤーから眩しい光が放たれ、邦彦の体を温風が包んでバリヤーが消えた。

「な、なんだ……」

初めての現象に、邦彦は戸惑った。

しかし、そんな事より、今は逃げる事が第一だと思い出し、

「山添！大丈夫か！」と、自分の体の上で震えている亜美に声をかけた。

亜美が震えながら邦彦を見て、小さく頷く。

「そうか、良かった……」

微笑みながら、邦彦が亜美を下ろし、立ち上がる。

「立てるか？」

手を差し出しながら邦彦が尋ねると、亜美は頷きながら、おずおずと邦彦の手を掴んで立ち上がる。

立ち上がった亜美の姿を確認して、邦彦は崖の上を見上げて、

「流石に、此処まではこれないみたいだな……」と、ほっとした。

そして、改めて辺りを見回すと、其処はごつごつとした岩肌に見える斜面に挟まれた場所だった。

「結局、状況は変わらず……か……いったい、何処なんだよ、此処は……」

再び見覚えの無い場所に、邦彦は途方に暮れていた。

辺りを見回している邦彦の姿を見ていた亜美が、

「あつ」と、小さく声を上げる。

「えっ？」

その声に気付き、邦彦が亜美の方へと振向くと、亜美は肩から架けたポシェットの中を探っていた。

そして、亜美はポシェットの中から、バンドエイドを取り出し、

「血が……」と、言っつて邦彦の手を見た。

熊笹で手を切ったのか、邦彦の手の甲から少し血が流れていた。

「あつ」それに気付き邦彦が手を見る。

そして、亜美がバンドエイドを捲っているのを見て、

「あ、ごめん……」と、言っつて邦彦が手を差し出す。

差し出された手に、亜美がバンドエイドを張ると、邦彦に向って

にこつと微笑んだ。

「あつ、ありがとう……」

微笑んだ亜美の顔を見て、邦彦はドキドキしながら礼を言った。

「あ、あの……私こそ、ありがとう……助けてくれて……」

か細く小さな声で亜美も礼を言つと、二人は顔を赤くして、黙つて俯いてしまった。

初めて交わした会話で、亜美の声は？邦彦にとっては？とても可愛いく思え、改めて『可愛い……』と、邦彦は思った。

「あ、あの……とにかく、皆を探そうか」

邦彦が俯きながら提案すると、

「うん……」と、亜美はこくりと頷いた。

そして、邦彦を先頭に二人は斜面に添って歩き出した。

……

「うっ、うっ、何も、其処まで、しなくても……」

「ぐめん……やり過ぎたわよ……」

明日香に、罵られ、蹴られ、踏み付けられた龍士は、膝を抱かかえしゃくり上げる様に泣いている。

「もう……男の癖に、何時までもめそめそしないでよ」

泣いている龍士に愛想を尽かし、明日香が面倒臭そうに言つと、

「うっ、うっ、そんなの……男女差別だ……」と、龍士がぼそりと呟いた。

「ぐっ……あのね！なによ！貴方だつて、乙女の体に勝手に抱き付いて！貴方が悪いんでしょ！この痴漢！変態！」

龍士の抗議に腹を立てて、明日香は拳を握りながら、龍士を攻める。

明日香に罵られ、龍士は上目ずかいで明日香を見ながら、

「……乙女つて……処女つて事？」と、ぼそりと尋ねた。

相変わらぬ龍士の呆けた質問に、

「露骨に言つなあああ！」明日香は顔を真っ赤にして怒鳴り付ける。

「あつ……」

明日香の怒号に、龍士は情けなく頭を抱えた時、二人に近付く心配がした。

「なに？」明日香が、木々の間に目を配る。

木々の間から、馬ぐらいの大きさの白狐が現れた。

「ひっ！」龍士は驚き思わず後退る。

明日香も慌てて木の陰に隠れる。

「かえせ……」全身が傷だらけの白狐が、ふらふらとした足取りで明日香へと近付く。

「喋れるのか……」龍士は、白狐の声を聞いて目を丸くする。

「返せつて……これ？」明日香は手に持っている綺麗な布で出来た袋を見た。

「返せ……」か細い声で呟きながら、白狐は更に明日香に近付く。

「い、嫌よ！返したらどうなるのよ！渡したら、私を食べる気でしよ！」

明日香は身構え、白狐から離れる様に後退る。

その姿を見て、龍士は立ち上がり明日香へと駆け寄る。

「橘、返してやれよ」

「嫌よ！何だよ、そんな事したら私達どうなるか分からないわよ！」

龍士の言葉に、明日香は袋を強く握り締めて反論する。

「馬鹿！相手は喋れるんだぞ！言葉が分かる奴なんだぞ！ちゃんと話すれば……」

「甘いわよ！話が出来たって、分かるうとしない奴だって居るわよ！」

怒鳴りあう二人に、白狐は更に近付いて来る。

「くそっ」

「あっ！」

龍士は明日香から、無理やり袋を取り上げて白狐へと近付く。

「返してやる！だけど、約束しろ！俺達には何もしいって！」

白狐の前で龍士は刀を差し出し、白狐へと話しかけた。

「ばっ、馬鹿！何してるのよ！危ないわよ！」

明日香が後ろから龍士を怒鳴り付けると、

「良いから！今の内に逃げろよ！俺が時間稼ぐから！」と、龍士は白狐から視線を逸らさずに明日香に怒鳴った。

「……なっ、何を言ってるのよ……」龍士の言葉に明日香は戸惑っている。

「良いから、早く逃げろって！」

再び龍士が明日香に怒鳴ると、

「馬鹿言うんじゃないわよ！」と、怒鳴りながら明日香は龍士に駆け寄った。

「な、何だ……」明日香の意外な行動に、龍士は驚き明日香の方を向いた。

「何？私に逃げろって言うの？貴方を置いて？私一人で逃げろって言うの？私達、友達に成りましようって言ったわよね！なのに、私にそんな目覚めの悪い事させるわけ！私に一生負い目を背負えって言うわけ！」

明日香は龍士の目の前で、龍士に噛み付かんばかりに食って掛り、抗議する。

「あ、いや、その……」明日香の迫力に、龍士は返す言葉が出ない。「自己犠牲の押し売りなんか御免だわ！」

明日香は怒鳴りながら龍士から袋を奪い返して、

「ほら、返してやるわよ！だけど、いい事、私達には何もしいって……」と、明日香が白狐に袋を差し出しながら怒鳴っている時、白狐が力尽きる様に、どさっとその場に倒れた。

龍士達は、何が起きたのか分からずに倒れた白狐を眺めていると、白狐の体が仄かに青白く光りだし徐々に小さく成り、人の姿へと変化して行った。

そして、白狐は龍士達と同じ歳ぐらいの少女の姿となって横たわっていた。

何事が起きたのか理解出来ない龍士だったが、目の前に倒れている少女が全裸である事は理解出来た。

「あ……」上向で倒れている少女の、豊かな胸に龍士の視線は釘付けとなる。

それに気付いた明日香は、

「みるなあああ！」と、叫びながら、龍士の尻に渾身の力を込めて回し蹴りを食らわせた。

「ぶっ！」龍士は思わず噴出し、その場に倒れた。

「やっぱり、変態じゃないの！この痴漢！」

怒鳴り付ける明日香に、

「そ、そんなの誤解だよ！不可抗力じゃないか！」と、龍士も負けずに怒鳴り返す。

「……また、蹴られたいの……」

冷やかな目で、明日香が龍士を見下ろすと、

「はい、ごめんなさい。私が全て悪うございました。ごめんなさい。二度といたしません」と、龍士は土下座しながら素直に明日香に謝った。

「……とにかく逃げましょうか……」

倒れている少女を見ながら明日香が言うと、

「そんな、この子をこのままで？」と、龍士が心配そうに明日香に尋ねた。

「でも、あの大きな狐なのよ、この子……」

「そりゃ、そうだけど……」

そう言っつて、龍士は徐に立ち上がると、ブレザーを脱いで少女へと近付いた。

「何するの……」

「別に……」

心配そうに尋ねる明日香に、龍士は素っ気無く答え、少女の体を見ない様に顔を背け、少女にブレザーを掛けてやった。

ブレザーを掛けてから、龍士は少女を見て、

「……なんだ、この子、傷だらけじゃないか……」と、少女の脇にしゃがみ、少女の傷だらけの手を取った。

「あ……危ないわよ……」明日香が心配して声を掛ける。

「大丈夫だよ……可哀そうに……どうしたんだろっ」

龍士は、そう言っただけで少女の腕の痣に成っている所を優しく撫でた。明日香は不安げな顔でその姿を見ていると、

「あれ？」と、龍士が不思議そうに声を上げた。

「どうしたの……」明日香が恐々、龍士に近づく。

「……痣が……」

「痣？」

龍士の言葉に、明日香が龍士の肩越しに少女の腕を覗き込む様に見た。

「うん、摩っていたらだんだん小さくなって……」

そう言いながら龍士が少女の手の痣を摩ると、

「あっ、本当だ……」小さく薄く成って行く痣に、明日香が驚いた。

「凄い……これって、人間にも効くのかな？」

期待いっぱい尋ねる明日香に、

「たぶん効かないと思うよ」と、龍士はあっさり答えた。

「どうして分かるの？」

「だって、自分が怪我した時には、全然効果が無かったし……」

「あっ、そうか……でも……稲葉君、怖くないの？こんな事して……」

……

「うん……不思議だけど、怖くないな……俺、何時もお父さんに言われてるんだよ」

「えっ？」

「女の子には優しくしろって、へへへへ」

照れ臭そうに笑う龍士を、明日香は呆れた様な微笑を浮かべて見ている。

「この子……足、凄い怪我……」

明日香が少女の太股を見て、まだ血が流れている傷を見付け、龍士も少女の足を見た。

「この子、もしかして学校に現れた化物じゃ……この傷、あの時、

蛇に咬まれた傷じゃないの？」

急な変化で、混乱していた記憶が徐々に回復して、明日香が学校での出来事を思い出していた。

「あっ、そう言えば……そうだよ、あの時の狐だよ……」龍土も記憶が蘇って来た。

「だとしたら……やっぱり危ないわよ……」

「だけど……」心配そうな顔で龍土が、まだ血の流れている傷を見ながら呟いた。

「……許す……」

明日香が腕を組み龍土を睨みながら、ぼそりと言つと、

「うん」と、頷いて龍土は少女の横に座りなおした。

「あ、傷を治す為だからね。けっして変な気は無いからね」

龍土が、明日香に念を押すと、

「分かってるわよ……」と、明日香は龍土を睨みながら呟いた。

龍土は、全裸の少女に掛けたブレザーから、はみ出している太股へと手を伸ばし、傷口を優しく撫でる。

最初は血を擦り付けている様な状態が、暫くして血が止まり、傷口が塞がりだした。

「あ、凄い……」明日香は、その現象に素直に感動した。

と、その時、気を失っていた少女が気が付き、ひよこつと首を上げると、龍土と目が合った。

龍土と明日香は、少女が気が付いた事にビクツと体を振るわせる。

少女は、何が起こって居るのか分からない様子で二人を眺めていたが、自分の太股を触っている龍土に気が付き、

「不埒者！」と、叫びながら龍土にアッパーカットを食らわせた。

「あっ、ごめん、誤解よ！大丈夫よ！怪我！怪我を治していたのよ！」

吹き飛んだ龍土を無視して、明日香は慌てて少女に説明した。

「怪我……」少女はそう言って、自分の太股を見た。

「あっ……」

覚えがあるのか、怪我が治っている事を理解した少女は、

「なぜじゃ……何故、治っている……」と、不思議そうに太股の傷跡を見詰めていた。

「稲葉君が治したの。稲葉君、貴方達、化物の怪我を治せるみたいなの」

不思議そうに太股を眺めている少女に、明日香が説明すると、

「何……あの、御仁が……」と、龍士を不思議そうに眺める少女見て、

「いや……御仁って言うほどじゃないけど……」明日香が少し呆れながら呟いた。

「これは、ご無礼いたしました！」

少女は、倒れている龍士に駆け寄り、龍士を抱き起こす。

「そんな事とは露知らず、何とも申し訳無い事を……」

少女は全裸のまま、龍士に抱き付き非礼を詫びている。

揺り動かされ、龍士が気が付くと、目の前に立派なメロンの様な巨乳が目に入った。

「ぶっ！」思わず目を剥く龍士。

「お怪我はございませぬか」

龍士に抱き付き、尋ねる少女に、

「あっ、いや、その……何とも、無いよ……」と、目のやり場に困り、目を泳がせながらも、張り艶のあるメロンをちらちらと見ながら龍士が答えた。

「あのさ……どうでも良いけど……貴方、裸よ……」

「えっ？」

明日香に言われて、やっと自分が全裸である事を自覚した少女は、「きゃああああ！」と、叫びながら、抱き付いていた龍士に、左のストレートを食らわせた。

幸せそうな顔で、再び吹き飛ぶ龍士を見て、

「死ねば……」と、明日香は冷たく言い捨てた。

少女は慌てて、手を大きく頭上に振り上げ、全身を撫でる様に振

り下ろすと、全裸だった少女は白装束姿へと変わった。

.....

「そりゃあ、帰る方法は有りまっけどな」

「ほんと！」

何時の間にか手懐けた河童達の前で、翔子の顔に笑顔が浮かぶ。

「此処は言うてみたら、わてらの隠里……天然の結界の中でんねん」

「せやから、出入り口に行けば元の世界に戻れまっけどな」

「何処なの其処！」

期待いっぱい翔子が、顔を輝かせて河童達に尋ねると、

「……そんな、ただで？」

「せや、教えて貰おうと思たら、それなりにな……乳の一つでも揉

ましてもらわんと……」

「股座開いて見せて貰ってもええけどな……生で……」

翔子の体を、嫌らしい目で嘗め回す様に眺めながら話す河童達を

見て、

「……で、教えるの？教えないの？」と、目に冷酷な光を浮かべ、

無表情のまま、手に静電気を溜める。

「ひっ！」

手から、パシッと、空中放電する小さな稲光を見て、河童達は慌

てて頭の皿を防御する様に手で隠した。

「あ、あ、姉^{あね}さん！待っておくれやす！」

「冗談！冗談でんがな！」

河童達が翔子の手を見ながら、怯え寄り添い身を縮めて居るのを

見て、

「ふんっ」と、軽蔑した目で河童達を見ながら、翔子はフィールド

を解除して手を下ろした。

「で、何処なの出口は？」

翔子が、河童達に迫る様に尋ねると、

「えっ、でも、そんな簡単には……」と、まだ渋る河童に、

「駄が、まだ足りないのかしら……」と、翔子が再びフィールドを

張る。

「いや、ちやいまんねん！」河童達は、手を大きく振りながら慌てて翔子を制した。

その後、か・な・り、酷い？ 賤？を河童達は受けたのだが、余りにも残酷な描写が含まれる為、割愛させてもらいます。

「あの、ややこしいんですわ！迷路みたいな道順を、間違わんと進まんと辿り着けまへんのや！」

「迷路？」河童の言葉に翔子が眉を顰める。

「へえ！決まった場所から始まって、決まった通りに進まんと、辿り着けまへんのや！」

河童達の必死の説明に、嘘は無さそうに思った翔子はフィールドを解除した。

「その、道順って、貴方達知っているの？」

「へえ、そりや知ってまっけど……三日は掛かりまっせ」

「三日?!」河童の説明に翔子が驚き目を丸くする。

「そりや、そうでんがな。そんな簡単に行き来出来たら結界の意味がおまへんや」

「まあ、偶然に結界の切れ目とか、隙間が出来たりする事は有りまっけど、そんな偶然待つてらなあ……それこそ何時になる事やら……」

「決まった場合に、開いたり閉じたりする門みたいな所も有りまっけど……」

「へえ、わてらもさつき、山添の方へ遊びに行つて来ましたんやけど、その門も次に開くのは二週間ほどしてからやし」

「妖力の強い者やったら、無理やりに抉じ開ける事も出来まっけど……」

「やっぱり、今やったら、あの道が一番早いか……」

翔子は河童達の説明を聞いて、暫く考えていたが、

「それしか方法が無いのなら、時間が掛かっても、手堅く行くしか無いわね……」と、結論付けた。

「案内して」

「へっ？」

「わてらがでつか？」

翔子の要求に、河童達があからさまに迷惑そうな顔で翔子を見る。

「何か、問題でも？」

そう言って、手にフィールドを張る翔子の姿を見て、

「いえ、喜んで案内させていただきます」と、河童達は翔子に土下座しながら答えた。

と、その時、

「三輪！」と、翔子の後ろから、名前を呼ぶ声がした。

「えっ」慌てて振り返って見ると、其処には邦彦と亜美の姿があった。

「ああ、やっと会え……いつ！」

翔子に駆け寄る邦彦だったが、翔子の向こうに居る河童達の達の姿に気が付いて、

「なっ、なんだ！そいつら！」と、立ち止まって驚きの声を上げる。

亜美は、邦彦の後ろで邦彦の腕にしがみ付いている。

「ああ、これ……気にしないで、下僕みたいな者だから……」

何でも無いかのように答える翔子に、

「下僕って……危なく無いのか？」邦彦がおずおずと尋ねた。

「大丈夫よ、何もしないわ。ちゃんと躡してあるから」

「失礼なやつちゃな」

「せや、危ないのは姉さんの方や……」

翔子が説明している後ろでぶつぶつ呟く河童達の話を聞いて、

「何ですって！」と、翔子が目を吊り上げて河童達に振向くと、

「いえ、何でもございませぬ」と、河童達は恭しく頭を下げた。

その姿を見て、邦彦は少し安心したのか、河童達に近付いて、

「喋れるのか……」と、河童達を見回した。

「へへへ、どうもう」愛想良く笑う河童達を見て、亜美も少し安心したのか、邦博の後ろから顔を出して河童達を見ていた。

「あ、それより田原本君……」

翔子は河童達に聞いた、帰り道の事を邦彦に話した。

「出口があるのか」

「ええ、でも3日ほど掛かるって」

「三日か……それは仕方ないとして、それより、橘と稲葉はどうする、探さないと」

「そうね……でも、探す当てが無い以上、合理的に考えて、帰り道の途中で会う事を期待しないと……彼らも同様に出口に向かっていると思わないと、此処で無意味に何日も過ぎてしまふ事になるわ」

「……確かにそうだな……探しながら帰る……それしかないか……」
割り切れない思いと共に、邦彦は亜美の方を見ると、亜美も不安な顔で邦彦を見ていた。

「どっちにしる、もう直ぐ暗くなる……何処か安全な場所を探さないとい……」

「そうね……ねえ、何処か眠れる所、無いかな？」

翔子が河童達に尋ねると、

「へ、どうぞ」と、河童達は並んで上向に寝そべった。

「なによ……それ……」軽蔑の混じった白けた目で、翔子は河童達を見ている。

「ささ、遠慮せず……どうぞ」

「わたらの上で、ゆっくりお休みやす」

明らかに、下心がある笑みを浮かべて河童達が翔子を誘うと、

「いつぺん、死んでみる？……」と、翔子がフィールドを河童達の皿へと張った。

そして、その後の余りにも凄惨な情景に、邦彦と亜美は思わず顔を背けた。

「くそっ……隠里か……」

多門次は一人、森の上空で辺りを見回していた。

「我らの結果が飲み込まれ、隠里の結界で皆ばらばらになったか……」

…厄介な所で結界を張ってしまったな……源一坊め、何処に行きよった……」

周囲を見回し辺りを散策するが、何の気配も感じられない。

隠里は何重にも天然の結界が張り巡らされており、空間そのものが迷路の様になっている。

「探すしかないか……」そう呟き、森の上空を低空で飛び去って行った。

一方、源一坊は、十数匹の化物達と共に再び葵を探していた。

「ええい、せつかく追い詰めたと言っに……隠里とは厄介な所へ迷い込んでしまったものよ」

苦々しく呟きながら、源一坊は森の中を進んでいる。

「うむ……しかし、考えて見れば、これで葵もそう簡単に此処から出られぬな……」

源一坊は暫く考えていると、

「其処の蝙蝠！」と、一匹の蝙蝠の化物を見つけて呼び付けた。大型犬ほどの大きさの蝙蝠が、源一坊の前へと降り立った。

「よいか、わしが結界に穴を開ける。お前は其処から抜け出し、時康様に此処に葵が居る事を伝えよ。そして、増援を頼むのじゃ、よいな」

「ききき」

源一坊の命令を受けて蝙蝠が返事をして頷く。

「わしの力だと、ほんの小さな穴しか開けられぬ、お前は普通の蝙蝠の姿に戻り、その穴を抜けるのじゃ」

源一坊の説明に蝙蝠が頷き、二十cm程の普通の蝙蝠の姿に戻った。

「行くぞ！はああああ……」源一坊が気合を入れて、錫杖を振り上げる。

「たあああ！」そして、気合と共に錫杖を目の前の空間へと突き立てる。

「ぬうううう……」空間を抉じ開ける様に、錫杖に力を込める。

すると錫杖の先の空間が光だし、三十cm程の割れ目が出来た。
「今じゃ！」源一坊の合図と共に蝙蝠が空間の割れ目に飛び込み、外へと飛び出した。

「ふう……」源一坊は力を抜いて、錫杖を腋へと抱える。

「援軍を求める事なぞ、恥じ入る事ではあるが……これ以上長引けば、時康様にも申し訳が立たん……」源一坊は、苦々しい思いで顔を顰める。

「本当に、もう良いのか？」葵は、明日香の隣に座っている龍士を気遣っている。

「ははは、大丈夫だよ、何とも無いよ」龍士は、直ぐ前に座っている葵に向って、少し照れ臭そうに頭をかいている。

明日香に蹴られ踏み付けられ、更に葵に殴り飛ばされても、直ぐに回復する能力は、龍士のもう一つの超能力かもしれない……いえ、コメディイですから……

「あの、聞いても良いかな？」

「なんじゃ？」

遠慮気味に尋ねる明日香に、葵が微笑みながら問い返した。

「あの……私達を食べたりしないわよね……」

余りにもストレートな質問に、葵は一瞬、何の事かと目を丸くしてから、

「ほほほ、我が怖いか？」と、優しく微笑んで答えた。

「そりゃ……あんな戦い見たら……」

「……安心せい、恩ある者に仇なす事などせん」

葵の言葉を聞いて、明日香は少し安心したのか、肩の力を抜いた。その袋、大切な物なの？何が入っているの？」

心が緩むと明日香は、遠慮無しに自分の疑問を葵に尋ねた。

明日香に聞かれて、葵は少し悲しい笑みを浮かべ

「これか……これは、愛しいお方の形見じゃ……」と、刀袋を胸に抱き締めた。

「形見つて……」

再び明日香が問い掛けるが、葵は悲しい顔で黙っている。その様子に明日香は少し苛々して来た。

「あのね、言いたく無い事もあるだろうけど、結局、私達って貴方に巻き込まれたのよね？ 貴方が化物と戦っている時に私達はこんな所に来ちゃったのよね？」

明日香はきつい口調で、事の成り行きを確認するように尋ねたが、葵は黙ったままだった。

「だったら、説明ぐらいしてくれたって良いんじゃないの？ 何も説明が無いなんて失礼よ」

相手が襲つて来ないと分かった明日香は、葵に対してはずけずけと、言いたい事を言った。

そんな明日香を、困った様な笑みを浮かべながら見て、

「そうじゃの……確かに、我のせいでは無いにせよ、迷惑を掛けた事には変わりはないな」と、葵が静かに答えた。

そして、葵が静かに語り始めた。

「何処から話そうかの……この刀の持ち主は、伊予西条ノ介、時貞様と言つてな、我らは慕い合つておつた。じゃが、我らが慕い合つて居る事は周りに知られては成らぬ故、忍んで合つしかなかったのじゃがな……」

「何で、周りに知られたらいけないかったの？」

「親同士が……一族の者同士がいがみ合つておつての……五百年程前の大戦の遺恨が未だに根強く残つておつて……我らが慕い合つているなどは知られる訳には行かなかつたのじゃ」

「そんな……」

静かに語る葵に、明日香は同情する様に悲しそうな表情になる。

「我が始めて時貞様に出会つたのは、二百五十年程前の事じゃつた……」

「二百五十年！ ちよ、ちよっと、貴方、歳幾つなのよ！」

二百五十年前と聞いて、明日香は目の前に居る、自分達と同じ年

頃にししか見えない少女に慌てて問い掛けた。

「我は、齡三百二十じゃが？」

「三百二十……」

何でもないかの様に答える葵に、明日香は三百二十と聞いて驚き、目を丸くしている。

「まだ幼かった我が、八坂様のお祭りが見とつて、母上におねだりしたんじゃ」

「八坂様？」

何の事だと尋ねる龍士に、

「祇園祭りの事よ」そんな事も知らんのか、と、きつい口調で明日香が答えた。

「華やかで綺麗な祭りじゃった。生まれてからずっと山暮らしの我にとつては、見る物全てが珍しかった。我が山鉾に見とれておつたら、人波に推され、母上達とはぐれてしもつてな、途方に暮れて居つた時に、助けて貰つたのが時貞様じゃった」

懐かしむ様に微笑を浮かべて遠くを見て語る葵を見て、二人は葵が、あの大狐だとは想像出来なかった。

「初めてお会いした時貞様は、それはお美しい若人じゃった……」
目を輝かせ語る葵は、二人から見ても、同年代の普通の少女にしか見えなかった。

「その時は、何処のどなたかは分からず仕舞いで分かれたが、五十年程してから、何処でどう調べられたのか、我の所へと文が届いての、近くに來ている故に合いたいと……何処の誰とも知れぬ者に合う事など、母上は許してくれる筈も無く……されど、我は今一度、あのお美しい方に会いとうなつて、侍女達と共に春日様にお参りに行くと嘘を付いて出かけたのじゃ……」

「侍女つて……貴方、お嬢様？」

「お嬢様？ははは……そうじゃつたな、まだ名乗っていなかったな……我は、大峰の主、大和紀伊百万石を治める笹百合の末娘、大台の葵と申す」

「ひゃ、百万石って……もしかして貴方……葵さんって、妖怪のお姫様？」

「まあ、そう言う事じゃな……」驚いている二人に、葵は少し照れるように答えた。

「あつ、俺は稲葉龍士」続いて、龍士が名乗り、
「私は、橘明日香よ」明日香も続けて名乗った。

「よろしゅうにな……」名乗る二人を微笑みながら聞いて、葵は話を続けた。

「それから度々、時貞様より文が届き、何度かお会いしているうちに、我の心は時貞様に引かれた……ただ、時貞様は何処の誰とは教えてくれず、両親を早くに亡くし歳若く所領を継いだ、西の国の三万石の領主じゃとだけ言われた」

「じゃ、その人も妖怪の殿様？」

「……そうじゃ」明日香の質問に、葵は顔を曇らせて悲しそうに答えた。

「……そして、ある日、時貞様は我に全てを話して下さった……時貞様は、八坂様の祭りの時より、我が笹百合の娘である事を知っておったそうな……そして、ご自身は、四国百十一万石の跡取り、隠神刑部様の御嫡孫である事を明かされた……時貞様は聡明な方で、伊予と大峰が何時までも、いがみ合っていてはいけなないと考えられ、我と懇意を深めれば解決の糸口が見付かるかも知れぬと思われ、我に近付かれたそうな」

「それって何？葵さんを利用してしようとしたわけ？」

「明日香が不機嫌そうに眉を顰めて尋ねると、

「ははは、そうじゃな、そう言う事になるな」葵は、何でも無いかのように笑って答えた。

「それを、時貞様は正直に仰って下さった……」

「でも、なんで？」

「不思議そうに尋ねる明日香に、

「……そ、それは……時貞様が……」言葉に詰まりながら、葵は顔

を赤らめ、

「わ、我に……懸想……されたと……」顔を白装束の袖で隠して、明日香から顔を背けた。

純情な乙女のような葵の姿を、明日香と龍土は白けた気分で眺めていた。

「……その……それで、我には正直に話す事を決心されたと……」顔を隠しながら話す葵が、大狐の化物だと言う事を、今や二人はすっかり忘れている。

葵は、顔から袖を離し、明日香達から顔を背けたまま、

「……我は、正直驚いた……いや、御主の言う様に利用されたと口惜しかった。それに、仇敵である伊予の跡取りと知っては……我的心は乱れた……」と、悲しそうに俯いた。

「その日、我は、何処をどう帰ったのかも分からぬぐらい悲しかった、いや、悔しかった……懸想した方が仇敵の跡取りだったとは……」

悲しそうに俯く葵に近付き、

「でも、そんなの関係ないじゃない！お互いが好きだったら、家がどののとか親がどののとか関係ないじゃない！」明日香が葵の手を取って訴える様に話した。

そんな明日香に少し驚きながら、葵は眼を閉じ静かに頭を左右に振った。

「そう言うわけには行かぬ……お互い一族を治める者。勝手は許されぬ」

「そんな……」悲しそうに話す葵の目を見て、明日香が悲しそうに呟く。

「一族を治めると言う事は、力付くでは出来ぬ。一族の者の心を掴まねば……その為にも、お互いの心を一つに束ねる、相通ずる敵と言う者の存在は大きい……それとな、時貞様も我も同じじゃが、五百年前の大戦なぞ知らぬ、正直な所、遺恨など何も無い……しかし、な、大戦を知っている年寄りが、まだ多く居る。その年寄り達が、

未だに幅を効かせて居るのじゃ」

「でも、でも……」訴える様な目で、葵の手を強く握る明日香だが、住む世界が違い過ぎ、何と言って良いのか分からず言葉が続かない。「そうじゃな……私も今は、我らと和解しようとした時貞様のお考えを良く理解しておる。じゃが、その時の我は理解出来なかった」葵は、強く握る明日香の手に、もう一方の手を微笑みながら添える。

「あの日、悲しみの内に分かれ、いつそ、時貞様を憎めたら……じやが、我は時貞様を忘れる事すら出来なかった……それが、悲しかった……苦しかった……もう、合えぬと思うと……尚更……想いが……募り……」言葉を詰まらせ、葵の目から涙が零れる。

「我は、幾日も泣いて暮らして居った……」

「葵さん……」葵の話聞いて、明日香の目も潤む。

「幾月かして、時貞様より文が届いての……歌が一つ書いてあるだけの文じゃった。我はそれを見て決心した。時貞様と共に歩むと……」

「どんな歌だったの？」

「……」明日香に聞かれて葵が顔を赤くする。

「ねえ、教えなさいよ、どんな歌だったの？」

更にしつこく尋ねる明日香の気分は、

「ねえっら、ねえ……」既に、女子高生同士の恋愛相談レベルである。

葵は暫く考えて、空を見上げながら、

「天の海、仰ぎし見れば遥かなる、愛しき君も見ゆる月かも……」と、少し恥かしそうに歌を読んだ。

「……はあ……なにそれ、かつこいい……」

歌を聴いて、目をキラキラさせながら感動する明日香に、

「……あの、どう言う意味なの？」と、龍士が後ろから、「こそつと聞いた。」

「……あのね……気分ぶち壊し……」

呆れて睨む明日香に、

「ごめんなさい……」と、龍士が申し訳無さそうに頭を下げて素直に謝った。

「あのね、星空に浮かぶ月を見てみると、遠くに居る大好きな貴方も、きつと同じ月を見ているのでしょねって意味」

「はあ……」だから何だ？と、明日香の説明を聞いても、龍士には今ひとつ意味が理解出来ない様だった。

「だから、天の海って夜空ってだけの意味じゃないの。伊予って四国でしょ、大峰は奈良、つまり紀伊半島。その間にある海にも掛けているわけ。遥かなるって、その距離だけじゃ無くて、いがみ合っている家庭の事情も含んでいて、そんな離れ離れの愛しい貴方も、私と同じ月を見ているんでしょって、つまり同じ想いで居るんでしょねって事よ」

不機嫌そうに解説した明日香に、

「あ……御丁寧な御解説ありがとうございました」龍士が深々と頭を下げて礼を言った。

「ねえ、それで、どんな返事をしたの？」

「えっ……」興味信信の目で明日香に聞かれて、葵は再び頬を染める。

「それは……」

にたにたと、冷やかし笑いを浮かべる明日香を恥かしそうに見ながら、

「昇る海、隠るる山は違へども、我らを照らす天の月かな……」と、小さな声で歌った。

「うっふう……」明日香は更に、にたにた笑いを膨らませる。

「あのう……」

「何よ」おずおずと声を掛ける龍士を飛鳥が睨み付ける。

「うっ……あの、違う場所に居ても、大好きな貴方と、同じ想いですって……解釈してよろしいでしょうか……」

睨み付ける明日香を見ながら、遠慮気味に尋ねる龍士に、

「それで、十分」と、明日香は腕を組んで頷いた。

「でも、そう言うラブレターって、今だと逆に新鮮に聞こえるわね……浪漫チックだわ……」

すっかり友達気分の明日香の言葉を聞いて、

「らぶれ……？なんじゃ、それは？」と、葵が首を傾げる。

「だけど……どうして、その刀が形見なの？」

何気なく尋ねた明日香の言葉を聞いて、

「……」葵は、硬い表情で俯いた。

「おい、橘……」葵の顔を見て、龍土が明日香の袖を引っ張る。

「あつ、ごめん……」自分の尋ねた形見と言つ言葉の意味に気付き、

明日香は慌てて謝った。

悲しそうな笑みを浮かべ、そんな明日香を見ながら、

「……よい……これが、御主達も巻き込んでしもつた、そもそも起こりなんじゃから……」と、葵が刀袋を見ながら静かに言った。

「我らは何度か文を交わすうちに、ある決心をした」

「決心？」

「うむ、結局は、我らの仲は一族に受け入れられて貰えぬ物と分かつてはいたが……この想い、お互いに押さえる事が出来ぬ様になり

……時貞様が、一族の名代として伊勢へとお参りに来られるのを期に、我ら二人は、天照様の宮で夫婦めおとの契りを交わす事にしたんじゃ」

「やるうう」古風な葵が、意外と大胆な事を決心した事に明日香は目を丸くして感心した。

「一族の祝福など受けられぬ……如何なる道行きに、なるやも知れぬ……しかし、時貞様は、事を起こさねば、何事も始まらぬと……

それ故に、我は家を出る覚悟を決めた」

「はあ、なんか駆け落ち見たいね……いや、出来ちゃった狙いかな？」

「おい……」明日香の軽い感想に、龍土が呆れる。

「約束の場所へ、幼い時から友の様に使えてくれた侍女達五人と共に、向つたのじゃが……」葵の顔が、悲しく曇る。

「我が着いた時には……既に……時貞、様は……時貞様は……」

葵は齒を食い縛り、言葉を詰まらせながら涙を零す。

「背を、何者かに刺され、既に、虫の息であった……時貞様……時貞様は、私の……私の腕の中で……塵となり……果てられた……」

無念の思いに涙を流す葵の姿を見て、二人に言葉は無かった。

「時貞様のご遺言……この刀を、守ってくださいと……清めぬうちは、誰にも渡すなと……」

其処まで言うと、葵は袖で顔を覆い、泣き崩れた。

泣いている葵に近付き、明日香は葵の肩を抱いて、

「ごめん……ごめんね……嫌な事を思い出させちゃって……」と、謝った。

謝る明日香の目にも涙が浮かんでいた。

――

「時康殿！何処まで進む気だ！」

伊勢から大峰へと、天高く五百を越える軍勢と共に進む時康に、道真が問い掛ける。

「このまま行けば、あと暫くで吉野ぞ！吉野川からは大峰の領地ぞ！」

道真の言葉を聞いて、時康が進軍を止める。

「どう言う積りだ、大峰と戦を始める気か」

「それも面白い……」

道真の後ろから、同じく五百百の軍勢を率いる憲正が、ぼそりと呟いた。

「なんだと！」憲正の言葉を聞いて、道真が憲正に食って掛かる。

「ご隠居様の下知を忘れたか！」

「やめる……」

もめる二人を見ずに、時康が言い捨てる様に言うと、

「時康殿、何を考えているのだ、この様な軍勢を引き連れて、吉野に近付けば、戦を仕掛けられると思われても致し方ないぞ。それに、道々の神々には前もって声を掛けて回ってはいるが、ご隠居様の名を

出す強引なやり方に、何方どなたも良い顔をされて居らぬ。このまま慇懃いんぎん無礼んぶれいな進軍を続ければ、ご隠居様の御名に傷を付ける事になるぞ」
道真は時康に向かい、淡々と道理を説いた。

「道真殿の道理は聞き飽きた……」

面倒臭そうに顔を背ける時康に、

「真面目に聞け！このままでは天の神にもお叱りを受けるぞ！」と、
道真は怒鳴り付けた。

「お叱り……そんなものこそ……お叱りを受けるのは隠居した者の
役目じゃ。隠居したからには大人しくしておれば良いのじゃ。それ
なのに、事有る毎に、一々と……」

「従兄弟殿……貴様……」時康の刑部を馬鹿にした様な言葉に、道
真は怒りを露に時康の胸倉を掴んだ。

「気を付けよ、道真殿。兄者の死んだ今、我が跡取りぞ……」

「……貴様……本気で言つて居るのか……」時康の胸倉を掴んだ手
を引き寄せ、道真が時康を睨み付ける。

道真に睨み付けられ、今、言うべき事では無い事に気がき、

「……すまぬ……道真殿……忘れてくれ……」時康は目を逸らして
謝った。

それを聞いて道真は、時康から手を離し、

「よいか、ご隠居様は、この伊勢参りが無事済めば、時貞殿に全て
を任せるお積りじゃった。その為の一族の名代では無かったのか。

そんな事は従兄弟殿も知っておるじゃろ」と、時康に静かに語った。

「知っておる……」

「血肉を分けた兄が殺されて、乱れる従兄弟殿の心も分かるが、今
一つ、冷静に成つて考えられよ」

時康を諫める道真の姿を、憲正は面白く無さそうに見詰めていた。
その時、

「御報告にございまするうう！」と、叫びながら、猿の化物が近付
いて来た。

時康達は声のする方を注目する。

「何事じゃ」

尋ねる道真に、

「はっ、伝法院様よりの御伝言が参って居ります」と言つて、蝙蝠を指差した。

「何と申しておる」

「はっ、只今、伝法院様の軍勢は、葵めを生駒の隠里に追い込んだとの事にござります」

「何、生駒の隠里……」そう言つて、三人が顔を見合わせる。

「はっ、隠里故、増援を願うとの事にごります」

「……隠里か……厄介だな……」

道真が呟くのを聞いて、

「その方が、葵も逃げ出せず、好都合と言つものだ」と、憲正が言つた。

「しかし……」

道真が言いかけたのを制して、

「分かつておる、隠里に住む者達を懸念しておるのである」と、時康が言つた。

「そうじゃ……この様な軍勢を引き連れて行けば……」

「懸念いたすな、心得て居る。むしろ大勢で取り囲めば、葵も観念するであろう。さすれば、おじじ様の下知通り、生きて捕らえられると言つ物じゃ」

時康の作戦を、道真は心配そうに眉を顰めて聞いていた。

「では、生駒に向うぞ……道真殿は付いて来られるのか？」

「無論だ」

時康達は総勢千の軍勢を率いて、生駒へと向つた。

その時、地上では、

「なんだ、あいつ等。派手に飛び回りやがつて……天界にはれるじやねえか……くそつ、こりゃ、吉野のお玉ちゃんの所に行つてる場合じゃねえな……」と、白蓮達にはれない様に、山添から離れた吉野の地で、白金丸が飛び去る軍勢を見て、焦りながら呟いた。

「暗くなつて来ましたよ……お姉様……」

「……」
明らかに機嫌の悪い白蓮に、遠慮気味に白雪が声を掛ける。

白金丸から聞いていた、赤目と月ヶ瀬を探して回ったが、当然、白金丸の姿は無く、結局、山添まで帰つて来た。

「どうします？山ちゃん様の所に寄ります？」

「……」

終始無言の白蓮が心配になつて、白菊が白蓮の顔を覗き込むと、白蓮の目には大粒の涙が溢れていた。

「お姉様……」

「あいいいいい！白金丸のばかああああ！」

白雪が声を掛けた途端、大声を上げて泣き出したかと思うと、突然、叫びながら、近くに生えていた、直径五十ｃｍぐらいの大木を回し蹴りで押し折つた。

地響きと共に轟音を轟かせて大木が倒れるのを、白雪は白けた顔で見ていた。

「なにあるか！私の何処が、気に入らない、あるか！ばかああああ！浮気者おおお！」

叫びながら、周囲の大木を押し折り、自然破壊を繰り返す白蓮に、
「お、お姉様！おつ、お、落ち着いて！」と、白雪が叫んだ。

白雪の叫びを聞いて、ぴたりと自然破壊を止めると、

「白雪ちゃんは、贅沢ある……何度も何度も、喧嘩しても、何時も何時も、心配して迎えに来てくれる旦那様に文句言うなんて……」
肩を震わせながら呟いた。

「はあ……」

「いいあるか、女は我慢しなきゃいけないある……白雪ちゃんは我慢が足りないある……」

「はあ……」

「私なんか、我慢して、我慢して……」

白蓮の説教が始まって『またかよ……』と、長くなる事を知っている白雪は慌てて、

「あっ、そうだ、お姉様！お兄ちゃん、本当に仕事に行ったのよ！」と、勤めて明るく白蓮を説得した。

「……そうあるか？」白雪を不審感丸出しの目で睨む。

「そうよ！ほら、お兄ちゃんそう言う所？だけ？は真面目だから……」

「そう言う所？だけ？……？だけ？……」

睨み付ける白蓮を見て、自分の失言に気付き、白雪は慌てて口を押さえる。

その時、二人の上空を時康達の軍勢が飛び去って行った。

白蓮はその後姿を眺めながら、

「じゃあ、あれに付いて行ったら、あの人が居るあるね……」と、呟いた。

その言葉を聞いて白雪は『どうか、お兄ちゃんが居ます様にと、心の中で祈った。』

「なるほど……淀川から大和川までの、信貴、生駒に広がる隠里か……確かにこれだけ広いと厄介だな……」

大軍を背に、道真が呟いた。

「如何いたします」

時康の隣で、憲正が尋ねると、

「……兵を分ける、憲正殿は三百を率いて北から、道真殿は同じく三百を率いて南から、わしは残りを率いて中よりまいる」時康は、指で方向を指し示しながら、命令した。

「うむ……」時康の命令を聞いて、不満そうに道真が時康を見た。

「どうかされたか、道真殿」

不満そうな道真に気付き、時康が尋ねると、

「……本当に、心得て居るのでしょうか」道真が時康を睨んで尋ねた。

「ふん、どうやらわしは、道真殿には信頼されて居らぬ様じゃな」
「いや、そう言う意味ではないが……」

冷たい笑みを浮かべる時康の言葉を聞いて、道真は思わず目を逸らした。

まだ、歳若い時康から目を離す事に、道真は漠然とした不安を感じていた。

「では、若。我は北へ向います」

「うむ」

憲正が時康に挨拶をして一礼すると、

「続け！」と、後ろの兵に腕を振り上げ命令し、北へと飛び去って行った。

「では、我も行って参ります……」

「うむ」

道真が顔に不安を浮かばせ、時康に挨拶をし一礼をする。

道真は、時康が心配だった。

妖力も秀でて強く、武芸の鍛錬を怠らない時康は、既に立派な若武者では有ったが、従兄弟として生まれた時から時康を見ていた道真にとって、自分より若い時康が、まだ大人に成り切れて居ない所が心配で仕方が無かった。

道真は、硬い表情で振向くと、後ろの兵に向って大きく手を振り、「続け！」と、命令し南へと向った。

「暗くなって来たね……皆どうしてるかな……」

「そうね……携帯も圏外だし……」

腹も空いて、森の中で、どうすれば良いのか分からない龍士と明日香は途方に暮れていた。

「どうかしたのか？」元気の無い二人を気遣って、葵が声を掛けた。
「暗くなって来たし……お腹空いたし……今日、帰れそうに無いし……寝る所も無いし……」

明日香が、物悲しくポツリポツリと言うのを聞いて、

「そうじゃったの……人のお主らでは、此処では過し難いのう……」
と、葵が同情した。

「せめて帰り道が分かれば……」

「方法はあるぞ」

「えっ！」

「どうするの！」帰れる可能性に二人は顔を輝かせる。

葵に迫る様に尋ねる二人に、

「うっ、じゃが、人のお主らでは難しいぞ……」と、戸惑いながら葵が答えた。

「そりゃ、私達、空を飛んだり出来ないけど、山を降りる道さえ分かれば何とか……」

「いや、そうではない」

明日香の言葉を葵が遮ると、

「どう言う意味？」と、不思議そうな顔で龍土が尋ねた。

そして葵は、此処が化物達の隠れ里である事と、天然の結界に囲まれて空間が迷路の様になっている事を明日香達に説明した。

「じゃから、初めて此処に来た我も、容易には出られんのじゃ」

自分達の常識の中に無い、環境を説明されても、二人は今ひとつ理解出来ないでいたが、普通に歩いて帰れない事は理解出来き、途方に暮れていた。

「でも、方法があるって……」

葵が話した僅かな可能性に、明日香は縋る様に尋ねた。

「迷路の様になっていいる道順を、正しく進めば出られる」

「……それって、どうやって正しいって判断するの」

「それは……人のお主らでは無理じゃ」

「そんな……」僅かな希望が、絶望へと変わる。

「懸念いたすな、これも何かの縁、我が付いて行ってやる。我も此処から出ねば成らぬからな」

「本当！」再び明日香は、満面の笑みを浮かべて顔を輝かせる。

「本当じゃ」葵は明日香の笑顔を、優しい笑みを浮かべて見ていた。

明日香と龍士は笑顔で顔を見合わせ、思わず手を握り合って喜んだ。

そして、明日香は葵へと近付き、葵の両手を握って、

「お友達に成りましょう！」と、言った。

「えっ？」

突然の事に戸惑う葵を無視して、

「ねっ、お友達よね！ねっ、良いでしょ！お友達！」と、明日香は葵の手を強く握った。

「そうじゃな……別に構わぬが……まあ、よろしく頼む」

明日香の強引な態度に戸惑いながらも、明日香は笑顔で承諾した。龍士は、はしゃぐ明日香の姿を見て、別に変な所が有る訳では無いのだが、昼間の時と言い明日香は友達と言う事に、拘っている様な印象を受けた。

「あっ……」はしゃいでいた明日香が、急に静かになって、辺りをきよるきよると見回し始めた。

「どうかしたの？」

明日香の挙動を不審に思った龍士が明日香に声を掛けると、

「……ちよつと……ね……」と、明日香は口籠りながら答えた。

「えっ？おい……大丈夫か……」

そんな明日香が心配になって、龍士が再び明日香に声を掛けながら近付くと、

「良いから来ないで！」と、言って森の奥へと向った。

「まで！」葵が大声を上げて、森の奥へと向う明日香を止める。

「えっ？」明日香は大声に驚き、思わず立ち止まり葵へと振向く。

「不用意に動くな。此処は隠里ぞ。道に迷えば、人のお主では戻れなく成るぞ」

「えっ、そんな遠くには行かないわよ……ちよつと其処までよ……」

もじもじしながら言い難そうに答える明日香に、

「少しでもじゃ。油断するな。何処で結界が変化しているやも知れん。良いか、結界が変化している箇所では、通った道、例えば木々

の間とかは、行きと同じ場所を通らねば元には戻れんのだぞ」

「えっ、そんなにシビアなの……」葵の説明を聞いて、明日香は戸惑っている。

明日香は暫く考えて、

「目、瞑って……」と、龍土にぼそりと言った。

「えっ？」

何の事か分からない龍土が聞きなおすと、

「良いから、目を瞑ってあっちを向いて！」

「えっ、でも……」

「鈍感！分からないの！あっち向いて目を瞑ってよ！早く！それと耳も塞いで！早くして！漏れちゃうう！」

足踏みしながら必死で訴える明日香の言葉を聞いて、

「あっ……」やっと龍土は明日香の訴えが何であるか理解出来た。

「はやぐじでええ！」泣きそうな声で訴える明日香。

「あっ、ごめん……」龍土は言われた通り、目を瞑って反対側を向いて、耳を塞いだ。

明日香は、龍土の姿を堪忍する暇も無く、皆を見失わない程度の所まで走って離れ、スカートをたくし上げると、白地に可愛い猫のキヤラが、お尻の部分にプリントされたショーツを慌てて摺り下げ、しやがみ込んだ。

「……」

「おなかすいたあ……」

「へっ？」

「お腹空いたって、言ったの」

翔子が、洞穴の外に居る三匹の河童に向って訴えた。

翔子達は、ちょうど二人が並んで寝そべる事が出来る程度の、洞穴の様な岩の裂け目を見付けて其処で今夜は眠る事にした。

邦彦は外で寝る事にして、洞穴に枯れ草等を敷き詰め、ベッドメイキングが終わった翔子が河童達に、空腹である事を訴えた。

「それで……わてらにどうしろと……」

翔子の訴えを聞いて、一匹の河童が戸惑いながら問い返すと、

「なんとかしなさいよ」と、翔子はあっさりと答えた。

「なんとかって……」河童達は呆れた顔で、顔を見合わせている。

「早くしてよ」

「魚でも捕って来ましょか……」

催促する翔子に、半ば諦めた様に河童が提案すると、

「早くしてねえ」と、翔子は笑顔で手を振った。

「はぁ……」河童達は大きく溜息を付いて、近くの川へと向った。

暫くして河童達は、丸々と肉付きの良い三十cm近くある鱒を十数匹捕まえて帰って来た。

「おまちです……」と、河童達は笹の葉を敷いて、その上に鱒を降ろした。

「で……」

「で？……」

「料理してよ」

しれっと、河童達に要求する翔子に、

「料理って……」と、河童達が途方に暮れる。

「わてら、普段はこのまま食べてまんねん、料理って言われても……
……どうやってええんか分かりまへんがな……」

「もう……使えないわね」

ぷいっと、河童達から不機嫌そうに顔を逸らす翔子を見て、河童達の目に怒りの炎が上がった。

「兄貴、何でさっき逃げへんかったんや」

「せや、もう、うんざりでっせ」

河童達が顔を付き合わせて話し合っている。

「あほ、これだけしたんや……元は取らんな」

「元？」

「なんやかんや言うても、ええ女やで……」

「せやな、確かにべっぴんや……」

「乳も尻も……わての好みや……」

河童達が、緑の顔を赤らめながら翔子を見ている。

「これから暫くは一緒に居るんや、乳揉んだり、尻触ったりする好機もあるちゅうもんや」

「なるほど……あわよくば、女陰ほしを拝めるかも……」

「そしたら、ぐいっと、わたの一物をつつ込んで……」

にや付きながら、企む河童達の後ろから、

「聞こえているわよ……」と、翔子の感情の無い声が聞こえた。

緑の河童が、真つ青になって体を硬直させる。

暗闇に光る閃光と共に繰り広げられる阿鼻叫喚の凄惨な情景に、

邦彦と亜美は顔を背けた。

――

「……」不機嫌な顔で、木の枝を立て掛けている明日香。

三人は、寝る場所を探すために移動して、切り立った岩肌の場所へと辿り着き、夜露を凌ぐ為に、切り立った岩肌に葉の付いた木の枝を組み合わせる様に立て掛け、三人が一列になって眠られるスペースを作っている。

「これ以上、真つ暗な中を歩くのは危険だから……これでなんとか、夜露を凌いで……」

不機嫌そうに龍土と一緒に枝を立て掛ける明日香は、龍土を無視して無言のままだった。

「今夜は風も無さそうだし……これで良いか……」

飯の宿を完成させて、黙ったままの明日香が気になり、

「さつきからどうしたんだよ……黙ったままで……」と、龍土が明日香に声を掛けると、

「べつに……」と、明日香は素っ気無く答えた。

年頃の少女が、男性の直ぐ傍で用をたしたと言う事が、明日香にとっては、人生の敗北にも思えるほどの屈辱だった。

そんな事とは露知らず、鈍感な龍土は不機嫌な明日香に、どう対処して良いのか分からずに戸惑っていた。

其処へ葵が帰って来た。

「どつじゃ、こんな物でも食べるか？」

葵は、両手に小さな筍たけのこを抱えて帰って来た。

「わあ、筍！」明日香の顔に笑顔が戻る。

「えっ、でも……筍って苦手だな……」

「どつして、美味しいわよ。ちよっと早いかも知れないけど」

龍士は、やっと、明日香が話してくれた事は嬉しかったが、筍は苦手だった。

「こんな時に好き嫌いなんて贅沢言わないの！」

「だって、硬いし、あくがえぐいし……」

「何言ってるの、旬の若い筍はえぐみも少なくて、柔らかくて美味しいのよ」

嫌がる龍士に明日香が、筍の説明をする。

「食べにくいのであれば、焼けば食べ易くなるぞ」

二人の話を聞いて、葵が提案すると、

「でも……火なんて無いし……」と、龍士が渋る。

「ほほほ、子供の様じゃの……よい、我が焼いてやる」

龍士の渋る姿を見て笑った葵が、筍を地面へと並べる。

そして両手を翳すと手に青白い炎が燈り、辺りを仄かに照らす。

「わっ！」

「すごっ！」葵の狐火を見て、二人は驚き半分感心する。

大きな狐火を一つ落とし明かりにして、そして小さな狐火を幾つか燈し、筍の上に落とす。

暫くすると、香ばしい香りが辺りに漂った。

「もう良いじゃろ」葵が筍を明日香に差し出す。

「いただきますあす！」明日香は笑顔で受け取ると、熱い所に気を付けないながら、筍の皮を剥き出した。

「どつじゃ、食べるか？」

「……うん」差し出された筍に、龍士は少し躊躇ったが、空腹には勝てず、この際仕方が無いと決心し、筍を受け取った。

まだ熱い皮を剥いて、龍士が恐る恐る、一口、筍をかじると、

「あつ……美味しい……」と、初めての味に感動した。

「でしょ」明日香は得意げに龍土に言つて、二つ目の筍の皮を剥きだした。

そんな二人を微笑みながら見て、葵も筍を食べ始めた。

「ねえ、でも、あの学校に現れた化物達に追われてるって、結局は誤解なんでしょ」

筍を食べながら明日香が葵に尋ねると、

「そうじゃな、時貞様が我の腕の中で息を引き取られる所を、時貞様の家臣が見て、我が殺したと思つたみたいじゃ」

「そんなの、葵さんが遣つてないって、ちゃんと説明出来なかったの？」

「……話した所で……いや、どう話せば良いのじゃ……我は敵方の姫ぞ」

「そんな……」悲しそうな顔で話す葵の話聞いて、明日香も悲しそうな顔になる。

「二人が慕い合っていた事など、言えるはずも無く……その上、事が大きくなった今では、我は帰る訳にも行かず……」

「葵さん……」龍土も葵に同情している。

「何時もそうよ……結局は、親の都合のせいで、何時も子供が迷惑するのよ……」

「えっ？」

突然の明日香の言葉に、龍土は何の事かと明日香を見た。

「そうよ、親どうしが、いがみ合っているなら勝手に喧嘩すれば良いのよ、子供を巻き込むなんて迷惑でしかないわよ……親なんて……」

嫌な事を思い出したように、悲しい顔で話す明日香に、

「どうかしたのか？」と、龍土が心配そうに声を掛けた。

「……」明日香は黙つたまま、三人の中央で燃えている狐火を見詰めていた。

「葵さん達は愛し合っていたのに……凄く愛し合っていたのに……」

なんで、こんな酷い目に合わなくちゃいけないのよ……可哀そうよ……
……そうでしょ！」

静かに話していた明日香が、急に龍士に向って叫ぶ様に同意を求めた。

「えっ、う、うん……そうだね」急に聞かれて、龍士は戸惑いながら答えた。

「親の犠牲になる必要なんて無いじゃない！親同士がもめてなかったら、葵さん達は今頃、幸せに二人で居られたのに……そうでしょ！」

「う、うん……」

龍士を睨み付ける明日香の目に、涙が浮かんでいた。

「橘……お前……」

龍士が涙に気づいた事に、明日香は慌てて袖で涙を拭い、龍士から顔を背けた。

「橘、どうしたんだ？」

心配して、尋ねる龍士に、

「な、なんでも無いわよ……」と、明日香は、顔を背けたまま答えた。

……

「ご馳走様……」翔子が二匹の鱒を食べて、丁寧に手を合わせる。

結局、枯れ草をほぐし、翔子の静電気で火種を作り、焚き火で魚を焼いて皆で食べたが、河童達は生のままで食べていた。

「山添、お前もう良いのか？半分ほどしか食べてないじゃないか」

亜美の隣に座る邦彦が、亜美の小食を心配している。

「そりゃ、今日一日で、いろいろあったもんね。食欲も無いわよ」

翔子が前から邦彦に言うと、

「そりゃそうだけど……」と、二匹をペロリと食べた翔子の食欲に呆れた。

「でも食べないと体が持たないぞ、これから三日は歩かないといけないのに」

心配そうに見詰める邦彦に、

「うん、大丈夫……」と、亜美が少し頬を染めて笑顔で答えた。そんな二人を見て、

「何？二人とも……ふうん……」と、翔子がニカツと笑みを浮かべて、

「田原本君、なんなら寝る場所変わってあげようか？」と、冷やかした。

「なっ！何、何を言ってるんだ！」

邦彦が顔を真っ赤にして、翔子に怒鳴ると、

「ふふふふ」と、翔子は更に、冷やかす様な笑みを浮かべる。

そんな二人をの話を聞いて、亜美も、燃えている焚き火以上に顔を真っ赤にしていた。

「ば、ばかな事言うなよ……山添が困ってるじゃないか」

更に、冷やかしネタに油を注いだ邦彦に、

「あら、田原本君って優しいのね……山添さんには」と、案の定、翔子は更に冷やかした。

二人は真っ赤になって黙ってしまった。

なんだかんだと言っても、慣れない環境でも、遅しく生きている五人であった。

腹も満たされ、五人の巻き込まれた高校生達が眠っている頃、

「時康様、有りました。隠里の入り口です」と、一人の若武者が時康へと報告した。

「やっと見付けたか。よし、行くぞ」

「はっ」

若武者は返事をして一礼すると、案内するために飛び立った。

その姿を見て、時康は、

「続け！」と、軍勢に号令を掛け、若武者を追って行った。

そして、時を同じくして、憲正と道真の軍勢も隠里の入り口を見つけ、隠里へと侵入した。

「あれ……行っちゃいましたよ」

白雪が、時康の軍勢が飛び去るのを見て、白蓮に言うと、
「いないある……」と、白蓮は白雪の言葉に気付く事無く辺りを見
回している。

そんな白蓮を呆れた顔で見ながら、

「もう隠里に入ったんじゃないのかな……」と、もう、どうでも
良いやと言う態度で、白雪が呟いた。

「じゃ、私達も入るある」

「えっ、隠里に？」

「行くある」

そう言つて、白蓮はワンピースのスカートの裾を捲り、何処にし
まつてあつたんだと思わせるぐらい大きな扇子を取り出した。

綺麗な羽飾りと彫り物がしてある扇子は、巾が五？以上あり、長
さも五十cm以上あつた。

「えっ？ちよつとお姉様、まさか、結界を破る気？」

白蓮が扇子を取り出したの見て、白雪が驚いて尋ねた。

「こんな結界、ちよろいある」白蓮が扇子を振り上げる。

「あつ、駄目よ！お姉様！」白雪が慌てて白蓮を止める。

「なんであるか？」止める白雪に、不満そうに尋ねる白蓮。

「隠里つて天然の結界でしょ。幾つ物結界が微妙なバランスで折り
重なっているのよ。そんなの私達の力で壊したら、バランスが崩れ
て、それこそ大事おかしになるわよ」

白雪に、窘められて不満そうに頬を膨らませる白蓮に、

「お兄ちゃんの手前もあるから、余り目立つ様な事はしない方が良
いわよ」と、白雪が更に釘を刺す。

「じゃ、どうするあるか？」

「入り口を探すしか無いでしょ……」

「面倒ある……」

いい歳して、駄々っ子の様に唇を尖らせ、頬を膨らませる白蓮を、
白雪は呆れて見ていた。

「まあ、とりあえず、探しましょうよ」

白雪が笑顔を浮かべて、白蓮を宥める様に促すと、

「分かったある……」と、白蓮は渋々同意した。

「で……」

「で?……」

「どっちに行くあるか?」

「もう、分かんないわよ……」

「じゃ、とりあえずこっち……」

「とりあえずって何よ?」

「とりあえずはとりあえずあるよ」

などと、二人は話しながら、隠里の入り口を探し始めた。

一方、白金丸は、

「信貴か……あつ、此処だと石川の良子ちゃんが近いな……あつ、いや、そんな暇は無いんだ……」と、少しは真面目に仕事をする気に成っていた。

「なるほど……隠里か……厄介だな……そう言えば、さっきの狸の小僧から変な気配がしたな……まさか、あいつも神杖を持ってるんじゃない……ああ、面倒だな……しょうがない、急ぐか」

そう言つて、白金丸は両手を差し出し、手を光らせると、

「よっこらしよ……」と、結界を開き、

「どっこいしよ……」と、開いた所を通り抜け、

「あらよつと……」と、開いた結界を閉じた。

隠里にあっさりと侵入した白金丸は、

「さて、どっちに行くかな……」と、辺りを見回した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236w/>

貧弱能力者と狐狸魍魎

2011年9月30日03時27分発行